風流話の泉

えろちかる・ぽけっとぶっく

原　比露志著

風流話の泉

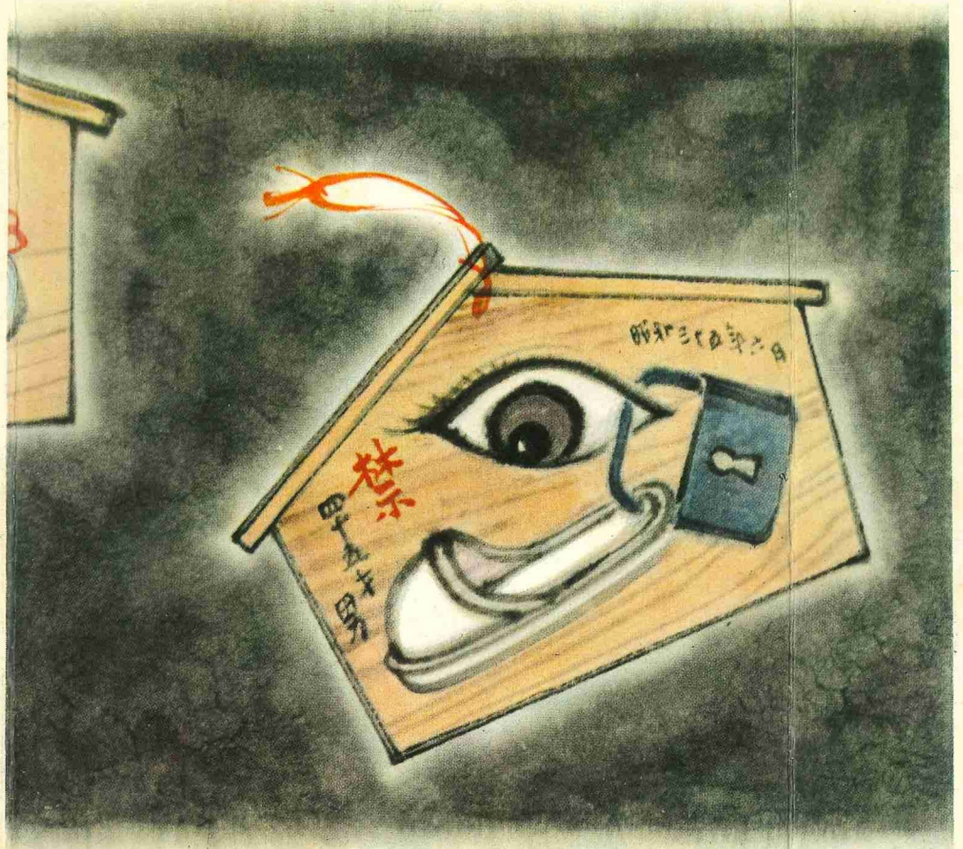
えろちかる・ぽけっとぶっく

原　比露志著

風流話の泉

えろちかる・ぽけっとぶっく

原　比露志



¥ 130

図書目録など贈呈

三輪でヴァラエティに富んだ、あまとりあ社の新書版はお気に召しましたでしょうか。本社ではこのほかにも、すでに江湖に定評ある結婚愛の探奥指導書や興味溢れる風俗研究書・風流読物など、皆さまの御要求にピッタリ合った内容を盛って、ぞくぞくと出版されて居ります。

御希望の方はハガキで御申込み下されば、くわしい解説付きの図書目録や新刊案内を無料でお送りします。

えろちかる・ぽけっとぶっく

――風流話の泉――

1860年

夫婦夜話……(6)
艶笑お国自慢……(116)
風流話の泉……(162)
粋人物知り手帖……(174)

夫婦夜話

装幀　喜多玲子

姫始め

昔から〝初夢〟は正月二日の夜に見ることになっているが、さて、この二日の夜に素晴らしい初夢を見た人は果してどの位あるだろうか。大正の初め頃までは霜夜を「宝船々々」と呼んで、粗末な七福人をのせた木版刷りを売りにきたものである。これを枕の下に入れて寝ると、一富士、二鷹、三茄子の縁起のいい夢がみられたものだそうだが、今日ではとてもそんな悠長な夢をみていられない日本人にとって、あんまり悪夢が長すぎた。併し、今年辺りからせめて夢だけでもお互いに持ちたいものである。

ところが、二日の夜は「姫初め」といって新年最初の夫婦生活を行う日とされた。成程、大晦日が徹夜で元旦の夜は眠くてそれどころではなかったのだろう。そこで「かかあどの姫初めだと馬鹿をいい」ということになり、物堅い女房は「夢をみてからはじめなと嫁律義」ということにもなる。その挙句が「宝船皺になるほど女房漕ぎ」、「福の神するを見給う二日の夜」といったユーモアも湧いてくるのだ。

歌留多

小倉百人一首の歌がるたは新年の代表的な遊びだ。金屏風をたて廻した座敷に緋の毛氈を敷いて、島田に振袖の若い娘達と袴羽織の青年がずらっと明るい灯の下に並んでするこの競技は、何とも天下泰平な日本的情趣のあるもので、ダンス・パーテイなぞと違った和やかさがあったものだ。

一高生間貫一君がここでお宮嬢と遊び、キザな紳士富山がここぞとダイヤの指輪や金時計をひけらかすのも宜なる哉のチャンスだったろう。

この歌留多がとれるかとれないかが、文字が読めるか読めないかの標準にもなっていたようだ。「歌がるた見物をする羞しさ」という川柳がある。百人一首ほど江戸時代に普及した遊びはない。川柳のバレ句などをみても、百人一首をもじったものがかなりある。「新しいうち女房は沖の石」の類である。

七草

芹、なずな、ごぎょう、はこべら、すずな、すずしろ（大根）仏の座を春の七草といって、正月七日には若菜七種をとりあわせて七草粥を作って食べる習慣がある。これは無病息災なんかのおまじないなんだが、この頃では、こんな野草をわざわざ探してまで粥をたく暇人もなくなったろう。

ところが、この日に限って、これらの七草をまないたにのせて叩くのはご亭主の役になっていた。男尊女卑の封建時代でも、年に一度ぐらいは亭主左衛門が早起きして、嬶殿の薪炭の労を思い知れという訳なのかも知れない。不器用な手つきで、とんとんと菜を叩いているのを床の中で女房がにやにやしながらみている図なんてのは、全く夫婦円満のおめでたい漫画だったことだ。「七草を寝床で笑うつらにくさ」起きてる亭主と寝ている女房の間に二言三言冗談が交わされているうちに、ついふらふらと円満すぎる気分がでて「七草を叩いてしなと女房言い」ということになるのも微笑しいことだったのではあるまいか。

庚申

川柳に「今日は庚申だと姑いらぬ世話」というのがある。庚申（かのえさる）の夜には男女交合を忌むの風が江戸時代にあった。この夜に精子が子宮に侵入して懐妊すると、盗人の子が生れるというので

ある。

これは勿論、迷信である。かのえさるのさるが去るに通じるので、縁起をかついで結婚式の日取りを除けたのが、いつのまにか婚礼ばかりでなく夫婦間の交合日にまで及んだのであろう。そこで川柳子はこれに目をつけ大いに好色家の江戸っ子を哺喩したものである。

「かのえ申女房を口説き落すなり」というご亭主もあれば、新婚者は「新世帯七庚申もするつもり」ということになり、「盗人の子もできようと姑言い」ということにもなるのである。

「尻をするぶんはかまわぬかのえ申」は蔭間の句であろうが、天下泰平となると、こんなところにまで罪な神経を働かせたものらしい。

水祝い

「腹のたつ顔もまじって水あびせ」という句がある。これは地方によっては正月の十五日に産土社に参詣する新夫婦に水を頭から浴びせると言う風習である。だから惚れた女を他の男にとられた腹立ちまぎれの奴もいる訳で、岡焼半分の連中と一緒に花婿めがけて水を浴びせるのである。

この風習は東北から中部地方、中国、四国、九州にも散見できることであるから、恐らくは相当に古くからあるものだろう。結婚式や正月に花嫁に墨を塗る風習もあるが、これらと並んで、新婚の婿いじめでもあり、また悪魔払いの浄めであったのかも知れない。

クリスト教が洗礼に水を尊ぶのと同じに水というものは何か神聖視されていたのだろう。元旦に汲む

水を若水と言って、若い者に汲ませるということもその一つの表われである。

陰陽石

金沢の兼六公園、岡山の後楽園、東京の後楽園等天下の名園に必らず陰陽石がある。主に自然石で男根女陰の姿を象どった一対の石で夫婦岩、女夫石などと呼ばれている。恐そらく古代の生殖器崇拝から糸を引いたもので、庭の鎮めと言ったような庭師達の迷信からきたものと言うべきなのだろう。

注意してみていると、それほど形は似ていなくとも陰陽に象どった石が大抵の名所にはあるもので、寝覚床、厳島、奈良三笠山、日光などにもあったと記憶する。これらはどっちかと言うと小形のものだが、日向の岩瀬川の陽石は高さ二丈四尺、周囲九間でその裾に陰石を備えて規模雄偉なものがある。これに負けない美濃大井、長野県鹿教温泉の傘岩なども奇形ではあるが名高い。

陰石では東北本線の福島に近い松川駅にあるのが頗る豊満で実感味をもっていた。近くでは大磯の虎御石、鎌倉八幡の政子石などというのがある。古代人のおおらかなエロチシズムを春の行楽のついでに探してみるのもアベック連れらしいたのしみだろう。

長命丸

「能書にひりつくべしは何事ぞ」という長命丸はお馴染みの両国薬研堀四目屋忠兵衛が売りだした江戸時代の男性使用の媚薬である。どんな処方によったものか判らないが、宣伝には阿蘭陀秘方とあって事前一時間に唾液で溶いて陽根に塗るのだと言う。「そのときひりひりとすべし、驚くべからず」とその効能書にあるところから冒頭の川柳が生れたのだ

が、愈々直前になったら、これを湯茶か小便で洗い落せと言うだ。然らば耐久時間の延長、強腎、避妊の効、男女ともに快美の極に達し得られ、オルガスム直前に湯茶を飲めば益々佳しと称している。刺戟の強いものらしいことは想像がつくが、射精時の自在だとか避妊に適くなどというのはいささか薬九層倍のハッタリだろうとしか思えない。「びりびりを洗い落して浅黄待ち」などいう句意もこの館書の穿ちである。浅黄とは田舎待の蔑称である。

女正月

女正月と言っても寝正月のように、女ばかりを相手にして正月を暮すと言うのではない。女の正月という意味である。昔は万事男の天下だったから、十五日までは男子が回礼などに外出し、女子は家にいて、十五日過ぎに初めて女子の年始廻りなどが始ったものなのである。特に京阪では、十五日を女正月と決めて遊び楽しんだものだと言う。

前年に嫁入してきた花嫁が、結婚後初めて隣家を訪ねて挨拶をするのもこんな時である。だから「門松のすっこむ時分の嫁の礼」と言う訳になり、「嫁の礼町内中へ首が出る」ような賑やかさもみせた訳だ。まだ羞恥心の強い花嫁には誰か介添がついた。「嫁の礼如才ないのがついて出る」である。昔はこの回礼なんてこともなかなか喧しかった「ぬきぬきに廻って嫁は憎まれる」など、年始にいってまで文句をつけられたのだから全く窮屈な世の中だったものである。

節分

「福は内、鬼は外」と豆を撒くのは年越しの節分に行う追儺式だが、おかめの面を冠って角の生えた鬼を追っ払うというのは女房が嫉妬した亭主をほうりだすお呪禁みたいでもある。昔は子安貝だの女握りなどといって指で作った妙な形で悪魔をよけたものだから、女陰の陰語である豆を弾丸に使って投げつける理窟は一応通ることかも知れない。節分の夜に、京都の大原の江文神社では、古来から氏子の男女が集って雑魚寝をする風習があった。大原の雑魚寝といって古歌にも歌われ、西鶴の好色一代男の中にも庄屋の内儀、娘、また下女下人に限らず、老若の分ちもなく神前の拝殿に、所のならいとて猥りがましく打臥して、一夜は何事も許すとかや」とあって、なかなかエロチックな乱婚的な行事だったらしいことが判る。

川柳に「若水で雑魚寝のへのこ洗うなり」というのがあるが、これなどは明らかに大古の共同婚の遺風だといわれている。アプレゲール派垂涎の行事でもあろう。

京都島原

京都は歴史が古い、江戸の吉原は何度も火事にあって今日の姿は昔を偲ぶよすがも残っていないが、ここは空襲さえ避けて貰ったと言う国際的な古都である。流石に在原の業平がここに居続けをして馬を引いて帰ったなどと言う話はきかないが、連綿として電灯も使わず行燈で夜の灯りをとっていた床しさが今も残っている。戦後の今日では遊女と言うものが法律で消えてしまったからどう言うことになっているのか知らないが、ここの太夫の権威は先年まで立派に保たれていた。いやそればかりでなく角屋が代表する島原遊女屋の古建築としての価値だって国宝級のものである。西鶴が描き、京阪の富豪角倉了意だとか、菱屋某が贅沢の限りを尽した跡もそのまま

に偲ばれる。大石内蔵介のだらだら遊びで名高い祇園の方は町中にあったため、変り方も甚だしかったが、都の外にあったここは土地も建物も人柄もまずまず昔ながらの面影を備えていて懐しい

割礼

女子の無毛症(かわらけ)を蔑視したように、男性の包茎を我国では大いに軽蔑した。「越前は蔓のでそうなへのこなり」と言う句の越前は包茎のことで、越前国福井藩の槍袋が鮫の皮を用いて形が似ているので、江戸時代にかく呼んだのである。

包茎が何となく一人前らしくないのは大人になると亀頭が外に現れるからであるが、外国人にはこれが案外に多く、ヨオロッパからアジアにかけては割礼といって包皮を切断する風習もあった。エジプトの紀元前二千年のミイラにもこれを施したものがあるし、石に彫った浮彫絵画にも割礼の図がある。

ユダヤではエホバがアブラハムの子はすべて割礼を受くべしと教えたので、クリストも幼時にこれを受けた。生理学的には普通の包茎がそれほど男女の交りに障害となるものではないのだから、この風習も古代の宗教的な受苦の型式化したものだとか、元服の一種と言えるのかも知れない。

こけし(小芥子)

東北地方に旅行した人は必らず土産に小芥子人形を購ってくる。郷土玩具として地方色豊かで机の上に置いても、ピアノの上に飾っても悪くない。岩代の飯坂温泉、陸中の一の関などが名高いが、今ではどこにでも大小さまざまのこけしが作られていて、そろそろどこが本家か忘れられ、木製ばかりでなく陶製のものさえでてきた。

もともとこれは小芥子這子と言って縁起的の意味をもった玩具なのであるが、その形状から言ってどうも古代の陽物崇拝のファリシズム的遺物らしい。つまり石棒や男茎形の変形なのである。そう言う目で眺めると、女学生の本棚や奥様の鏡台の上にこれが載っている姿は、何とも微笑ましきものになろう。然も近来これが張形の代用品として女性の自慰に用いられると言うことだが、今度は再びこけしの意味が本来の用途に戻りつつあると言うことにもなる。世の中と言うものは面白いものだと、こけしを眺めても嘆ぜられることなんである。

毛

大象をも繋ぐという髪の毛と、もひとつは第二性的特徴の陰毛、ともに女にとっては大きな関心となるとこだ。あるべきところにない毛の歎きが雑誌の衛生問答係を盛んに悩すということである。「十六で娘は道具揃いなり」「十六の春から稗を蒔いたよう」「時候たがえず十六の春に生え」といって江戸娘は十六歳を標準発毛期として「毛の生える時分寝像がちと直り」など、言われていたが、これは今日の標準からみて決して早くはないようだ。この毛をギリシャ、ローマでは剃刀やランプで焼ききってつるつるにしていたので、その遺風はアラビアや中国にも伝わったが、我国では「かわらけはさっぱりとした片輪なり」と言って局所無毛女を嫌がったのである。「毛がない」は「気がない」に通じて株や勝負事をする人には禁物だったと言われるが、毛切れを嫌って遊女などが多少の除毛をしたことは後でご紹介する通りである。

「女房の毛は十六で生えたまま」とは素人で除毛をしてないということ。また「上下のまっ黒になる

縁遠さ」などという毛でオールド・ミスを笑った句もある。

女靴

我国の女性も洋服を常用するようになったが、まだ西洋のように靴に対する特別のエロトマニアは余りみられないようだ。女靴と言っても踵が曲って泥のついたお寒いものではエロチシズムを感じないのも無理がないが、西洋でも十八世紀頃のレースの飾りのついた綺麗な女靴なら実際掌にのせて愛撫したいような可憐さのあったものに違いない。西洋でも支那でも裸の胸をみせない風習があった処に特別な靴への魅惑もあったので、素足の美を説いた我国に靴に性的な連想が浮び上らないのも自然かも知れない。靴のエロチシズムは腿から腰への上向的意味からばかりではなく、可愛い靴で蹴られたり触られたりする快感があるので、それには先ず美しい靴がなくてはならない。中国の纏足も足に対する嗜虐症に基づくもので、中国の女靴の優美さは流石に美しいお伽噺的雰囲気をもっていた。ズロースや腰巻ばかりでなく女靴の蒐集家がでてくるようにならないと落ちついた平和な文化は我国に起らないのかも知れない。

早婚

女子人口の過剰で結婚年齢が伸び勝ちになった一方で、少年少女の性的経験年齢が早くなってきたのも戦後風景の一特色かも知れない。十五の中学生が、十八の高校生と通じたりして、教育家慨き、宗教家嘆ずる傾向が多いから、ここに早婚代表的例証を平安朝の宮廷史から拾いだしてみよう。次の表は当時の天皇皇后の結婚年齢である。

文徳天皇	（十六歳）	皇后明子（十八歳）
清和天皇	（十六歳）	皇后高子（二六歳）
醍醐天皇	（十七歳）	皇后穏子（十八歳）
村上天皇	（十八歳）	皇后安子（十九歳）
冷泉天皇	（十八歳）	皇后懐子（二六歳）
円融天皇	（十五歳）	皇后媓子（二八歳）
一条天皇	（十一歳）	皇后定子（一五歳）
三条天皇	（十六歳）	皇后妍子（十九歳）
後一条天皇	（十一歳）	皇后威子（二十歳）
堀河天皇	（十五歳）	皇后篤子（三十四歳）

これが旧式な数え年だとすると全く十一歳の花婿に二十歳の花嫁などと言うのは漫画のようでもあろう。若い兼風俗が青踏社以来のことでないことも知っておいてよいことである。

鏡

鏡は神社のご神体にもなっているし、女性の鑑のようにも言われた。明鏡止水、心の有様をそのまま写すという観念もある。深夜、暗くした部屋のまん中に鏡をおいてこれを覗くと、処女ならば未来の良人の姿もみられるものだとも言う。何となく神秘的で、凄味さえもっている日常のお道具だ。

この神聖なる鏡も使い方ではエロチックな小道具にもなる。潜航艇の潜望鏡を利用して女湯を覗いて娯むという仕掛もできるが、これも鏡の反射の応用である。マルセイユやパリののぞきと称する他人の性交場面を覗く見せ物も鏡を利用したもの、上海の魔鏡は本物の鏡ではなく女性の除毛した陰阜を鏡にたとえた同性愛的見世物だが、便所や寝室の四壁はおろか上下左右すべて鏡張りにした設備を誇った女

郎屋も曽ってあったものだ。これは人間の覗きの心理を摑んだもので、夫婦の夜の営みに鏡を利用して複雑さを加える技巧も遊戯的ではあるが、倦怠期などには考慮されてよいことだろう。

初午

梅馨る如月の寒天にドドンカドンドンと響くのは初午の太鼓であるが、ここで言う初午というのは女子の初経のことである。馬というのは月経の異名である。「花に馬繋いで七日淋しく寝」「奥様の御馬も羊ほど（紙を）くらい」「そこここをおさえて女馬に乗り」の馬である。女の子の初潮にはフランス辺りでもお祝いをするということだが、我国でも赤飯を焚いて祝ったものである。「もう娘花見に小豆飯をたき」「兄は訳知らずに祝う小豆飯」「小豆飯ほったて尻で娘喰い」「こわ飯の礼に娘は赤面し」等。花が咲くとか初花というのも初経のことで「初花が咲くと垣根の母支度」「十二三お酒落豆に花が咲き」などと言うのもある。初潮が十三歳というのは今日からみるとひどく早熟で、数え年だと小学校六年生になる勘定だが、江戸の下町娘は「十三ばっかり毛十六」といって、川柳などは十三ということになっていた。十五で嫁いだ時代だから無理がないのかも知れない。

猫

猫は魔物だという。同じ家畜でも犬ほど人間の気持に媚びないからだろうか。と思うと猫撫で声、猫を冠る、猫のようにおとなしいとも言う。猫撫で声は人間の方のことだから別だが、魔性と言われる猫が、おとなしいと言う形容に使われるのは妙である。

猫の皮では三味線を張る。だからそれを持つのを商売にする芸者を猫と呼ぶのかも知れないが、三味線も碌に持てない猫がこの頃は多いのじゃあるまいか。

お妾さんは見越しの松の黒塀の中に住んで、猫を飼うのが常石だと言うことになっているが、芸者の隠語を猫と言うように、フランスでも猫と言うと女性の急所を指すことになっているらしい。黒猫と言えばもっと具体的だ。黒猫に逢うと縁起が悪いと言う迷信も外国にあるが、黒猫を飼うと幸福がくると言う迷信もあって、どっちが本当か判らない。英語ではキキとかミミと言う隠語を用いる。これも猫の愛称から転じたもので、プッシイなんかも悪くない。夫婦の寝室用隠語にご採用になるに相応わしい言葉ではなかろうか。

枕絵

枕草子の枕は枕の傍においてよしなしごとをノートしておいたと言うような枕辺、机辺といった軽い意味であるが、枕草紙は寝るときの閨具である枕の傍において、煽情的な刺戟を受けるための草紙の意味である。

倦怠期の回春に、不感症な妻君の教育に枕絵が相当の効力を持っていることは、今日でも一般に唱導されていることだが、江戸の道学者先生達はそう言う実際的な効力をわざわざ無視して、尤もらしいこじつけの存在理由を工夫したことである。

まず枕絵は虫害を防ぐと言う。それで箪笥や長持にいれておく、武士の鎧櫃は必らずこれを入れたとさえ言われており、火事のお厭勝にきくということも信じられていた。枕絵師月岡雪鼎の絵があったた

め類焼を免れたなんて言うことが学者の随筆の中にれいれいしく書かれているのだから面白い。だが、今日では枕絵の厭勝がもっと実利的である。これをもっていると運が向いてくるといい、財布に枕絵を入れておくと金に困らないと言うのだ。枕絵の効力は本来の効力に帰るべきだろう。

言葉

あまり公然とは言えないような言葉が、日常語の中に忍びこんでいるものである。例えば何々に「毛の生えたような」というような言葉は平気で奥様やお嬢様の間でも使われているが、これは勿論大人になったしるしに生えるあそこの毛からきた言葉であろう。いちゃつくことを「乳繰りあう」というが、これまたオッパイを弄り合うということで何ともどぎつい言葉だ。この頃の奴は「おやかっているぜ」などと紳士諸君が口にする「おやかす、おやす」というのも勃起ということの江戸語である。女の子が十三四で結う「桃割れ」という髪の名も「十三ばっかり」を思わせる言葉である。「踊り」という言葉ですら、嫁とりに対する「男とり」や囮からきた言葉で一種のウーイングとかフラテーションを意味している訳だ。古語で女性器をホトと言った。保土ケ谷と言えば女陰の谷ということになって甚だ露骨な地名になるが、ホトケ(仏)というのはどうだろう。ホトの毛で、或は生殖器崇拝からきた言葉なのかも知れませんな。

若草

雪が解け始めて下萠の青さが目に嬉しいと思っていると、やがて春の若草が芽をふいてくる。青春へのプレリュウドだ「時候たがえず十六の春に生え」と言って、十六歳で発毛するのだそうだが、これが何と薄毛もやもやとか、絹糸のような毛五六本と形容されて、いかにも新鮮なエロティシズムを感じさせる。テイーンエイジャアの魅力だろう。

性に目覚める頃の発毛は誇らしさと羞しさの入れ混ったふしぎな気持だ。大人の仲間に入ったと言う誇らしさであり、子供との訣別の悲しみでもある。併し時がきての乳のふくらみや発毛は決して羞じる必要のないことなのだ。性教育が本気で植えつけられねばならぬ危険なる年齢でもある。「あの人完全よ」などと言う女学生の会話がある。完全に毛が生えたということの代名詞なのだ。一人前になったばかりと言うことを毛が生えたばかりなどとも日常語にも使う。麗らかな春の陽を浴びたなだらかな丘に萠えそめた若草を眺めることは、何も年寄りでなくとも愉しいことに違いないのである。

雛祭

三月三日のお祭り、古代の人形のお祓と飯ごと遊びが、お隣りの支那の上巳の節句と結びついて始ったものだと言われている。但し摂津有馬の一地方では、男女児ともにこの日を初節句として男児には天神雛を贈ると言う風習があったと言うから、必らずしも女児に限った祭日でもなかったようである。しかし、この日は桃の花を飾り、蛤を供え、白酒を飲む。桃、蛤、白酒とちょいとエロチックな小道具が並んで、その上にご夫婦の内裏雛を祀るのだから、成程、女の子に相応わしい祭典だ。尤も今日のように内裏雛を飾るのは、江戸中期以後のことだと言うが、飯ごとから夫婦ごっこへ延長したものが民俗的な行事にまでなってきたのだから面白い。この日は友達を招くので筒井筒の幼な馴染みの若衆などが恭

しく白酒をこぼしている図なんかも江戸枕絵の好画題になっていた。「内裏雛寝床へ落ちる新世帯」なんて柳句も歌麿描くの濃艶な図をみるような気がするではないか。

仲条

避妊と妊娠中絶とを今でも混同している人が多いらしい。避妊は予め妊娠を防ぐのだが、中絶は妊娠したものを無理に堕胎させるのだ。貧乏人の子沢山と診にある位だから、我国では古くから間引きといって子供を水子のまま堕す風があった。その方法には農村などではおずきだとかねぎを使ったこともあるそうだが、多少技術的な面での代表に中条流医術というものがあった。

今日婦人病の薬で売りだした中将湯は、中将姫を商標にしているくらいだから、まさかその流れではあるまいが、江戸時代にはなかなか繁昌したものらしい。

「面白いあと仲条が待っている」「仲条へ行くより外の事でなき」とは懐妊した嘆きであり「仲条は後暗くも手間をとり」「張形（自慰用具）がないと仲条まだ流行り」とはその繁昌振りで、「仲条で鼻を鳴らして叱られる」「仲条へ行くに褌下女ねだり」はそのユーモアである。

出替

江戸時代の年季奉公の雇人は三月五日が契約の出替りと定められていた。勿論、重年しても差し支えがないのだが、この日が雛祭りの翌々日だから目立ってみえる。

江戸の下女は川柳では飛んだ好色女になっているし、今も昔も変らず立派な女房をもち乍ら下女に手

をつける男も多かったし、下男だって色気はもっていた。そこで出替りの日は彼女らとの情を裂かれる日にも当っていた訳である。

「白酒に酔って、下女はさせおさめ」「しおさめに雛長持へ押つ懸ける」は、その最後の日の情景であるが、「そちは二世あれは三月四日まで」というのは、下女との密通を女房にふんずかまった亭主が、汗たらたら弁解している図である。「お前さんは二世の契りをこめた仲、あの女は三月五日にはでてゆく女じゃないか、ただのつまみ喰いさ」と言った訳である。まことに雛祭りの後の悲喜交々至る泰平な江戸の情景が偲ばれる行事であった。

土佐日記

「土佐日記」はいまから一〇二〇年ほど前に紀貫之が書きあげたものだが、この土佐日記の冒頭の元旦の項に、有名な我国で接吻の風習のあったことを暗示した「口を吸う」という言葉がでてくる。

いまでこそ宮城前のアベック広場や浜離宮の公園でキッス実演にはいくらでもぶつかることができるが、敗戦前まではこれは異狄の風だとして大いに嫌われ、人に祕した閨房内での痴戯だという風に思われていたので、外国の性学者などは堂々と日本には接吻の習慣がないと断じていたものである。

ところがさに非ず、大和民族あに人後に落ちんやで土佐日記以来「口を吸う」「口寄せ」「口口」「呂の字」「あまくち」「おさしみ」など特に江戸文学にはざらに接吻も登場していた。

土佐日記の中でもひとつ愉しいのは「ほやのつまのいずし」といって、大満幸貝、姫貝と呼ばれる貽貝についての記事があることだアプレゲール文学ばかりでなく、たまには古典もお読み下さい。

裸体

寒い秋田地方では冬でも裸で寝る風習がある。馴れるとその方が寝巻をきているよりも却って暖かいのだそうである。西洋の春画などをみると、まず十中の九までは男女ともに裸であるが、浮世絵の枕絵では、全裸というのはそれほど多くない。浴衣や寝巻、長襦袢の類を羽織ったものが多い。

実際に遊女などでも「深くなるほど帯を解く」で、素裸ということはあられもなく下品のことのように思っていたようだ。これは西洋と我国の寝室の構造からもきているのだろう。鍵のかかる室と、襖一枚でいつ誰でも踏みこめる部屋では大きな心のゆとりの違いがある。

処が、西洋でも普通の夫婦はあまり全裸ということはなかったと言うのである。アメリカのキンゼイ博士の調査によると全裸で性交する者は知識階級に多く、下層社会では裸体は人間らしくない下品なことだと排撃したがるのだそうだ。一体どちらがより人間的なことなのか、これはなかなか含蓄のある実態報告と言えるようだ。

思春期

人間の性欲の最も盛んなのは従来の学説によると二十代といわれている、しかし有名なアメリカのキンゼイの著書「男性の性行為」を読むと、人間の性欲の一番盛んな時代は、思春期だということである。これは驚くべき報告であるが、彼の周到な統計をみると立派にうなずけることである。

その最も盛んな刺戟に応じ易い時代には女親や女教師でも、大いに少年たちの妄想を喚起することになるらしい。そうなると女教師の多いアメリカでは、大いに考えてみる必要があることになる。彼の研究では思春期開始の平均年齢は十三年七カ月となっている。小学校からハイスクールへかけての少年たちである。

日本ではとてもキンゼイのような忍耐強い精密な調査はまだできそうもないが、街にパンパンあふれ、映画もレヴュウも桃色趣味にみち、カストリ雑誌のはんらんする当節、どんな数字がでてくるものか、特にキンゼイの環境を主とした集団的統計を学んでやってみたらと思うことである。

プリアプス

ポムペイ廃墟の美術・工芸を蒐めたナポリの美術館に、ご婦人オフ・リミットのカビネ・セクレ（秘密室）と言うのがあり、春画、準春画が保存されているが、ここで最も目を惹く題材は緊張した巨大なファロスをもつプリアプスという神様の姿であって、これだけは確かに我が浮世絵にも負けない雄大さをもったものだ。

伝説によるとディオニソス（バッカス）とアフロディイット（ヴィナス）の間に生れたのがこのプリアプスで、本来は農業神なのだそうだが、流石に酒神と愛の女神の伜だけあって精力絶倫、決して萎えることのない強腎振りは、ある時代には処女の貞操をその権利として要求したとも言われている。

ただポムペイ遺物では彼が巨大な陽根の所有者であることにちと滑稽味を加えて造形されているのが多いことだ。やっぱり猿田彦や道鏡の類いには異常さが先きに立って可笑しさがつき纏うのでもあろうか。山高きが故に貴からず、徒らに巨大を誇っても意味のないことなのかも知れない。

桃・さくら

春は弥生の桃さくらである。桃は三月の雛祭りのアクセサリーだが、今日の季節ではやはり四月だろう。武陵桃源は桃花に埋れた別天地で、今なら温泉マークの密集部落だと思えばいいのかも知れない。花は赤いだけで梅桜と似ているが、果の方はこれ女性の象徴として庚申塔ではお猿が抱いたりしていて甚だエロッぽい。どんぶらこと流れてきた桃の実がぱっかり開いてオギャアオギャアと桃太郎さんのご誕生なんてのは、何とも巧みな比喩である。生ぶ毛をもった水密桃なんぞは確かに初々しくも気高いお姫様のお姿だ。

そこへゆくと桜の方はお色気が淡い。桜ん坊は胸の二つの丘の頂にポツンと置かれたベルにも譬えられるが、往生際は良いにしても桜ざめなどと浮気の性もあるし、花と言えば桜だが、その花が月経に擬せられているなんかは甚だ艶消しだ。「もう娘花見に小豆飯を焚き」と言えば初潮の可憐さもあるが、「花に馬つないで七日淋しく寝」となると年増のヒステリーも想像されるのである。

貝

貝は開に通じるのか、女性に比較されて、小娘が蜆、蛤が娘、年増は赤貝と江戸の川柳などでは相場が決っていた。西洋ではヴィナスが帆立貝にのって生れ、東洋では乙姫様の竜宮は蛤の中から現われる。子安貝などは形の似たところから護符などになって珍重されてきたが、これらの中で一番似ているのは、似貝、大満幸貝、姫貝、東海美人など、さまざまな別名をもつ貽貝である。他の貝は外側の介殻が似ているのだが、これは内の肉が似ているのだか

ら実感が切実で、これをとりだして竪にして眺めると、陰柱のような突起もあれば、陰唇のようなひだもある。一番癪っているのは上方に赤味をもつた黒い毛がついていることだ。これは介の外にで、て岩などとにりつくためのものなのだが、いかにも陰毛そっくりだ。昔清少納言が讃岐に流されたとき、漁夫達に口説れたので怒って自分の性器をえぐって海中に投じたら、それがこの貝になったのだという。瀬戸内海に最も多く、急流の岩にとりついている。

艶笑文学

「チャタレー夫人の恋人」が十万部売れた後でゆっくりと文化的に発禁になった。戦後伏字や削除がなくなったことも有難いが、出版界のデフレで戦前なら猥本と銘を打たれる筈の「カーマスートラ」や「アナンガランガ」が一冊十円、ヴァンデベルデが二十円見当でゾッキ屋の店頭に積みあげられるようになったことは何とも悦しいことである。

鈴木渡辺両東大教授訳の「サンヌウベル、ヌウベル」が二十五円で購えるなんかは夢みたいな話で、カザノヴァ、クレビヨン、バンデルロ、デイドロ、ラクロ、サド、マゾッホ等々の仏伊の艶笑作家の作品がこんなにに容易く誤訳ありとするも日本語で読めるようになったのは全く感嘆に値する。

艶笑本は社会を堕落させるなんて言うが、どうして、これらが倦怠期の夫婦生活に刺戟と示唆を与える回春的役割は頗る大きいのである。ゾッキ本の中では二十円程度のフェドーの「おしゃれ女の告白」の一読をおすすめしたい。

六阿弥陀詣

お彼岸に入って陽気がよくなると、アベックは郊

外へピクニックやらハイキングにでかける。江戸時代にはそんな片仮名の洒落れた言葉はなかったが、爺さん婆さんは冬籠りから起きあがって白衣に鈴をさげて六阿弥陀詣にでかける。そんなときはふだん家にとじこめられている嫁女もお供を仰せつかって行をともにしたものだが、日本橋の真中をつきぬけて遠くから歩いて行くのだから立派にハイキングになった訳だ。

歩くのは両足を使う。両足を使うことは、必然にその接合点の筋肉運動を盛んならしめる。それを古語ではねれるという。「ねれ切った嫁そこ豆が六つでき」だが、ねれるというのは夜の快美感を増すものだと伝えている、「六阿弥陀あんまりねれて熱がさし」「六阿弥陀あんまりねれてたわいなし」「ねれてきて七番になる六阿弥陀」「六番もされたほど嫁くたびれる」は陽春、現代アベック組にもハイキングの功徳を推賞する所以である。

濡れ場

歌舞伎芝居の世話狂言の中には必らずラヴシーンがある。ラヴシーンのない芝居はないが、特に濃厚なものがあって、それを濡れ場と呼んでいるのだ。濡れるというのはいかにも艶っぽい言葉だ。舞台の上の美男美女が相擁して恋を囁いている。その一方に自分を感情移入させていい気持になるというのが、芝居の魅力なのだが、舞台上の男女の所作は濡れ事である。だからその場面を濡れ場という訳であるが、その濡れ事は自然にみているお客の方にも移ってくる。

先代の梅幸が切られお富の帯の締め方で、濡れ事の時間的な経過を表わした表現は有名だが、近松物のラヴシーンなどは、見ている方がゾクゾクして欲情を唆られる。

濃艶なラヴシーンの後では、坐ってみていた芸者の座布団が湿っていたなんてよくいわれたもので、濡れ場はお客の濡れがちな場面だともいえるようだ。歌舞伎というものはそういう挑発的なものをもちながら発達した芸術なんである。

いかり草

漢方薬に淫羊藿と言うのがある。煎じてこれを飲むと大いに強精催春に効があると伝えている。これは東京の草花屋などにも稀に鉢植のものをみかけるが、中央沿線の扇山とか石老山辺りにゆくと自生したものが得られる。多年草だから鉢に植えておくと晩春に薄紅色の豆に似た花をつけてちょっと野草趣味を満足させてくれる風趣をもっている。

この草を喰った牡羊が春情を萌して牝羊に挑みかかったと言う話から淫羊藿などという尤もらしい名がつけられたので、いかり草という名のいかりというのは勃起を意味するのだとも説かれている。はたして、乾したこの薬草がそこまでの特効をもつものやら、つえすて草とも言い不老薬にも数えられているが、この草の薬が三つ又になっていて、丁度船の錨の形をしているところから、いかり草の名があるのだという説もあって、どこまでが信用できるものか判らない。ただ春の山踏みに発見けたら採ってみるのも一興ではあるだろう。

お花見

飛鳥山がまず咲いて、上野、向島、小金井と言う順にお花見の人出が賑う。大一座のお花見も楽しいが、アベックの夜桜見物も大いに悪くない。花と言えば桜の花を指すのが日本語の常識だが、江戸時代

には月経のことを花とかお花見と言ったものだ。月やくの月にも譬えているから雪月花の月花にたとえられたあれ、メンゼスはまことに風流なものと言わなくてはなるまい。

「花に馬繋いで七日淋しく寝」というのがある。馬も月経の隠語である。花が月経だから初花は初経である。「初花が咲くと垣根の母支度」、「初花が咲けば程なく実るなり」などと言うのがあるかと思えば「恋の花今日咲きそめる恥しさ」とか「実のならぬ花恥しそうにだし」なんて太田道灌の故事になぞらえたものもある。花を散らす、落花狼藉などと、花の色っぽさをエロチシズムに結びつけた人々は流石に洒落ている。奥様方も時代向きにフラワーとかイタリア語のフローラなどをお用い遊ばしてはいかがにや。

十三詣

男児は十五歳で元服するが、女は十三歳で幼児から娘になるとされていた。「十三ぱっかり毛十六」と言って、十三になると乳房が大きくなったり、お譬が張ってきて、十六で発毛すると言う江戸の通俗医学説なのである。「めっきりと、おいどのひらくお十三」つまり、第二次性的特徴の完成への動きが始る訳なのだろう。それで、女の子が十三になると、ヘコ祝い、タフサギ祝い、ユモジ祝いなどと称して、腰巻を贈られる風習が各地に伝っているが、これは岩代国耶摩郡の民俗として、女子が十三になると、三月十三日にその開運出世を祈るために柳井津の虚空蔵に参詣するのである。初潮に赤の小豆飯を焚かれて祝われるほどの羞しさはまだなく、母親に手をひかれて、美しい着物をきた——丁度小学校

六年生位の娘達が、ぞろぞろお詣りに集る姿は、花ならばまた綻びそめぬ蕾の趣きがあって「十三と、十六ただの年でなし」的なほのぼのとした艶美さがみられたと言うことである。

伊勢詣

時候のいい旧の三月には各地から講中を作って伊勢大神宮へ参詣にでかける。江戸からだと往復二十日はかかるから、箱根山の向うは化物がでるといわれた時代にはちょいとした大旅行だ。「女房に注連を張りたい伊勢の留守」と言って神棚ばかりでなく、ご亭主が女房にも貞操帯代用の注連繩を張りめぐらしたいような気になるのも尤も至極だったろう。

尤もその留守中に女房が間男をすると抜けなくなると言う俗信なのか、亭主への牽制なのか判らないような言い伝えもあって「抜けぬぞと女房を嚇し伊勢に立ち」とか、「ヌッと入れ先ず抜いてみる伊勢の留守」なんて言う川柳もあった。勿論、参詣の道中も精進潔斎と言う訳なので、出発まぎわに「道中じゃよしなと女房しいるなり」なんてこともあったろう。偽か実かはとにかく参宮の途中で不浄を行い、抜けなくなったと云う男女を布団にくるんで神罰是の如しとあくどい見世物にしたなんてことも江戸時代にはあったのである。

帯

洋服にもバンドがあり、紐がついてるが、我国の帯のように装飾味と催情感をもって締め紐が発達しているのは珍らしい。勿論、帯は着物の前がはだけることを押さえたものなのであるが、その幅が広く、厚く、容易に解き結びができないのは、帯を解

くことが肉体を許すことと同義語に用いられたほどの権威を持ち、胸高にキューッとしめた帯が乳房やお尻を時には小さくみせ、時には誇張して見せるに役立っているのである。

我国の女性美はたしかにヨーロッパ人のコルセットによる影響と同じように帯によって害れたかも知れない。併し、それは生理的な意味でのことで、浮世絵情緒の女性美は帯の存在で大きなアクセントを得ていると云えるだろう。ましてや寝室で解く帯のもどかしさと、その衣ずれの音の悩しさは複雑な閨房の雰囲気を作るのに効果をあげている。古人が帯に讐を尽し、外国人が我国の帯に讃嘆する所似も大いに考えておくべきことだろう。

とがため

これはいささか人倫に叛く蛮習と云えるかも知れない。越後の国西蒲原地方では、三月の始めにとがためと云う宴会を催して、村内の十七歳から二十五歳までの若者を集め、更に十五歳以上の雇女や下流の農家の娘を招いて、一定の期間中の夫婦約束をさせると云う風習があった。

女から相手の若者に盃をさすと、それでもう、祝言はすんだものとして、その娘はその若者の専有物となってしまうのである。これは、真の結婚ではないから時期がくれば解消するのである。三月、六月、八月、九月と、大体年に四回のとがためが行われていたのだが、必らずしも、次のとがためで契約がきれる訳ではなかったようだ。

古代の団体婚や共同婚の遺風なのだろうが、貞操と言うものを無視したもので、他国への出稼ぎ人の多かった越後には他にもこう言う無道徳的な男女の結びつきがいろいろあったようである。

毛切石

キャバレーやナイト・クラブに出演するストリップ・ガールの諸嬢の中には、どこやらの毛もさっぱりと櫛を入れてお化粧をするものがあるそうだが、女の身嗜みとして、あのあたりを清潔にしておくことは、それを見せたり使わせる専門家でなくとも心得ておいた方がよい。

「毛巾着せいて道具に切れができ」あそこの多毛症は往々にして毛切れと言って男性に外傷を負わせることもあったというので、江戸の遊女は線香で焼いたり、貝ですり合わせたり、毛抜きで抜いたりしたものだ。まだ脱毛剤なんてしゃれたものがない時代なので、普通の銭湯にも毛切り石という小さい石を二つ置いて、これがカチカチやって毛を切ったものだそうだ。「いらぬこと女房石にてさねをぶち」と言うのは、軽石ではなくて、この毛切石だ。「湯屋の石菰める所を引ったくり」と言うのは、子供がこの石を菰めるのであわててとめる図である。

芋田楽

お花見から若葉の頃にかけて、三十年ほど前には赤い毛布をかけた掛茶屋の庄几に腰かけ、渋茶に芋田楽をくわえる姿がよく見られたものである。八ツ頭を串に通して味噌を塗った芋田楽や里芋のきぬかつぎは季節の味がするものだ。

「田楽を焼くただ中によがり声」というのは、大川端にあった真崎稲荷の出合茶屋の風景で、「団子茶屋障子引っ立て泣きださせ」とか「泣く奴を団子焼きさし覗くなり」などという類句もある。

その田楽でなく、「おかしさは芋田楽で相孕み」とか「後の親を親とせず芋田楽」と言う方は、「田

楽の串にへのこを使うなり」で、今日の言葉で言うと親子丼、親と子が同じ串でさされるという訳なんである。家族制度の喧しかった時代だけに、却ってこんな異例も起きたのだろう。「御ほう美の出ぬ孝行を亭主する」、「けしからぬこと養母が孫を生み」「ニタ役嫁のへのこ実はお袋の」「嫁のへのこをお袋がとりあげる」と言う類である。

夫婦ハイキング

まだうすら寒くてピクニックに好適とは言えないかも知れないが、夫婦連れ乃至恋人同志で山野を、足に任せて歩くのはなかなか新鮮な感じがあってよいものだ。

知らぬ土地、人のいない山野ということで、何となく二人だけが結びつく気分がでることは、同じ青天井のアオカンでも、アベック広場や浜離宮なんぞとはダンチである。小さいリュックにお弁当、それに手を洗うために水筒をお忘れなく、颯爽とおでかけ下さい。奥多摩辺りの南向きの尾根の日溜りは、火鉢の傍で想像するよりはずっと暖くて、誰も近所に人がいなくて静かです。

「亭主の土産栗餅ほどにねれ」と言う句がある。江戸時代の嫁さんが姑のお供で目黒不動にでかけたのだが、歩き疲れたお蔭でどこやらがいい具合にねれて、ご亭主が大喜びだと言う句である。これだけでも夫婦のアベック・ハイキングは推賞に価するものではないでのようか。

五　月

五月は皐月、新暦では初夏の青葉若葉馨る五月晴を思わせるが、旧暦だと六月になって五月雨の陰鬱さがつき纏ってくる。それで陰陽道が流行った平安

朝時代には、支那の正五九の三月を嫌う三長斎月の思想も加って、男女の交りに五月を嫌うと云う風があった。

「神代より忌むと云うなる五月雨の、こなたに人を見るよしもがな」、同返歌に「五月雨のこなたかなたも逢うことは、いつも忌むとぞ人は云うなる」などと、雨空を眺めあって恋人同志が指をくわえて我慢しているなんて云う些かノンビリした情景もみつけられたものである。

方角が悪いと云っては、方違いなどと云ってわざわざ住所を更えた時代である。五月は交合禁止だと云うので一ケ月間夫婦生活を中絶させたかどうかは判らないが、少くともこの月には結婚などは避けたようである。天候や気象に生活を左右された動物的な時代の残滓とでも云うのか、とにかく、現代人には考えられない迷信とでも云うべきであろう。

ヌディズム

第一次大戦後ドイツを中心に北欧にヌディズムというのが流行した。ポール・モオランの「夜開く」の中にスカンジナヴィアでのヌディズム（裸体主義）の物語があった。親子兄姉友人が素っ裸で読書をしたり、体操をしたりしている情景である。太陽を浴びて原始に還れ！　と云うのがハンス・ズーレンなどが唱導したスローガンで、この運動はフランスにもアメリカにも支持者があり、我国でも奥多摩に裸の村を作ろうと云うことがＪＣＣ辺りで企画されたことがある。

人間の生れながらの姿を崇いものとする考え方には、インドのジャイナ教のようなものがあり、古代ギリシアでも裸体は避けなかったので、着物をもつ人間だけに、裸体にもいろいろな意味が加えられる

のである。温泉の混浴や劇場のストリッパーの裸体は、ヌディズムとは無関係だろうが、軽犯罪法に抵触しない範囲で家庭の親子兄妹、夫婦の裸体運動は案外に性教育などに役立っのかも知れない。

端午

五月五日は男の節句だが、菖蒲占いと云って女子が「思ふこと軒のあやめにこと問わん、かなはゞかけよさゝがにの糸」と唱えて菖蒲を結んだ故習もあった。

もともとこの祭事は支那からきた風習で、五月五日に屈原が汨羅に投じて死んだのを、楚の人達があわれみ、この日に竹筒に米を入れて水に投げたのが粽となり、我国に伝ったものらしい。また五月五日に子が生れると、男は父を害し、女は母を害すと云われたことを防ぐ意味の祭りとも云われている。

そうなると折角の子供の日の由来も因縁も妙なことになってしまうが、我国ではこの日幟を立て武者人形を飾って大いに男児の前途を祝福したのだから処変れば品変るのだろう。またこの夜には菖蒲を枕に敷く風もあったと云うが、「するうちに菖蒲刀で二度切られ」は端午の頃の桃色風物で、乳母と情夫との出会のさまがまことに髣髴として目に浮んでくるではないですか。

出合茶屋

この頃はどこにも御同伴歓迎と云う連れ込みホテルがあるが、昔はそうやたらにそんな便利なものがザラになかったようだ。それで江戸で有名なのは上野不忍池畔の出合茶屋にとどめをさされていた。御殿の奥女中、武家商人の後家、浮気な女房などが、ここへ男をくわえこむのである。

「出合茶屋忍が岡とはもっともな」また「蓮葉のまん中にきて後家よがり」とは忍が岡の下、蓮の花の名所を頭においてのひやかしであるが、ここへくる位の女はそれぞれにみんな達者なもので「根太一重下は池だとどしつかせ」「泣かぬのはござりませぬと出合茶屋」だが「出合茶屋あんまり泣いて下りかねる」ことになり「出合茶屋惚れた方から払いする」というがちにもなる。

「仕舞ったか出合扇の音がする」「出合茶屋小便に下りしゝに下り」などは巧みな描写といえようし「出合茶屋下で岩内飲んでいる」などは微笑しいユーモアである。岩内は云わないに通じる下男の名である。

暗闇祭

都下府中の六所明神大国魂神社では、五月五日夜の祭礼に町中の灯火を消して神輿を渡す神事を行い、くらやみ祭と称していた。宇治の県祭と同じように恐らくその闇を利用した男女の交会が昔は盛んに行われていたことであろう。

その翌日には田植の神事が行われ、田の上で踊ったり、角力をとると忽ちにして稲が勃然として起きると云い伝えている。これも農業神と生殖神との関係から、古代は必ずや相撲・舞踊も性行為の象徴から起ったものと想像できる。

豊前国京都郡犀川村の生立八幡では五月十日の夜には犀川夜市の石枕と云って幾組もの男女が社前の河原に石を枕にして寝るのだそうだ。「犀の河原で尻つねられて、今にひりひり痛うござる」と云う俗謡が残っているが、これまた諸国に伝った尻つねり祭の一例で、雑婚的な古代の乱交の遺風だったに違いない。

ポムペイ壁画

ナポリに船がつくと、乗客はぞろぞろそろってポムペイの遺蹟見物にでかける。ポムペイは「即興詩人」や「ポムペイ最後の日」で名だかく、まことに二千年前から地下に埋没していたという詩味をもった遊覧地だが、何しろ普通の家庭に、春画の壁画を飾ったヴェネリウム（愛慾室）があったり、男性のシンボルをもじったランプだの鈴がおいてあって、ご婦人オフ・リミットの場所がすこぶる多い。

道路の舗石に珍妙な突起物を彫った痕がある。案内者のアントニオ君はこれを指して「お女郎屋へ行く道しるべです」と日本語で説明してくれた。なるほど女郎屋への道標なら床屋に赤白のねじ棒が立っているより話がわかる。その時はそのまま納得して導かれるままに娼家（ルパナアレ）の建物に入ってみたが、あとで船に帰って考えると、どうも女郎屋に女性のシンボルなら判るが男性のでは話があわない。すると或男が説明して「いや石の一物でもそっちを向いてあるきだすってわけじゃないかね、それともそこに通ったアポロかジュピターの石型のつもりかも知れないぜ」

県祭

六月五日の宇治県神社の県祭りは、暗闇祭の一種で神輿が町内を廻るあいだの午前二時頃は全町内が灯をけして、全くのくらやみになってしまうのである。

これをねらって全国から参詣人が集り、宿屋も民家も満員だし、参道も人の波に埋れるのだが、盛んに男女が鳳儀を素すというのである。併し、今日の目からみると鳳儀を素すことになるのだが、祭の因

縁は恐らく古代の雑婚——同族婚などを忌む優生学的な要求から生れたものに違いないので、行事として差じることではなかったのだろう。

その行事を神事として合理化するためには「種貰い」と称して、その夜懐胎した子供は神様から子種を貰ったのだと云うことになるのである。氏より育ちと云う子供であってみれば、種はどこの馬の骨のものか判らないが、違った血が入ることは生理的には好条件になるだろう。昔の人間は理論家ではなかったが、自然に天の理に適ったことをやった実際家だったのである。

吾妻型

女性の自慰用具に張形という角製の工芸品があることは前に述べたが、男性用のものもない訳ではない。女と違って余り異性との接触に不自由を感じなかった筈の大江戸の男性も、一応はそんなものを考えたのだから可笑しい。最も原始的なものは女性が大根や山の芋を用いたと云うように、男性も瓜や蕪を剝り抜いて用いた。一歩進んで蒟蒻を人肌に暖めて用いるという法は草紙本の艶道指南書によくでてくる。布団を畳んで工夫する方法の図解などもある。

吾妻型は革や布で袋を作り、漏斗型として袋の口にはびろうどの布を張っており、排泄液は袋中に溜まる訳で、桐の小箱で受けさせたものもみたことがある。どうも張形よりも取り扱いが不便で実用的とは云い難いが、これを利用して人形実人大の女性にとりつけた精巧な胴人形も外国にはあるそうだ。必らずしも必要が生んだものとは云えまいが、泰平時の遊戯的な気持からこんなものも作られるのであろう。

田植

「道問えば一度に動く田植笠」ひょいとこっちを向いた娘の笠の下に半分隠れた顔から思わぬパッチリした黒い瞳が輝いてギョッとすることがある。木綿の絣の甲斐甲斐しい姿がその職場での制服としての美しさを醸しだすからでもあろう。病院の看護婦、女警官など、それぞれ同じような働く者のユニフォームの美しさを備えていて、十人並の娘も美人にみせてくれる徳があるものだ。

「えゝ尻を並べて庄屋田植なり」「早乙女を後からみておやすなり」など、手甲脚絆の娘達が早苗を手にした姿は何とも初々しく清潔であり、風雅な眺めだ。

処がこの集団的労働の能率を上げるために歌われる田植歌にはなかなかエロチックなものが多い。生めよ殖せよの性と、多産を目的とする農業には共通した神様が祀られるからでもあろうか、露骨な性讃美が平気で歌われる。そしてそれが田舎の士女の性思想の普及にもなっていたのだろう。田植がすんだ後の不礼講の祝いの酒宴などでは、可憐な早乙女が立派な淫婦になってみせるような場面もあったのである。

越中

越前は包皮だが、越中は男子用の褌である。細布を紐でとおして腰に結え、後から布を股にはさんで前で紐にくくりつける。六尺褌よりも、猿又よりも風通しがいいが、うっかり人前にこれで出ると、横からだらりとバッチいホーデン侍従が顔を覗かせる危険もある。

延宝年間に大阪新町の木村屋又次郎の抱え遊女がいた。頗る美人でその揚屋入りは人垣を作った位だが、どう云う訳か越中の客によく招れるので越中太夫と仇名をつけられた。この妓が揚屋で遊客の風呂に入る姿をみて、どうも素ッ裸ではみ苦しいとあって、自分の浴具の緋縮緬を解き紐をつけてこれをしなんしと渡したのだそうである。これが今日の越中褌の起りだということだ。湯巻、湯文字と同じく、入浴に下着をつけた時代の話なのであろうが、別に越中国の人が用いた褌だとも云い、幕末の老中松平越中守が質素節倹を旨として布を節して発明したものとも云われている。併し、どうも越中太夫起源説の方がお色気があってよいようである。

更衣

「おえたのをもう隠くされぬ衣更え」と云う川柳があるが、確に夏になると男の子は具合の悪いことがある。海水着なんかだと毅然として判ってしまって処置がない。

そこへゆくと女性は「おえたのが知れぬで女罪深し」で、着物の上からはどの程度に肉躰が慾情しているのか明瞭りしない。併しその明瞭りしないところが男性にとっての魅惑であり、神秘感で、それが夏になって絽入れや袷から単衣に解放されると肉体の線が衣物の上にも流れて何とも悩しくなる。

十七八の娘だとセルやネルを着た初夏の頃が妙に乳房や尻を大きくみせてエロチックだ。嫁になりたての若女房には浴衣姿が何とも艶だが、三十過ぎると紹や縮の薄物に濃厚な肉体の香がしてくる。

隣り合せた女の肌の温かさがじかに感じられるのは些か暑苦しいが、相手が美人なら触れたところの肌触りも楽しく、更衣の候の毎日の通勤時の張合もでてくるというものである。

お祭り

お祭りとは神を祀ることである。政治のことをまつりごとと云うのも、古代では政教一致していたからで、神を祀ることで民を治めたのだというのである。

お祭りは春秋に多いが、夏祭りと云って、夏のお祭りも暑いだけに、却って暑気払い的な勇ましさをもって江戸時代には歓迎された。江戸では神田明神、京都の祇園神社などはその著しいものだ。

「祭礼にへのこの交るとしま町」と云うのは神田明神の氏子豊島町からは猿田彦命の山車がでるからで、猿田彦は陽物神の元締めみたいに考えられていた。祇園祭りでは芸者が男装して練り歩いた。それで髪を短く切ったらしい。それから、「後の祭り野郎髷の傾城をあげ」とか「生えるまで奴をしめるまつり過ぎ」などという句ができた。

ところがお祭りと云う言葉は男女交合のことにも使われている。成程、これは確かに人間の祭典である。「お祭りの最中蔵で下女渡し」旨いことを云ったものである。

薬の日

陰暦の五月五日は薬の日と云って俳句の季題にもなっている薬草を摘む日である。草根木皮、漢方薬だってまんざらではないことは、近代の薬物学でもある程度の証明はできるそうだから、ハイキングの好シーズンをめがけて、アベックの野遊びに強精剤を漁って歩くのも実益を兼ねた行楽になるだろう。

淫羊藿のいかり草が強精に特効あることは曽っても述べたが焼跡の草原に茂っている「ゐのこづち」の根を乾燥して強精剤としていることは余り知られていない。奈良、徳島地方ではわざわざ栽培しているところもあるそうだ。

自然薯の「やまいも」は誰でも知っているが「はとむぎ」も特効を称されている。「にら」や「にんにく」その系統の「のびる」など葱類の力は侮り難く「松の花の花粉」を用いる地方も多い。「せんきゅう」、「えびすぐさ」「かわほね」「はまごう」などもそれぞれに強壮用として採取されている。古来「はらん」「つわぶき」「ほうずき」の根などは堕胎などに盛んに使われていたものだ。

釣魚

釣りは何も夏に限ったことではない。寒鮒、わかさぎ釣りのような、雪を冒し、氷を割ってのものもあるが、やはり水に親しむ初夏からの候が一般向きがするだろう。

女を釣るのと、魚を釣るのは同じ意気だとは詩人にして釣客の佐藤惣之助が盛んに吹聴したことで、釣糸にグイとこたえる魚の喰いにも年増、新造、娘の区別がちゃんとあるそうだ、鮎がスーイと毛針によってくるのはきっとスマートなお嬢さんで、パックリと喰いついてくるハゼなんかは、醜女の深情なのかも知れない。

鯉が恋で、鮎が愛で、鱚が接吻なんてのは悧巧でない洒落だが、ある種のご婦人は水中に躍動する鯉や鮎をみていると男性の表徴を感じて握りしめたくなるそうだ。

彼女を誘って品川辺りから舟で沖へでてみたまえ。犬ではないから女性と云えど生理的要求に我慢はできない。昔の釣舟にはほうろくを用意してあったものだ。「ほうろくへたれると船頭はおやし」と云う川柳があったが、今はどう処理されているか。

洗濯

「洗濯の女房内陣拝ませる」この頃はズロースと云う重宝なものができたから、あんまりそんな風景もなくなったようだが、腰巻一枚下は素肌の昔は、衣類の薄い夏は注意しないと、甚だ恥しい姿態をみせちまったものである。久米の仙人が通力を失って天から落ちたのも、洗濯女の白い腿を垣間みたからだと云う。「洗濯の場へ太竿さげて落ち」なんぞはまことに穿った句である。

洗濯のエロチシズムは覗きみばかりではない。洗濯されるものが、シュミーズやズロースなど下着類だと、それから連想される嗜物症的な感情の起きるのも当然だ。女一人住むアパートの窓に干されたズロースが、彼女を訪ねた一人の男に慾念をむらむらと生じさせたと云うこともあった。肌をあまり露出しないことと共に、肌の分身である下着類を洗濯したら干場に注意して干すと云うことも、夏の防犯心得の一に数えてよいのである。

長崎丸山

江戸時代の遊廓の中で吉原や島原に並んで丸山はエキゾチックな色彩をもっていた。それは初めに出島の蘭館があり、後にも中国の船だけは来泊していたので、花街としての国際的な性格をもたされていたからだろう、長崎名物のチャンポン料理のように和漢折衷の趣味がここでは大いに発揮されていた。蘭学修業に江戸から長崎に留学した当時のモダン学生達も「赤い花なら曼珠沙草オランダ屋敷に雨が降る」的情調を堪能しながら、新知識を吸収していたらしい。併し、昔から金のあるのは貿易商だ。中国の陳さん、王さんがお大尽だったから、その全盛譚も多い。陳さんと錦山、も一人の陳さんと初瀬なんぞの二組の和漢心中もあった位だ。人出入りの激しい処なので居続けを禁じたり、不審な男を登楼させぬこと、揚げ銭をとった上で客扱いをすることなど、長崎奉行はそう云う細いことまで気を配っていたから大変だ。駆け落ちや心中に他国者ばかりでなく、外国人もあったから取締りが難しかったに違いない。

栗の花

サジズムの総本山マルキ・ド・サドのコントに、「栗の花」という微笑ましい一編がある。栗の花は精液の匂いがするというので、美しい令嬢がその花の頃に栗の並木道を通りながら、この花の匂いは確かに覚えがあると云って母親と牧師を驚ろかす物語である。

その匂いは一般に青臭いといわれる。蛇の青大将とか、葱、桐の花なども稍その感をもったもので、男性にとっては嫌らしいようでもあり、また懐しいものでもある。体臭と云うものは不思議な魅力のあるもので、ヨーロッパでは腋臭がひとつの性的魅力の要素になっているとも云うことであり、自分の靴下の臭い、下着の臭いなども、その本人にとっては案外に好ましいものであることも多い。

女性にとってザーメンの匂いがどんな反響を与えるものであるかは知らないが、それに似た匂いが性的経験者には一つの刺戟となることは疑う余地がない。サドのコントは、それを処女が気にしているところに興味があると云えるのである。

蛇

アダムとイヴに性の神秘を教えたと云う蛇は、印度ではナーガ神として大いに崇拝されている。だから弁天様のお使いになったり、竜神として我国でも祀られているが、どうも余り気味のいい動物ではない。

くちなわ、うわばみなどと異名もあって、その格好から陽物を思わせ、男性化して考えられるようだが、ヤマタのオロチなんぞ、数多くの美女を人身御供に召しあげる伝説も大方、そんなことに起因しているのだろう。春本などにもオロチやウワバミのようなと形容詞に使ったものが多い。

蛇は穴好きと云って、穴に住んでいるが、農村ではよく田畑で女が昼寝していると、蛇が這いこんできて、ヨニにもぐりこんで命とりの騒ぎを演じたものであると云う。幾ら引きだそうとしても、逆に引くと鱗が立って引きだせないのだから困る。江戸の随筆に、信州だかの村医者がこれを見事にひきだして女の命を助けたと云うのがあった。川柳にも「田舎医者蛇をだしたで名が高し」と云うのがある。

昼寝

フランスでは会社や役所のお昼の休みが日本より長い。だからパリのサラリーマンには昼飯を自宅に喰べに帰えるものが多いと云うことだ。自家へ帰って差向いで飯を喰ってそれから寝室に入って一休みする。午睡は精力恢復にもっとも利くことなのだから、午後の激務への骨休めとして甚だ至当なことである。処がこの一休みに妻君同伴で寝室に引きあげる人種がこれまた頗る多いと云う。精力恢復どころではなく、精力消耗になりそうだが、平常肉食をしていればそんなことは問題でないのかも知れない。

夫婦の営みは夜に限っていると考えるのは、装備の不完全な日本建築が生んだ概念で、肉体に自信のある士は夜は夜、昼は昼で行動するもよかろう。夜と違った気分も確かにそこにあるに違いない。三十余年前に青年画家達に大きな感化力を示したR・K画伯が鵠沼で真ッ昼間、夫婦同衾中を友人に訪問され、あわてて前を抑えながら便所に逃げこんだと云う挿話があるが、流石に絶倫な画才をもった画伯らしい思い出である。

船饅頭

隅田川、大川は流石に江戸の大きな水路で諸国からの船が集ってくる。その船をめがけて商売をする小舟に乗った物売りもいろいろあったが、饅頭などを売りにくる女はそのま船に上って売笑をしたもので、これを舟饅頭と云った。「本ト船へ丸い女を売りに来る」「親舟へもみ上ゲのある坊主くる」これは船饅頭の一種の舟比丘尼で、頭を剃っているのである。「帆柱の立つたを寝かす舟比久尼」越中褌を帆に譬えれば帆柱とは何だかお判りだろう。

その後、船饅頭は親舟へ上らず、自分の舟の中で売春するようになった。大川の中洲を一廻り漕いで廻る時間が仕合のワン・ラウンドだったと云う。「ひんまくると直きに船頭漕ぎ出し」と云う訳である。波に揺られ乍ら櫓の音をきいての風情はちょいとした情趣もあったろうが、時間が短いから忙しい。今年辺りはモダン船饅頭ボート・ガールなんてのが鎌倉、逗子に現れるんじゃあるまいか。

春三夏六

「春三夏六秋二無冬」と云う言葉がある。古来こ

れは交合の頻度を示したものだと云われている。「かたい医師冬のかわりに夏しめる」などという川柳もこれからでているので、冬の零はアプレ・ゲールの諸君ならずとも甚だ納得のいかぬことであり、万物の霊長として他の動物と違って四季を通じて交合を行い得る人間性を侮辱するも甚しいと云うことができるが、部屋に閉じこもって無為徒食に陥り易い冬を零とし、肥った人間の傍に寄るのさえ暑そうな夏が最高標準をもっているのは、また奇異の感なきにしも非ずである。処が、有名な俳人一茶の七番日記を読むと、彼五十四歳の八月の日記に一週間にやりもやったり二十二合という驚異的数字が記録されている。妻女が実家から帰った夜には五交などいう激しいものがある。何とかして子供を欲しがっていた老いらくの俳人の焦慮かも知れないが、その荒淫強腎振りは驚嘆に値する一方で、夏の夜が人間にとって暑いばかりのものでないことで「夏六」説を裏書するものだと云ってよいかも知れない。

麦　畑

麦畑は雲雀の棲家であり、晩春から初夏へかけての季節的な風物として親しみ深いものである。田圃は水田だからここへ入るには足を濡らすばかりでなく、蛭に吸われる心配もあるが、麦畑にはそんな懼れはない。二尺、三尺と伸びてくると、大人がその中に入っても、少し腰をかがめるともう外からはみえない。空からはさんさんと日の光りが降り、大地はふくよかな香いをもって誘う。まだアベック広場なんてこともない時代にも、牧歌的な田園の青年達は青カンの愉しさを麦畑で知っていた。「囲炉裏にて口説き落して麦の中」話は冬から始り、麦伸びる頃に彼女もウンと言って「まだ伸びもせぬのにもう

来る麦畑」で麦畑が賑いだす。「麦畑蕎麦切り色をまくり合い」という風景から「麦畑ざわざわざわと二人逃げ」なんて喜劇もある。「でけえからやあだと麦を踏み散らし」と言う堅い女もあれば、「腰抜けの下女茫然と麦畑」をみている場面もあろう。やがて麦秋がきて刈り入れが始る。「これからはどこですべと麦を刈り」なんぞと、あの青々とした麦畑にもこれくらいのエロティシズムは考えられるのである。何とも人生は楽しいことですな。

弁天様

弁天様は梵名をサラスバチイといい、印度の河の名からとられたもので、農業や知恵や弁説や音楽の神様だった。天女の姿で表わされていて、ナーガ（竜）神の崇拝が混入して、わが国では竹生島、厳島、江之島など、島で祀られる習慣があった。

美女をたとえて、弁天様のようだという。江戸の俗信では七福神の中に、女形の弁天様一人がいて、宝船では姫一人に婿六人という羨しい身分になっているが、女体だという弁天様をわざわざ裸にして作った国宝の彫刻が二点ある。

どちらも鎌倉時代の作品で、一は鎌倉八幡宮所蔵の半裸像、一は江之島神社蔵の全裸像、ともに紙を貼り絵の具を塗り、更に衣物をきせてあるが後者の方はちゃんと女性の表識まで克明に彫ってある。江戸時代のものでは飯能町無量寺の〃くすぐり弁天〃といって男性がどこやらを撫でるとこの裸像が笑いだすという。江之島のは同地の観光協会で大いに宣伝し、御開帳をして拝ませるとか、触らせるとか。昔から俗信にエロ味はつきものらしい。

海水着

デパートの飾り窓に水着が並ぶシーズンがきた。今年の流行は去年のクリスマス頃にアメリカで決ったものが、標準になるのだが、年々歳々、肉体の線がはっきりして肌の露わな部分が多くなるのだから男の子にとっては愉しい限りである。羽衣の天女や神話のシレエヌなどは問題外として、今日の海水着の風習は十九世紀から始ったもので、そのための専用の衣裳ができたのも百年程前からであろう。初めはまるでブラウスにスカートをはいたような格好だったが、今では女相撲の力士にも相応わしいようなものになった。お乳と股を隠すだけの衣裳はもう衣裳とも言えない程度だが、その代り、そこだけは厳重に防備されていて案外に危な気がない。三十年も前の鎌倉や逗子にでかけると、必らず一人や二人は薄い布地を透して股のところを黒く透いてみせたり、十人や二十人はポッツリと桃色の乳首を白地の下から覗かせた奥様やお嬢さんがいたものである。昔懐しいエロチシズムであった。

七夕

年に一度、天界の天の川の畔りで牽牛織女の二神が出合いをする宵である。その夜が曇ったら順延などと言わずに中止なんだから、思い切りもいいが憐れだ。とてもアプレゲールには思いもよらぬことだろう。

七月七日の星祭りはお隣りの中国で始った行事だが、夜空に煌めく星の神祕さは何か人間に妖しい幻想を抱かせるものだった。秋の畑の豊穣を祈って星づく夜に、田畑で男女が生めよ殖やせよのお祭りを営んだ証拠は、田園の故事を探ってゆくとどこにでも発見される。それが因になって、七夕は縁結びの禁勝になってきた。笹につるした短冊を掲げると字が上手になるなんてのは後世のこじつけで、この朝にその色紙を拾って持っていると、年内に良縁が結ばれるという方が、娘達に甘いロマンチシズムを与えたのであろう。二人の名を書いた短冊が水に沈まず並んで浮ぶことに、神が結婚への審判を下したと信じた古い時代の詩を想うことは決して逆コースではあるまい。

山と丘

山も丘も地球の表面に高く突きでているのであるから、谷や湖と違って男性の表徴のように考える方が自然であろう。処が実際には山は女性に譬えられる場合が多いのである。アルプスのユング・フラウは若い女と云う意味であり、我国にも吾妻山、乙女峠とか黒姫山という女性を名乗ったものがあり、富士山、月山、御前山なども女性的である。勿論槍ケ岳とか男体山、笠ケ岳とか男性的なものもあるし、臼杵山とか茶臼山、男女峰を持つ筑波山のような両性的なものもあって一概には山は女性の表徴とは云えないが、槍ケ岳のような突兀たるものを除くと、山や丘はなだらかな曲線美をもっていて女体を想像させる点も頗る多いようだ。二子山と云えばいかにも豊かな両の乳房を思わせるし、山容によっては女性の臀のふくらみや腰の張り方を想起させるものもあろう。ジョン・クレランドの艶笑小説「フアニイ・ヒル」は明らかに陰阜をさしたものであって、ヴィナスの丘という言葉も西洋にはある。だから男性にアルピニストが多く、女流登山家は同性愛者だなどという議論は成り立たないが、考えてみると面白いことであるまいか。

夜這い

戦後の農村ではどうなのだろうか。我国には古くから一部に夜這いと言う風習があった。これは婦女を男性、特に若衆の共有とした古代の遺風だと言うが、年頃になって娘が夜這いをされないようでは恥だったのだから、今日の貞操観念とは全く考え方が違っている。尤もそう云う観念は我国ばかりのものではなく、原始時代にはどこにもあったことなのだから、必ずしも卑下する必要はない。男女の結合が結婚で縛られるようになったのが、真の文化が如何か、それにはそれで弊害があるのだから、一概には云えない。

夏は夜這いのシーズンである。めざす家の戸をホトホトと叩くと、戸が音もなく開いて暗闇の穴に吸いこまれる。便所に立った筈の娘の足音が、四つになってはおかしいので、娘を背負ってミシリと廊下伝いに寝所へ忍ぶのは、何となく天下泰平で王朝時代の恋ようで、懐しい牧歌情緒と云える。

河童

「お尻の用心、御用心」と歌いながら、女の子が裾を抑えながら捲りっこをする遊戯が、大正時代まではよく街頭でみられたものである。これなぞは明らかに子供の性的興味にもとづくものだが、昔から雷は臍、河童は尻をねらうものとなっていた。

河童とはどんな動物か、見世物によく人工の河童はあったが、誰も本物をみたものはない。絵では頭の真中にこれが乾くと死ぬのだと云う皿をのせて、嘴のとがった猿のようなものが書いてあり、吸血鬼として語られてきた。

尻をねらうと言うので鶏姦即ち男性の同性愛の別

称のように言われていたが、水泳中に足をひっぱって水底にひきよせてその血を吸うと言うことは、河童自体を魔性の河神の象徴のように思わせる。女を覗うのでなく、男の子を襲うところに多少の滑稽味も伴うが、実際に古代にもあったと想像される同性愛が変形されて河神に転化されたものなのかも知れない。

精霊祭

七月の十三日から十六日まで、先祖の霊を祀る霊祭りである。お精霊様と言って、茄子や胡瓜で馬や牛を形どって供えるのは、支那の家畜好みからきたものかも知れないが、この世とあの世の橋渡しになる行事である。

十五日は中日で盂蘭盆会、つまりお盆で、この頃には盆踊りがあちこちで行われ、それが仏教とどう関係があるのか判らないが、お寺の庭などに太鼓をもちだして咽喉自慢の歌拍子につれて踊り抜き、あげくのはては、裏山の卵塔場やら茂みで喃々喋々のバッカーナルが演ぜられる。

自分を生んでくれた先祖への供養に、自分も生んでみせようというかも知れないが、古代の密歌会やら雑魚寝の風がここでそっくり行われる。

この頃は骨片や朽木の燐が燃えて、鬼火がでたり、人魂が飛ぶ怪談のシーズンもさびれたが、「飛び物に夜鷹は客をはね返えし」死んだ親父やお袋の霊魂が帰ってくる頃だから賑やかだ。それがまた夜這いや逢曳の季節とも重なり合っているのだから、七月の夜はまことに妖しい世界だと言えるだろう。

裸の仏像

お釈迦様の生国は暑い暑いインドであったから、

お釈迦様の像はインドでは裸体だったり、薄い着物をまとって作られていた。

ところが中国を経て温帯の日本までくるとどうも素裸では寒そうでいけない。それで形式的にはインド風だが、だんだん厚い着物らしいものを着せられるようになった。

しかし数多くあるわが国の仏像の中でも素裸のものがないわけではない。釈迦像には余りないようだが滋賀県浄光寺の国宝阿弥陀如来立像とか、奈良県伝光寺、鳥取県大山寺の両国宝地蔵菩薩立像、鎌倉の延命寺の地蔵立像なぞ、いずれもあるべきところに、あるべき突起物らしいものをちゃんと備えているので有名である。

川柳に「下女が守本尊前出地蔵」というのがあるが、これは延命寺の地蔵のことだそうだ。美男を称えるのにお地蔵様のようだという言葉があるが抹香臭い仏様もエロチシズムに無関係ではない。

盆踊り

農村の青年に盆踊りほど楽しい行事はなかったのだと言う。菩提寺の庭に集って、太鼓を叩き、笛を吹き、男女入り乱れて歌い踊る。そして、そのはては諜し合わせた男女の一組ずつが裏山に消えて明け易い短夜をかこつのである。明治から大正に入って野暮な官憲の圧迫はあったが、人間性に即した牧歌的なこの行事は容易なことで後を絶たず、今日でも行われている処は少くないそうだ。

風俗史家はこれを乱婚時代の遺風とみる古代に行われた歌垣とか歌会の流れであると言う。歌垣は男女歌い乍ら問答をして、言葉につまると相手の意に従わねばならぬと言うきまりがあった。歌会はそれよりも古く、筑波山のそれは風土記にもみられ、やはり歌の掛合で男女が肉体を賭けて争うのである。

これがいつか気候のよい仏教の盆の行事と結びついたのだろうか、東化地方の盆踊りには近年まで乱婚の遺風がそのまま残っていた。

簀入り

お盆の十六日には地獄の釜の蓋があくそうで、正月と七月には奉公人にも宿下りの暇がでた。今日ならボーナスのシーズンである。

日曜祭日、電休日だの生理休暇なんてものがない頃には、年にたった二日の公休日だ。おしきせの紺の香いのする衣物をきて長松が半年振りでお袋の顔をみにくる。お袋はお赤飯を炊いて魚のお頭つきでこれを迎えたものだ。

お店奉公ばかりじゃない。武家の女中や腰元だってそうだ。行儀見習に花嫁学校の代用として遊びたい盛りの娘が、堅苦しいお屋敷に奉公にやられていたのだ。簀入りには家に帰って仲間の娘達に御殿の自慢をして、観音様にお詣りして都合がよければ芝居でもみようと言う。なかには筒井筒の幼な馴染みとお袋の目を盗んで七夕様にも似た年に一度か二度の歓びを遂げる達者な娘もいた。「簀入りに帰りたくない物を喰い」である。と思うと、心臓の弱い隣りの伜が「簀入りの戻ると来ぬで好きが知れ」なんてことも暴露しちゃうのである。

薄物

夏の薄物はみるからに涼しそうで季節的な情感に富んでいる。明石縮の下から白い襦絆や赤い蹴出しが透いてみえるのは甚だ艶である。湯上りの裸身に薄物を纏ったのなどは、そっくり肉体がまるみえでエロチックと言うより催情的である。

芸者のお座敷ダンスが流行った頃、素裸に黒い紗や絽のキモノで踊ったものだが、白い肌に乳房のふくらみも鮮やかで、乳首の紅がほんのりと浮び大いに効果をあげたものである。

「よい縮み嬢の乳首が透いてみえ」と言う若妻の艶味は美しいが、「手綱がゆるいと帷子へ染みができ」と言うのは、月経帯がゆるいとキモノに汚れが目立つと言うので、あまり感心できない。允恭帝の妹姫衣通姫はその美しさが衣を通して外に現れたと言うので、「衣通は生えたをいつそ苦労がり」とか「衣通はお馬の時を苦労がり」などと言われた。これから転じて薄物の女を、「帷子の衣通ざつな女なり」などと言ったものである。

ずいき

「肥後の名産でへのこを縛める」今でもうす暗い性具屋さんに、干瓢のようなものを売っているようだ。これはハスイモという里芋の一種の植物の茎で、根はたべられないが茎は食用にもなるがそれを乾燥させたもので、古来肥後国の名産といわれる。

これを縦に二つにさいてぬるま湯につけてから、あれにたてよこに捲く、この捲き方に秘伝がある。これを捲くと今まで乾いていた茎が適度に分泌液の水分を吸収し、太くなり男子の早漏を抑え、この茎特有のむずかゆい刺戟を生じて、女性を大いに悦ばせるものだと言うのである。

誰がいつこんなものを使いだしたものやら判らないが、里芋類のアクがかゆさを感じさせることは、皮膚の弱い人にはよくあることだし、乾燥野菜が水分を得て膨張することも判っていたことだ。この経験を性的生活に結びつけたものだとしたら江戸の通人なんて連中は、さすが天晴れ色道の達人だったと言う訳である。

納涼

昼が暑いだけに日が落ちてから行水をつかって打水をした庭先きの縁に、団扇片手に腰かける気分は、何とも嬉しいものである。我国では平安朝頃から夕涼みということは、風流な夏の娯しみの一つになっていた。

平常はあまり外にでない深窓の内儀も湯上り姿で門に佇むこともあろうし、箱入り娘も浴衣がけで弟をつれて縁日の夜店などに現れる。所謂見染めるなどと言う古風なめぐりあいにはもってこいのシーズンなのである。

着物が薄いから肉体の線はくっきりと、ふくらんだ胸や腰の隆起に浮びでてエロチックだ。風が弄ぶと素足から白い脛の方までちらつかないものでもない。

明治になってからは、若い男女の学生には暑中休暇というぶらぶらしていてもよい時間ができた。戦後の今日はその上に男女共学の民主的自由主義がモットーになっている。二人で手を携えて河原の叢に腰を下そうと、公園の池畔に肩を組もうと誰も文句を言うものはないのだ。

まことに嬉しい時代がきたものだ。大いに青年諸君は夏の夕のよろこびを満喫し給え。

茄子

「秋茄子嫁に喰わすな」と言う俚言があるが、その意味は余りはっきりしない。茄子は嫁の身体によくないとか、秋茄子は特別に甘いから姑がいじわるして嫁に喰わせないのだなどと言う説がある。

茄子を喰うと声が悪くなると言って鈴虫松虫に喰

べさせないのは判るが、どうして嫁にいけないのか知らない。

紫色に輝いたその型はいかにも夏から秋へかけての季節的な美しさに富んでいる。しかし江戸の川柳では茄子は余り香しくないものの代名同になっている。「土器と茄子び夜風呂に誘い合い」「雪隠へ下女が茄子びで穴が明き」のなすびは下等な女性々器の一種とされ、陰挺の肥大症や子宮脱のいささか外目でも判るものを指しているのである。句意は無毛症と子宮脱という人目を憚る女同志が、誘い合せて風呂にゆくことであり、女中のお道具がなすび開であるというので好奇心の強い連中が便所に覗き穴をあけたという意である。

蚊帳

蚊帳は我国の夏の景物詩の中でも、最も情趣に富んだものである。江戸の浮世画師達がこれに惚れこんで盛んに画材として用い、歌麿の有名な「婦人泊り客の図」三枚続を始め、その初期から末期まで、蚊帳をテーマとした名作は数えきれないほどある。

蚊帳を添景品として、添乳をした若女房の胸のはだけた白、懐紙を口にふくんで両手を髪においた年増女の悩しさ、青い蚊帳を通して女の裾にこぼれる緋の下布の艶しさ、——もっと衛生施設が完備すれば、金網の防虫窓で、蚊帳なんて厄介な道具は我々の生活から要らなくなってしまうのだろうが、短夜の後朝にふさわしい清楚な白麻や怪談噺に幽玄さを加える赤で縁どった青蚊帳の趣きは、江戸情緒とともに決して日本人には忘れられないものだろう。

「蚊帳青し水母にも似てちちぶさは」(草城)、蚊帳の青さを海にたとえ、その中なる女人を浪の泡から生れたヴィナスと観じる幻想を、いつまでも持ちたいものである。

行水

「行水の女にほれる烏かな」漱石が「我輩は猫である」の中で諷した活人画の主題句である。風呂に入るのは暑いし手間がかかる。さァと湯で汗を流せばよいと湯を沸かし、これを盥に汲んで、室内では暑いからと人目に立たぬ屋外にもちだして一浴する。風俗壊乱だとか猥褻物公然陳列罪なんぞなかった頃の日本人が発明した簡易銷夏法の一である。

明治の終り頃までは東京の郊外でも夏の夕方など生垣や竹垣の間からちらほらと白い肌が艶めかしくこぼれる行水の風趣はよくみられた。勿論、浮世絵師はこの好画題を決して逃さない。裸体画という独立したテーマを持たない画家達は風呂や行水に、裸体への讃嘆を集中させたのである。中期からの清広、清満、春信、文調辺りのあぶな絵最盛時に行水の佳作が多い。尾崎紅葉に「むき玉子」という小説があるが、これも行水の美女を覗くところから始る。悪どい出歯亀趣味というのでなく行水の女体の衝巻にちらついていた頃はまことに懐しい。

花火

昔は花火が川開きと決って年一回の行事だったが、今は、川も沢山あって隅田川の大川ばかりでない。多摩川も二子でも調布でも数カ所に分れて花火大会が行われる。花火は明るいものだが瞬間に消えるのだし、夜でないと具合が悪るい。盆踊りも咽喉自慢も夜のものだが、花火となると空でやるのだから、その近所なら一定の処に集らなくても充分にみられる。

二人だけで花火をみにゆくのに何も雑踏する人波

を掻き分けることはない。群衆から離れて草の中に身を隠そう。パッと光った閃光に彼女のシルエットがお伽噺の王女様のようにきらめくこともあるだろう。戦時に空襲中の高射砲の炸裂音をきいていると、妙に心が躍って欲情したものだと語った友がいた。そう言うことはあるのかも知れない。浮世絵に残る大川の花火でも、桟敷を構えた川畔の茶屋の奥では、あの人の心をいらだたせるような音を伴奏にしっぽりと抱きあっていた男女が多かったと言うことである。情事を火遊びと言うが花火のエロチシズムも大いに考えられることである。

土用干

土用の丑の日には鰻を喰うことになっている。鰻は精分があるから長命、健康によいことは確かに理屈だ。何も鰻でなくてもいい、土用蜆などと言う普及版もあって、とにかく暑さに負けぬよう油っこい動物脂肪分を吸収しておくことは効果があるに違いない。

日の光りが一番強い土用中に土蔵や納戸に蔵っておいた家具什器類を外にだして風を通すことは、昔から土用干とか虫干しといわれて夏の行事になっていた。滅多に日の目をみなかったようなものが、この日は座敷一杯に紐をひき廻し、かけつらね並べられるのである。子供達はその下で先祖伝来の兜を冠ったり、太刀を履いたりはしゃぎ廻るのだが「御虫干土佐の名画で笑はせる」、「土用干にも道のつく本」とあるように、昔の枕絵などが紙魚に埋り乍らでてきて大いに手伝いの男女を歓したものである。

「雛形の通り具足を干した晩」その夜は少し暑いが、早速に昼間みた枕絵をお手本に夫婦で実験しようというのだ。土用干も懐しい夏の景物詩中の一情景である。

大山詣

渋谷から三軒茶屋を経て、二子へ、それから厚木に抜ける今日の玉川電車の通っている道を大山街道となづけ、大山―雨降山石尊権現の賽路になっていて、江戸時代の夏は白衣の行者を先頭に参詣者が陸続とつづいたものだそうだ。

大山詣りには納め太刀というのをもって、まず大川―隅田川に浴して水垢離をとり、六根清浄を称え、それからでかけるのであるが、バスや電車のない頃だから日帰えりなんて訳にはいかない。

それでこの亭主殿留守の間に女房の命の洗濯が行われたという勘定になる。「太刀とへのこを並べきんげさんげ」と水垢離をとって亭主がでかけると、「鼻の高いが大山の留守に来る」ことになり、家で「間男がしている時分山が荒れ」るのである。ふいに帰って不義者みつけたは「間男を麦藁笛（土産の）でくらわせる」ことになるが「石尊できけば不実な男なり」で亭主殿もあまり大きな顔はできない筈なのであるとはいかにも江戸らしいユーモアだ。

海水浴

気の早い人達は七月の始めからもう由比が浜辺りにでかける。メリケン渡りのア・ラ・モードの水着姿をいち早くみせたいのだろう。海水浴は明治の初年に軍医松本順が外国の真似をして唱導し、大磯、茅が崎辺りをまず開拓したのだが、今では鎌倉、逗子が本家のような顔をしている。併し、何も潮浴びは明治になって始ったと言うようなものではない。

それ、三保松原で天人が羽衣ストリップを演じた昔噺だってあるだろう。あれだって海水浴だし、須

麿で業平朝臣が、松風村雨の二美人と宜しくやったのだって海辺避暑の魁けといえるだろう。知多半島の大野海岸は弘法大師が開いた日本最古の海水浴場だと宣伝しているが、どこが始めでもそんなことはいい。涼風海を渡って軽羅の裾を払う頃、海浜の真砂も漸く冷えて、恋を語るによく、人によってはアオカンの快を貪るにも適する。我は海の子、夏場に海にでかけて海水着の麗人ショォをみたくないような奴は蚤か蚊に喰われて死ねばよいと言いたくなることだ。

秋がわき

女に餓えるとか男に餓えると云う言葉がある。異性欲しさに悶えている男女の形容で、腹が減って堪らなく食物ならば何でも喰べたいと云う気持を、セックスの方に応用して使っているのである。

昔はそういう気持を腹が減ったではなく、咽喉が乾いてやり切れないという気持で表わしていた。天高く馬肥ゆる秋は腹も減るが、咽喉も乾くというのであろう。それを特別に秋がわきと呼んだ。秋渇きの意である。

はたして人間の性慾も秋に高揚するか如何かは判らないが、暑くて身体の大儀だった夏が過ぎ、涼風が立ってくれば、何となく心も動くことだろう。妊娠率も高いそうである。川柳に「秋がわきぬくより早く出合しい」と云うのがある。同じ言葉でも腹が減るよりも、咽喉が乾く方が、性的欲望の熾んなる気持ちを表わすにも相応わしいかも知れない。実際に情念の熾烈な時には咽喉が乾くのであるから。

酒

何とかの生酔いは女房嬉しがりという川柳があった。ご婦人は湯上り、殿方は一杯機嫌というところが一番上味だとされていて、昔から情事に酒は付きものである。酒を飲んでいると精神が遅緩して女ならば平常の慎みを幾分忘れて本性を露すし、男なれば一応の早漏的傾向を抑えることができるようだ。

お神酒あがらぬ神がなかった如く、どんな未開人でも醗酵したアルコール分の味は知っていて、浩然の気を養う術は心得ていたようだ。別に媚薬という程のものではないが、これを用いると世の中が桃色にみえて楽しい。人間、男子が飲めるものなら女性だって十人の七人までは上戸である筈で、そんなに男女の体質が違うものとも思えない。現代の女性は須らく旦那様の晩酌のお相手位はできなくてはウソである。ところがご婦人は一杯やると気がゆるんで飲んだ酒が情怨を沸かすいもり酒であろうが、催淫用カンタリスをまぜ合わせた媚酒であろうが、見境がつかなくなって、とかく乱に入るということだ。楽しむべきは酒であり、警むべきも酒ですな。

スポーツ

スポーツとエロチシズムとは全く関係がない筈のものである。男女の交合を夜のスポーツなどと云うが、夜のスポーツはどうも体力を消耗させて、体力を練るスポーツ精神とは筋が違うようである。いや、それどころではなく、性教育者などに云わせると、青年の性慾を抑えるには、大いにスポーツをやれなんぞとまるで鰻と梅干の喰い合せみたいに云うものもある位だ。

だが本当にそうなのだろうか。スパルタでは娘達はパンツも穿かず、素裸で男性の前で競技をしたということである。それでスパルタが武断の強国になったという訳でもあるまい。尤もスポーツに長じた

女流選手は天二物を与えずで余り美人はいないようだが、それでも女は女、運動服の肌身露わな姿は男性の目を娯しませるに足るらしい。女子野球、女子競輪の魅力がエロチシズムだとすると、水泳やスケートも充分にそういう対象になれる。いや、競技場のスタンドに並んだ女子スポーツファンのお行儀を下から仰ぐと、なかなかエロ味横溢であることも忘れてはいけない。

白露

九月八日は白露、一年を五日単位にすると七十二候、その四十三候目から、四十五候目までを云う。つまり廿四節気と云うものの十五番目に当る訳だ。白露は気界冷却して露白しと云われ、四十三候は鴻雁来、四十四候は玄鳥帰、四十五候は群鳥養羞とある。つまり雁の来る頃だと云うのである。この雁であるが、昔、牛若丸は雁をみて兄弟を想ったとあるが、八幡太郎義家は鴻雁の乱れで敵の伏勢のあるのを知ったと云う。「野良出合行雁つらを乱すなり」とは川柳子の野次であるが、この雁の首は雁先きなどと云われて、男根の形容になっていること、亀の子と同じである。「雁高はくわえてひくと思うなり」「雁高は抜くとき藪の音がする」「紫色雁高死ぬ死ぬと女出し」などと云う。雁高と云う語もあって、亀頭の処をいうらしい。古い陽物比べの絵巻にも優勝者に、「カリ四寸」などと云う註が入っていた。白露に因んでの雁談議である。

眉

昔は娘が嫁に行って女房になると眉毛を剃って、歯をおはぐろ（鉄漿）で染めた。その上に髪の形も違うし、着物の柄も変ってくる。この女所有者あ

り、立入禁止と云う看板を身体全体に背負わせられていたようなものである。そこへゆくと今日の若い女性は、お嬢さんか奥さんかの区別が殆んど判らない。地味なスーツでいるから奥さんだと思うと、これがミスだったり、派手な姿にお嬢さんだと思っていると、何とそれがミセスだったと云う喜劇はザラにあることだ。

「花嫁を二たかみそりでウリにする」とは処女から女房への感傷を眉を剃ることで表わしたもので、かつて帝展に上村松園女史の「眉の名残り」と云う肌の透いた薄物で立膝の美人が眉を剃っているあぶな絵情緒纏綿たる画が出品されたことがある。蛾眉と云えば眉だけを以って美人の形容としたものであるから、この頃ではチョーク一つで引いてしまうようだが、眉の美的価値も馬鹿にならぬことを忘れないようにしたい。眉の毛の濃いは多淫、薄きは浮気者ということも云われている。が、それこそ眉唾物の説である。

いも

芋名月などと云う言葉があるが、芋は何と云っても秋の季物である。天高く馬肥ゆるの候、女性も芋を喰ってますますポッテリとしてくるのである。薩摩芋、馬鈴薯、里芋、八つ頭、山の芋と種類は多いが、何と云っても芋と云えば薩摩芋でご婦人の好物、明治時代には女学生のことを芋書生なんぞと呼んだが、上の口で喰べるばかりではなく、握り太の甘藷は女性自慰用にも用いられたそうだ。

その方で歴史的に著明なのは道鏡が孝謙女帝に薦めたと云う山の芋で、これは古語拾遺だったかにでてくる。芋のアクはかぶれ易い。手足がかぶれるという位だから形状のみでなく、その方のかゆみの効

果もあったのかも知れないが、この方は下の口ばかりでなく、月見芋、とろろ汁など、精力増進にも大いに適応するのである。芋ほり坊主などというと甚だ安っぽいが、終戦前後は我々も大分食料として芋のご厄介になって生きてきた訳で、今更芋の悪口は申せない義理合だろう。そこで余りお色気とは縁の遠いお芋の艶ッポイ用途についての一席である。

半男半女

医者は半陰陽と云い、古くはふたなりなどとも云っていた一種の奇形である。もともと人間も雌雄の別ない一体であったとしたなら男女に分れてからでも、その徴候がどこかに残っていたとしても、不自然でないかも知れぬ。陰茎と陰挺とが似ているのも、猿から進化した人間に尾底骨があるみたいな現象なのでもあろう。そこでごく稀には一身にして両性器官を持った人間が現れるのである。我国の古絵巻「病草子」には既にちゃんとした半男半女が描かれている。勿論これはその絵巻の題の通りひとつの病例として描かれた訳だが、もし人間が一人で両性を具備していたら朝には女性となり、夕には男性となって、甚だ複雑便利で、人生を二倍に楽しむこともできるのではないかと云う理屈もでてくる。古代ローマにはエルマフロディットと云った半陰陽の神様がいて半アフロデット（半ヴィナス）と云うように女性的な姿をしていた。

黄蜀葵

「これやこのねりぎの花ぞ大いなる花恥じらわで陽の下に咲く」と云うのは誰の歌であったか覚えていないが、夏の庭先に麻の葉に似た葉をもち、芙蓉の花のようで黄色い大きな花が咲くのを、あれは黄蜀葵というのだと教えられたことがある。東京ではよくみかけたもので、花の種類も紅と黄とあった。ようだこの美しい黄蜀葵が衆道（男性同性愛）の秘薬通和散の原料だと知ったのはずっと後のことだが、通和散は一名ねぎりと呼ばれた。

粉薬で唾で解いて塗るのであるが、通和とか練りぎというところで、どんな効能があるかは考えてみればお判りだろう。江戸湯島天神下伊勢七から売りだされたもので、湯島附近は陰間茶屋の多いところだった。「天神の裏門で売る通和散」、「大師流にて筆太に通和散」の句もある。ただみれば美しい夏の花であるが、そう思って黄蜀葵を眺めると、その黄色の花弁や黄褐色の蕊のあたりに何か妖しい美しさがひそんでいるようにも思えるから妙だ。

除毛燭器

高名なある彫刻家が外遊中に入手したというご自慢の珍妙なギリシャのランプがある。土製でごく小さいものだが、燈明台のような形をしていて、表面にすこぶるエロチックな浮彫が施されている。昔の奴はこんなふざけた道具を使っていたんだねと所有者は笑っていたが、何ぞしらん、これは女性のどっかの毛を焼き切るために用いたお道具なのだ。

ギリシャのヴィナスなんかの彫刻をご覧になるとお判りのように、古代ギリシャ人はわざわざその毛をばカミソリでそったり、ランプの灯で焼きとったりして、白磁の如き美を嘆賞したものだ。それでそのころの大喜劇詩人アリストファネスの詩に「ランプよ、ランプ、お前はご婦人の深窓までもよくご存知」というのがある。「せめてなりたや風呂場の板に、何とかしたり、眺めたり」という日本の俗謡に似ているが、日本では多毛性の女のために、江戸時

代には毛切り石というのが銭湯にあった。いささか東西揆を一にした風習である。

馬　市

南部の馬市は九月四日だったろうか。秋風が吹くと馬喰が東北の馬市に集ってくる。馬と云うのは、馬敬礼などと云う言葉がある位に、長大な陽物の隠語にされているエロチックな動物である。

殊に馬のかけ合せは熾なもので、これをみていると七十翁でもスタンド・アップし、年頃の女は立っていられず座りこんでしまうという位である。それで、江戸時代の大名などは、お姫様の気持が結婚に適不適かと云う判定に、股に紙をはさませて、馬の交合をみせたと云うことだ。「ねじわらをかへと四五人おやしかけ」と云う句は馬の交合ではないと云う説もあるが、その位にみている人間を衝撃するものなのである。北原白秋の「フレップ・トリップ」に北海道の種馬場の種つけの壮観が記されていたが、一度はみて損のないものらしい。種つけは初夏の候だが、馬市にくる一才仔、二才仔の若々しい姿は、何となく情慾的な立派さを感じさせるものである。

神田祭

十五日は神田明神の祭礼だ。戦後漸く逆コース的歩みだしも始って、今年辺りは相当に、やれ寄附だ奉納だと賑やかなことだろう。昔はこのお祭で、身代限りをしたものもあるという位で、山車や踊り屋台が氏子芸者の手古舞姿に飾られて、練り歩いたものである。

「祭礼にへのこのまじるとしま町」このとしまは年増ではなくて神田豊島町である。へのこと云うのは猿田彦命、神田祭には豊島町から猿田彦の大屋台

がでたらしい。猿田彦命は天狗ッ鼻で天孫降臨の道案内をし、後に天の岩戸のストリッパー天鈿女嬢と夫婦になったと云う人物である。巨大な陽根の所有者で、後世の道祖神や幸の神にもなり、天鈿女嬢とコンビで天狗とおかめの面として併称される名誉ももっている。

神田明神は大己貴命が祭神だが、平将門も併祀している。将門は逆臣と云われたが、京都に対して関東の気勢をあげた見栄坊である。神田っ子の先祖だと云えば成程と首肯ける点もありそうな気がする。

相　撲

秋場所が始った。相撲は国技とまでいわれた健全娯楽だが、あれでなかなか捨て難いエロティシズムもあるものだ。男が今頃になってストリップ・ショウにありついたことに比べると、女の子は昔から裸体鑑賞の立派な機関を持っていた訳で、茶屋の男衆がよく芸妓の坐っていた桟敷の座布団がしめっていたなんぞというのも無理がない。

いきみかえった肉塊の取組、ついつい夢中になって黄色い声を挙げてひいき力士の名を呼んだり、おもらしをすることもありそうだし、真表四十八手が寝床の上の方法に応用されたり、泣きだして夫婦相撲が分けになりなんていわれるのもご尤も、組んで、突いて、腰を使っての技術だから、比喩もそのまま生きる。

川柳子は「土俵入りへのこの衣裳みものなり」とひやかし、支度部屋では「お授けで関取ちっぽけなへのこ」と笑う。さらに「女のすごさ関取を持ちあげる」となると、「相撲取りを良人に持ち」の山の神の豪勇を讃えたユーモアもある。

江戸吉原

吉原は本当は葭原であり日本橋にあった。徳川氏の江戸入国後まもなく、天和三年に日本橋葺屋町の芦や葭の茂った原っぱに遊女屋が許されて始めて江戸の遊廓ができ、ついで市中に風呂屋を表向きの業とした湯女をおく私娼があちこちに現れてくると、やがて明暦三年の大火で江戸は灰燼に帰してしまった。そこで、遊廓を今度は浅草の一隅の日本堤に移したのである。これが今日までの江戸の吉原の起りである。泰平三百年の幕府時代には、町人は経済力を握っても、これを公然と権威をもって威張る訳にはいかない。それが内攻して人間の愛欲の生活に力を注ぎ、江戸文化と云う遊廓を中心とした文化をなし、遂に吉原の遊女は国主大名を振っても自分の気持をたて通すと云うような意気をもつようになったのである。数度の大火や大震災、戦禍にあって日本堤の土手やおはぐろ溝もみる影もなくなったが、吉原が日本文化の一遺蹟であることは誰も否定できないだろう。

菊

九月九日は重陽の節句である。菊水の宴を張る菊の日であって、江戸の年中行事には、三月三日の桃の節句などと並べてでてくる。菊は日本の国花だそうだ。宮廷の紋が十六弁の菊だからなので、国花は朝日に匂うさくらだという説もある。併し、菊と桜では感じが大分違う。菊は一つの花に美しさがある個性的のものだが、桜の方は集団的な美しさである。どちらがよいかは人の趣味に任せてもいいところで、菊は十六弁、四の倍数である。東西南北、上下左右の四方がその単位で、菊の花は四十八弁と

も云う。それはいいが人間のお尻の襞も四十八あるのだそうで、肛門のことを菊の門、菊座などと云って、「裏門へ廻って菊の根分かな」などと衆道男色の句もある。ところがまた「四十八ひだとはよくも算えたり」となると後門だけの意味ではなく、前門の意にもなろう。「女帝は九十六ひだでおわします」は、例の道鏡の奉仕した老謙女帝への句で、常人ならざる倍額であり、どうも前門のことでないと話が通らなくなるのである。

集団見合

終戦後に集団見合と云って、結婚希望の男女が集って、ピクニック的な内容を盛りこんで玉川だとか何々遊園地などに会し、嫁選み婿選みをすると云うことが始って大いにジャーナリズムを賑わした。だが、これは何も戦後の新発明ではなく、古代の共同婚の遺風として、昔からこれに似たことはあって、嫁市などと云って各地で行われていたものなのである。千葉県夷隅郡大喜多町の夷隅神社では毎年七月上旬、秋田県山本郡能代町日吉神社では毎年陰暦四月二の申の日に娘達が着飾って参詣し、これを若者やその親が利用して嫁選みをしたと云うことだ。

「四五年もお講に目立つ縁遠さ」と云うのは、浅草本願寺の報恩講がこれまた嫁選みの場所になっていて、娘達の集ってきた盛観を思わせる句である。東京近郊では石神井の長命寺、本立寺、大泉の妙福寺、谷保の如意輪寺が嫁市の立つ場所として知られていた。

腎虚

川柳に「亭主立往生をする美しさ」と云うのがある。立往生というのは陰茎が剛直してしまって性交

不能に陥る腎虚と云う病気を指して云っているので、過度の性交が生んだものだといわれていた。それで「なぜ腎虚させたと姑嫁をにじ」と云う句もある。

今日の世の中で性交不能の症状を示すのは神経衰弱や陰萎など、寧ろ勃起不能のものを指しているので、あまりこのような不能者についての話は訊いたことがない。ローマの性神プリアポスは強大な陰茎の所有者で、病的な陰茎強直症をプリアポチズムとか云うということだが、江戸時代に特にその患者が多かったというのは可笑しい。珍らしいので川柳などに扱われたものかも知れないが、「嫁の身になって嬉しい腎虚なり」と云って、そんなに嘆く必要もなさそうだ。

処が、「気の毒さへのこばかりに脈があり」「悲しさは昔は帯へはさんだり」「泣きながら女房へのこへ土砂をかけ」「腎虚にて死んだを嫁は苦労がり」等あって、命とりのようにもみえることだ。世の博士方のご教示を得たい。

お彼岸

年に二度、春と秋のお彼岸には不信心者も先祖のお墓にお詣りに行くと云う。これは確かにアヴァン・ゲールの美風だった。だが、孝行をしたい時には親がなしの慨きもあれば、漸く人生の味を覚えた良人のいない若後家の悲しみもそこにあろう。ここでは後者の方を採りあげる。

良人に先き立たれた妻は一生を未亡人で過すと云うのが、封建社会の女子の徳とされていたが、三十後家のたたないのは今も昔も変りない。そこで後家にとって最も近ずき易い男性が亡夫の菩提寺の和尚と云うことになり、「若後家をすすめて和尚法に入

れ」などと云うこともあって、そのあげくが「心中に逆朱消すよと後家よがり」に到り、世間からは、「後家と坊様こちょこちょとした同志」と笑われ、「後家の供庫裏でゆすって酒を飲み」なんて事態も起るのである。お彼岸に阿闍加さげた黒ずくめの若い女の姿をみると、坊主ならずともグッと生唾を飲みこみたくなるものである。

映画

映画と云っても常設館で何割かの税をとられて眺める普通の映画ではない。会員組織で常設館の入場料の十倍近くの観覧料を捲き上げられると云うあの映画である。戦後には小平事件を仕組んだものなんかもあるというが、多くは戦前に上海やハルピンから輸入されたり、洋行者のフランス土産だったりしたものの複製が跋扈しているらしい。雨降りフィルムの中での痴戯のエゲツなさは、何とも凄じすぎて観ている方が寒々としてくる。

我国にこれが伝ったのは大正初期である。上山草人の小説「練獄」の中にでてくるのだから古い。映画が発明されるとすぐ、人間はこの方への応用を考えたのだろう。昭和初年にも「春の夢」「フラワー」などの迷画が上映されてこれを観たり、頒布した知名の士が新聞の三面記事にまで登場したことがある。名古屋では皇室関係の写真の試写の後でこの種のものを映写機にかけ問題になったことがあった。

月見

八月十五日はお月見である。縁側に台をおいて、すすきの花を飾り、団子やら柿、栗を供える。まことに日本的な風景である。「名月や座頭の妻の泣く夜かな」まったく、何はなくとも秋の美しさは十五

夜に満喫できるだろう。子供は子供なりに月下に戯れ、影踏みとか、子とろ子とろではね歩く。「お尻の用心、ご用心！」なんて着物の裾の捲りっこをして遊んだものである。これを性的遊戯なんぞと鹿爪らしく形付けるのは野暮の沙汰かも知れない。

月に供える餅団子は清浄な身体で作られねばならない。処が月というのは月やくに通じるから話が些か下がってくる。「故障の儀あって亭主が餅をひき」「お月見を亭主に十五まるめさせ」女房が月経で不浄だから、亭主が餅をこねてまるめると云う訳である。これは夫婦の話だが、遊里の月見はなかなか喧しく、後の月見などという約束があって、八月十五日に登楼すれば、一月あとの九月十五日にもウラを重ねなくてはならぬ不文律もあったのである。

嗜物症

シールズ軍がくると選手のサインを欲しがるファンが殺到する。昔の歌舞伎ファンは役者のかみ捨てた鼻紙を拾って大事に珍蔵したというが、共通したファン気質であろう。第一次大戦後にポーランドの大統領に選ばれた大ピアニストたるパテレフスキーがアメリカを演奏して回ったとき、彼の美しい房々とした髪の毛をファンにせびられたという話は有名である。例え一、二本ずつでも、それに一々応じていたら、この巨匠がヨーロッパに帰った時は禿頭になる訳だが、その代りに、彼の愛犬がすっかり毛を刈りとられて裸になっちまったなんてゴシップが飛んだものだ。ベートーヴェンも生前、貴族の女達に髪の毛を欲しいといわれたことがある。

わが国では、死後の片身に遺髪を遺すという風があるがこれらは確かに一種のフェティシズム（物嗜好症）といえるだろう。ただその毛がどこやらの毛でないだけで、そういうことも普通人の心理にやはり潜んでいる気持の延長にすぎないのだ。

相模女

神奈川県出身の方には余り結構なことのようでもなく、ご迷惑なことだろうと思うが、江戸時代の川柳をよむと、相模女はたいへん好色家だということになるのである。「いんらんの巾着相模持っている」、「相州の産股ぐらの乱れ焼」、「二三日間がありや相模恨み佗び」等々。これは江戸の近在の相州から女中奉公にやってきた所謂相模下女の句なのである。千葉からも埼玉からも女中はきたのだろうが、一番近い神奈川県から多くきたので、女中の代名詞が相模となり、何も相模生れの女性が特別に淫乱だったと云う訳ではないのだろうが、女中の風儀を代表して相模下女の淫名を謳われるようになったのだと思われる。

「させるほか相模悪気のない女」、「してくれないと取付くと相模云い」、「チョクチョクと仕てくんなよと相模云い」、「一番でもうおくのかと相模云い」「相模下女いとし殿御が五六人」、「押寄せて来ても相模の女武者」、「好きな下女所をきけば小坪なり」小坪は鎌倉の地名、女武者は巴、板額を利かせたのであろう。

破礼

川柳の破礼句の作者にも女性があるそうだ。「産れると七十五日無常門」（鉄扇女）「山伏の天狗に逢わぬかのへ申」（よし子）などの柳樽中の句がそうだと言う。もともと、男女同権の筈なのだから、

猥談だって男ばかりの好物ではない筈だ。偽言だと思ったら、奥さんに猥談を試みてみると、十人が十人「そんな話イヤッ！」と口では言っても嬉しそうな顔をすること請合いである。

江戸の浮世絵師の殆どすべては枕絵を描いた。昔の絵師は枕絵を描くことを別に不道徳なこととも思っていなかった。結婚初夜の手引画なのだし、裸体画の発達していない我国では人体研究の教材になっていたからだ。それで数少ない閨秀作家の中でも、初期の菱川師宣の高弟山崎竜女などは文献にもある位に春画の名人だったと言われ、幕末の葛飾北斎の娘お栄もまた父に就いて画を学び、枕絵を描いたとある。女性が男子と同格であるとの主張への一資料として知っておいて下さい。

ほうづき

鬼灯は浅草寺の四万六千日の市に並んだものだが、夏から秋への風物詩になくてはならぬ添景品である。団扇片手の夕涼みの少女の口に鳴ったり、置屋の風鈴の下に鳴っている風情は、下町情緒纏綿たる思いがあって、ちょっと蓮ッ葉娘の姿を髣髴とさせる。

「口を吸うとて鬼灯をついと呑み」と言うのは、チュウインガムよりも確かに粋だ。わざと香料などを用いないで、音まで発する処に、鬼灯のエロチシズムがある。接吻の小道具には使い方によってはなるだろう。

だが、この可憐な秋の植物も必らずしも逢引の備品としてだけ用いられたのではない。田舎などでは、その結果の方にも影響力をもっていて、この根

を利用した堕胎ということも、相当盛んに行われていたようである。その根を膣内に挿入すると言うのだから、随分危険の多い荒療法であるが、妊娠中絶が非合法であった時代には、こんな乱暴なことも平気で行われていたのである。

張形

女性専用の自慰に用いる陰茎型の道具である。ギリシアではオリスボスと称して革で作ったものが用いられ、陶画にその図が残っている。今日でも子宮保温器などと称して近代的なそれが行われているそうだが、特別に細工をしたものでなく、甘藷、山の芋、大根など自然物を自慰に用いる風習は、農村などに古くからあったに違いない。

張形は水牛の角、象牙などで作られて小間物屋が売っていた「小間物屋スポスポさせて一本売り」

何時頃から我国に伝ったものだか知らないが、足利時代の「袋法師絵詞」という春画巻などは、どうも張形から着想されたもののようだ。西鶴の「一代男」には御養の物と称してでてくる小さいのはせせり形、爪形などと言い、指にはめて用いる。普通は湯で湯掻いて温め、足の指に紐で結わいて使うのだが「長局くたびれ足へくくしつけ」互い型というまん中に鍔をもった両頭のものは「部屋方の兄弟分は互先」などと言って同性愛的に使用されたようだ。部屋方、長局は御殿女中のことで、そう言う女護ガ島で最も需用があったものだと言われている。

湯女

銀座のまん中に東京温泉が出現した。繁迫した国際情勢の渦の中に、ほのかな桃色の平和な湯煙りを上げようという謎かも知れない。海水着に男性を魅

惑する肉体を包んでサービス・ガールの銓衡が行われたそうだ。モダン湯女である。北陸の温泉にはシシと言って温泉宿に湯女がいる。江戸初期にも風呂屋に湯女がいて浴湯のサービスから、浴後の寝室のサービスを受けもったと言い、松岡映丘画伯の傑作「湯女」に嬌名を現代にも伝えたが、モダン湯女のサービスはどの程度まで及ぶのやら、奥様方はまた心配の種が一つ殖えたことだろう。尤も一般の銭湯で女風呂も男の三助がサービスしているのだから、これで男女同権の立場が確立されたのかも知れない。「お湯殿は腿に白粉塗ってでる」と言って殿様のお風呂につく女中は顔ばかりでなく、腿にも色気を持たせたことは想像のできることで、パリのトルコ風呂のマッサージ・ガールの商売が、模倣されたのであるから、お色気は経営の第一義的手段である。

観相術

電車などに乗って手頃な読物を持っていない時は甚だ手持無沙汰で困るものである。そう言う退屈凌ぎには、向う側に坐っている人の様子を眺めて、あれこれと自己流の人相判断をやると大いにマがもてる。運勢とか相性なんてそんなヤヤこしいことを考えるのではない。外部に露出された肉体的条件を観察して、女性ならばブラウスやスカートに覆われた部分の予想を娯むのである。これは些か礼を失するような気持もあるかも知れないが、他人をみてこれは金持か貧乏人か位の判断は平気でつけるのが人情なのだから、相手にみられている不快さを与えない程度なら一向に差し支えない筈だ。

鼻の大きい男の一物は大きいとか、眉毛の濃い女性の陰毛は濃いとか、唇の厚い女性のドテは高いとか、小耳の割れ目の幅は女性のあそこに比例するとか、そう言う俗談を主としてもよいし、自分や奥さんを標準とした自己流の尺度で測ってもよい。要は退屈凌ぎの桃色化なのだから、科学的根拠がなくても構わない。寧ろ想像力の訓練だと思ってやってご覧なさい。

切支丹艶画

邪法キリシタン宗が絶滅された後でも、オランダ船だけは長崎に入港を許されていた。禁じられても、地下にくぐった宗教心というものは容易に根絶できるものではない。クルス（十字架）を胸に描いてオランダ船見物にでかけた長崎の佳人が、ぞろぞろと船室をみてまわっていると、カピタンの部屋にナンと油絵がかかっている。てっきりキリシタンの聖画だと思ってひざまづいて礼拝してきたが、後でよくみると裸の男女が相擁したいかがわしい図である。

この話をきいた江戸の蜀山人、さてさて無学というものは情けないもので、春画に拝跪するなんぞ！と大いに笑ったということであるが、考えてみるとこれもちとおかしい。アントワーブの女郎屋にはルウベンス筆という大春画が掲げられているというし、また、ヴァンデ・ヴェルデ博士を生んだ国かもしれないが、船長室に春画という話はない。恐らくギリシア神話の構図かなんかだったに違いない、習慣の違いというものも大きな誤解のもとになるものではある。

惚れ薬

世の中に薬もいろいろあるが、惚れ薬のように薬物的効果が精神作用にまで及んだとしたら、全く世の中は複雑怪奇になり過ぎるかも知れない。幸いに

原子爆弾は発明されても、まだまだ惚れ薬まではできていないから助るのだろうが、それでもそんな調法なものがあればよいと言う願いは、東西古今に亘って人間の夢としてあったようだ。

沙翁の「真夏の夜の夢」では悪戯者のパックが惚れ薬の草を振り廻して大騒動をするし、ドニゼッチのオペラ「愛を誘う薬」オペレッタではサリヴァンの「魔法使」フリムルの「惚れ薬」など言う当り狂言もあった。

上野の黒門町にゆくと黒焼屋が昔は軒を並べてあって、いもりの黒焼と言うのを売っていた。雌雄一匹ずつを壺にいれて黒焼にしたものだが、その粉を思う相手に振りかけるとか、食物に入れて喰べさせると忽ち惚れこんでくると言うのだから、粉が風で他人にかかりでもしたら一大事になろう。あんまりそんな話をきかないところをみると、その効果も眉唾物だったのだろう。

神無月

「あれをしてこれをさせてと大社」十月は神無月と言って、全国の神様が出雲大社に召集されて、ここで縁結びの大会を開き、氏子の青年男女の婚姻を予約させるのだと言うことになっている。だからこの期間はどこの神社も神様が出張中で、開店休業と言うわけ。

人間の縁なんてものは、異なもの味なものと言って、まず割れ鍋にとじ蓋である。恋愛結婚と言ったところで、二人が偶然どこかで逢ったと言うだけのもの、別に全国の一人一人の候補者にあたってみた上のことではないのだから、見合結婚と五十歩百歩みたいなもんである。

この偶然を神様の配合だと解釈したのが、出雲の

縁結びなんである。尤も古代の宗教心では、何事も神様だとしたのだから、神様の決めたものだとしてひびの入った夫婦関係も破れずにいたのかも知れない。併し鬼ではない、神のいぬ間の洗濯と、今日のアプレ種族なら、このチャンスに悪事を企むまいものでもなかろう。

松茸

関西の知人から松葉を敷いた松茸の籠が届くようになると、何となく戦前の姿をとり戻したようで嬉しい。高価なはしりが店先に並んでいるのはみているだけでも、季節感がしみじみと湧いてきて、秋を感じさせる日本の風流である。ところが、未亡人が松茸を握って溜息をついていたり、花嫁が松茸を店先で撰っている漫画になると、どうも人間味があり過ぎて悩しくなる。

「道鏡の塚からでたかさ松茸」という川柳があるように、松茸の形はご承知のように失礼な格好をしていて、昔から男茎の隠語になっていたようである。「松茸を見ても相模ははずむなり」、「松茸を握って相模ねばるなり」「松茸でおごと剝身を掻き廻し」なぞというのがあると思えば「松茸の元草を分けて虱狩り」なんて汚い句もある。西洋ではきのこの擬人化は童話なんかにこそでてくるが、男茎はバナナやアスパラガスで表されている。これはどうも松茸の方が風雅なようである。

トルウ・ラヴ

「ガミアニ」、「ファニイ・ヒル」、「バルカン戦争」などの艶書が相次いで出版され、発禁になったりして話題に上った。最近になって石川啄木の「一握の砂中の「赤紙の表紙手擦れし国禁の書を行李の

底にさがす日」の国禁の書が、想像された「共産党宣言」でもなければクロポトキンの翻訳でもなく、明治年間に発行された英書よりの翻訳だという「トルウ・ラブ」恋の真相という春本のことだと彼の日記から判ったことは愉快な話である。

この書の英文もみたが、これがはたして米人ジョン・トーマス君の原作か如何かは甚だ怪しいものだが、明治四十一年八月秘密出版として最初の発禁を喰っている。米国のカレッジの卒業式の夜、新卒業生達が売女二人を裸にして、童貞破りの体験談を語って仲間の童貞者に破瓜を誘う筋なのだが、その各自の体験談が一応ヴェデキレトとか、モオパッサンの濡れ場にヒントを得たもので、更に竿頭一歩を進めたようなものでちょいといける物語である。

柘榴

クリスト教徒は葡萄酒を飲み、パンを喰って血と肉の味を経験するのだということである。宗教的な考えなのだろうが、何となく喰人的な話である。処が仏教の方ではざくろの実が人間の味を持つと言っている。人間の味があんなにさっぱりしたものとは思えない。

ぶんなぐられて皮膚が割れたとでも言う時なら、ざくろのようになったと言えるかも知れないが、味の方はどうも受け合いかねる。

印度の訶梨帝母は初め人間の子供を常食にしていたが、仏様の説法をきいて改心し、後には子供を可愛がる神様になった。所謂鬼子母神のことである。ところが食肉の味だけは忘れられずに、専ら一番味の似通ったざくろを喰べて、その気分をまぎらわし

ていたのだそうだ。古い仏画などには片手に子供を抱き、片手にざくろを持った図像があるが、これにお詣りすると子供ができたり、オッパイがよくでるなどといわれている。何だか理屈にあわないようなことではあるまいか。

迷信

性の迷信というものは、いつの時代にもあるものであるが、江戸時代にはなかなか多かった。庚申の日の交合禁忌もそうだし、淋病の治療に月経中の交合がよいなど、というのは噴飯的迷信の例であろう。ご亭主が伊勢の大神宮へ所謂伊勢詣りにでかける。今と違って汽車や汽船がある訳ではないから、往復とも膝栗毛、軽くみつもっても往復に二週間ぐらいはかかるとなると、女房ども半月以上は空閨をかこたねばならない。熊さんの女房には八ッさんが平常から虎視耽々である。当の熊さんが半月も留守にすることは甚だ冒険である。そんなことで考えだしたのだろう、亭主が伊勢詣りをしている留守に女房が不義を働くと、神罰立ち所にあって陰痙攣を起し、抜けなくなるぞ！　という俗説である。何とも理に落ちた迷信だが、川柳に曰く「抜けぬぞと女房を嚇し伊勢に立ち」そこで「抜けないと嚇されてせぬ伊勢の留守」もあれば「ぬっと入れまず抜いてみる伊勢の留守」もあり、十カ月目に生れた子を伊勢詣りの記念に、「間男の子と知らず伊勢松とつけ」もある。

べったら市

この頃は十一月に行うが、十月二十日は夷子講で、その前夜には日本橋大伝馬町通りで夷子講に使う夷子鯛や浅草漬大根を売る市がたった。これがべ

ったら市である。

肝心の夷子講は忘れられたが、漬物市の方は今日でも遺っているようだ。この日に着飾った女客が通ると、この漬物をなすりつける風習があった。どう言う因れがあるものかは知らないが、これは明らかに汚物塗布症とも言うべきもので、変態性欲的傾向の多分にある行事だったと言えよう。

電車や映画館の混雑の中で、婦人客のスカートや裾にザーメンを発射したり、インクや墨を塗る心理と同じで、一種の性的快感をこれによって得たに違いない。特に大根の漬物で、白い糊がついているのだから、擬似コイトスの象徴とも解することができる。とすると、誰彼おかまいなしになすりつけるのは、一種の乱婚時代の遺風とみてもよいだろう。

コンドオム

産制器具として一番お馴染みの深いコンドオムは一体いつ頃から日本人も使い始めたのであろうか。文政年間に南蛮船が長崎へもってきたのであろうと言われている。薄い鹿のなめし革で作り、茎袋とか防瘡袋と呼ばれ、蛮名をリュールサックと言うのはルーデサックの転化である。

これがゴム製になって普及したのは明治十年頃からで、丁度花柳病予防法が発布されたので、その頃のコンドオムは産制器としてでなく、花柳病予防具として発達した。当時は小夜衣、東西嚢、根嚢、拉等薩克などといわれて、高級なフイッシュ・スキンなどが輸入されたのはもっと新しい。

ヨーロッパでは十六世紀になって、フランスの医師が病菌予防具として紙製のものを創案したのが最

初だと言うが、面白いことにイギリスではこれはフレンチ・レターとよび、フランスではこれをカポート・アングレーズ(英国帽)と呼んでいることである。

女握り

親指を中指と人差指の間に入れた形は、女陰を示すものだとは小学生でも知っている。これを女握りというので、一種のまじないに使うこともある。ところがこのあまり讃めた格好でもない指の格好をした大黒様の像が少くないのだ。国宝になっている奈良三月堂手洗堂に安置したものはオメコ大黒と言われて、鎌倉時代の名作と呼ばれており、奈良県矢田の松尾寺、滋賀県平田村光明寺の大黒天もともに国宝であるが女握りの印相をしている。

大黒様も印度の神話のマハアカアラからきているのであるが、大国主命と混同して我国では福の神になっている。頭巾を冠った格好は陽物に似て、二つの米俵に乗っている格好は、後からみると陰茎と陰嚢の形状をなしていると言われる。仏教に入った印度神と日本の神様の抱き合わせで、施福というところに性崇拝が混入してきたのだろう。女握りではジャワ島バタビアのオランダが持ちこんだ大砲につけらたものが世界でも名高い。

枕

落語のまくら、言葉にあやを添える枕言葉などは幾分儀礼的なものであるが、枕草紙、枕紙、枕金などとなると大いに色ッぽくなる。枕は人間が寝る時に使う道具だが、浅茅ケ原の一つ家の石の枕なんてことになると、あんまり枕を高くして眠られない。

昔の日本は男も女も同じように髪を伸していたから寝るのにも細心な注意がいる。結い立ての髪を台

なしにしては、鬢のほつれは枕の咎よなんてすましていられないから、箱枕を用いた。つい明治時代までは一人前の女は大抵木の台に布でそばからを包んだ小枕をのせ、これに枕紙をあてて使っていたものである。

吉原の遊女にとっては寝道具は商売物だ。枕にも金銀の蒔絵を施し、抽きだしまでついていた。そこに何が入っていたか、まだ伽羅はあったものだが、サックなんてない時代である。それがいつのまにか束髪、断髪、パーマネントになって、もう箱枕なんかいらない。もっとも坊主枕は坊主枕で腰枕の代用にもなるし、肘付きにも重宝だ。

縁切寺

女房と畳は新しいほどよいと言われたものだが、封建的な時代には女の方から離縁を申しでるなどということはなかなか難しかった。

それで亭主の許を逃げだそうと言う女は、神仏に祈るのが関の山で、巣鴨の縁切榎、栃木県足利郡山辺村の縁切稲荷、大阪持明院の離縁厠なんて、縁結びの反対の俗信があった位であるが、唯一の救いは鎌倉松ケ岡の東慶寺、群馬県世良田村の満徳寺などと言う縁切寺に駈け込み、ここに三年いれば離縁が成立するという便法が講じられていたことである。

「三年はむだ穴にして縁を切り」と言う訳だが、川柳子は「松ケ岡そして尻までしたと言い」、「大きいと言いかねている松ケ岡」などと大いに駈け込み女を皮肉っている。

「渡し場でねれきったのをつかまえる」と言うのは、松ケ岡へ脱走を試みた女を六郷の渡しで追手が捕えた光景であり、「ふてえ奴三年待ってしめるなり」とは、三年の期がすぎて寺からでてきた女をもの

のにすると言った事柄を咏んだ句だ。

男装

戦争中のもんぺ使用以来、女性が洋袴をはく風習が起った。これは我国ばかりでもないようで、づぼんを履く女と言うことが、艶消しなことではなく、寧ろ近代的な颯爽とした印象を与えるようにすらなった時代色の表われであろう。

一般に女性の服装は肉体の線をふんわり包んで、胸とか腰とかの特徴を部分的に強調するものが多かったのだが、二十世紀になって、上半身は裸体に近いまでの肉線そのままのものが表れてきた。それが今度はショート・スカートになり、すんなりした脚をみせたかと思うと、洋袴になって、お臀の隆起をむッくりと露わし、歩くたびにそれが二つに割れて揺れるような露骨さを示してきたのである。

これは女性の男装化であり、レヴューなどの男装の麗人趣味にも通ずるのだが、試みに貴方の奥さんに貴方の洋袴を履かせてご覧になると判るが、戦後派のお色気もこんなところに潜んでいるのかも知れないのである。

愛経美術

我国では相撲の取組にならって四十八手という。ところが印度の愛欲文献カーマスートラは六十四種をあげ、アナンガランガはややこれより少く、ラテイラハスヤは三二種を伝えている。

一体、四十八手にしてもどんな組み合せになるのかと思うだろうが、そこはカーマ・スートラの国インドである。南インドのマドラに近いベンガル州のプリイ県ブヴアネシュワルやプリイにいくと林立する印度教寺院の壁面にぎっしりと全く隙間もないほ

どに男女の赤裸々な千差万別の姿態が彫りつけてある。

なるほど、これなら四十八手は愚か、六十四手も驚くに足らない次第で、約千年前からここでは立派な「性の神秘」展覧会をやっていたことになるのだが、これをみてマドラ市で遊んだ友人にきいてみると「なあに、この辺の女が特別な技巧をもってる訳じゃない、猥談家がその道の達人でないようなものさ、理屈と実際は別よ」

下田了仙寺

日蓮宗の古刹として、また幕末の下田開港にまつわり、由緒ある寺として知られていたが、大正の初年に同地の鈴木吉兵衛氏の仏像のコレクションを以ってした武山閣が寺内に建ち、大いに斯界の注目されるところになったが、この鈴木コレクションに歓喜天と弁天が交合をしているような木彫仏があり、これが契機となって住職清水帰一氏が、エロチックな図像、器具の蒐集を思い立ち、日本のナポリにするという大抱負の下にミソもクソも一緒に大蒐集を始められた。それが当時から幾多の弾圧を潜り、一部蒐集品の散佚もあったが、とにかく空襲をも辛くも逃れて今日に到っている。現在は住職松井大周氏が管理していられるが、奈良生駒山に近い菖蒲池の民俗博物館と並んで、今日では非常に貴重な蒐集となっている。秘密室をもつナポリの国立美術館のようなものを作りたいといっていた故清水氏の悲願を今にして思うものがある。

媚薬

媚薬という言葉があるのだから、媚楽という言葉もあっていいだろう。性感を刺戟する音楽の意味である。クロイッエル・ソナタが姦通を唆かしたとトルストイは説いたが、確かに音楽が性的亢奮を助長することはあるに違いない。鳥が啼くのも雌を呼ぶためだと言うし、犬も猫もさかりの時には特殊な鳴き声をする。耳からの刺戟を軽視するのは人間の方が多いらしいが、江戸時代には若い男女を心中に駆り立てるといって、豊後節を禁止したこともあった。尤も広い意味での刺戟には、人間も音楽やオペラを前戯的に使っていると言えるかも知れないし、ダンス音楽なども露骨に催情的になりつつあるようである。肉体のリズム運動であるから、音のリズムを伴奏としたら大いに効果があると思う閨房伴奏音楽と言ったものが、今に現れるのではないだろうか。緩急、強弱の自由さと、音色の変化とを以ってして、実演やラジオでとは言えなくとも、自働装置の蓄音機をレコード化したならば、使用も簡単だし、抽象芸術だから人ぎきも悪くはない筈だ。春本画春、に対抗する春音楽がないのは音楽の恥だとも言えそうだ。

炉開き

十月の亥の日に茶道では炉開きと云って夏のあいだの風炉を蔵って炉を開く風習がある。

茶道ばかりでなく、農家で炬燵を開くのもこの亥の日がいいとされている。この陰暦の初めの亥の日には餅をついて亥の刻に喰べると万病に効くと言われている。町家ではこの日にぼた餅を作ったものである。ちょうど炉開きで炬燵が入った頃である。

「ぼた餅を喰わせた上に女房され」「亥の日から女房さえざえしくくらし」なんて言うのも炉開き、亥の子餅に因んだ句なのである。まことに古風な情景で、初冬らしい錦絵気分である。今日ではスト

ブなんかだから、こうした纏綿たる趣きはみられなくて面白みがないことになったものだ。

枕屏風

この頃はあまり使わなくなったが、昔は寝る時に、頭の方には枕屏風、裾の方には普通の屏風を引いたものだ。座敷が広いと風通しが良すぎるからでもあるが、なるべく外界から寝所を遮断して、落ちついて寝られるようにとの心遣いでもあったのだろう。新婚初夜などは恥しがって、お嫁さんはなかなか屏風の蔭からでてこない。それが世帯染みてくると、いきなり帯やしごきを解いて屏風にかけ「おお寒い」と言って寝床にもぐり込んでくる。いずれにしても日本的な情緒をもった寝室の小道具だった訳である。

だから寝室用の屏風は、大広間の墨絵などを書きなぐったものと違って、極彩色の土佐絵や、浮世絵の貼り混ぜの艶めかしいものが多かった。粋なお茶屋などでは、しどけない女の姿態を描いたあぶな絵から、中には枕絵を貼ったものも少くなく、西洋の貴族や王様が寝室に春画の壁画を描かせたのと規模は違うが、同じような意図を示していた訳である。そろそろ世間もおちついてきた今日、日本情調の枕屏風なども復活されてよいのではなかろうか。

美女美男仏

美女を賞めるのに観音様のようだと言い、美男を讃えるのに地蔵様のようだと称する。観音も地蔵も仏様だから、性を超越している筈だが、やっぱりものは見方で、男女どちらかに似るものらしい。

仏様の本家、お釈迦様がまだ悉多太子と言われていた頃、ある夏、印度だから年中夏だったかも知れないが、暑くてやり切れないのでとろとろと居眠りをした。鎌倉の大仏さえ美男におわすくらいだから本物は絶世の美男だったのだろう。その頃の印度のミイチャン、ハアチャン達が集って、太子のかくされたところをみたいものだと出歯亀根性を抱いた。すると慈悲深い太子は神通力でそれと察し、わざと身体をころがして衣物の裾をはだけてみせたところ、金色サンゼンとして神々しいこと例えようもない。

そこでハアチャン連随喜の涙を流していると、忽ちそこに紅白の蓮の花が現れた、そしてみるみるうちに童子形の一物となり、やがて大人のそれとなって、すっかり観客を感激させたという。ちゃんと「観仏三昧海経」というお経の本にでていることなので、裸レヴユウの元祖なのかも知れない。

四目屋

二十年程前に女学校の教科書に、四つ目屋の絵がでているとか、名称があるとかで大いに問題になったことがある。四つ目屋と言うのは閨具屋なのだから、成程これを女学校で説明したのでは少し行き過ぎと言えるだろう。

四つ目屋は両国薬研堀にあって、本舗は四つ目忠兵衛、佐々木家の紋所四つ目結の紋を商標として、媚薬長命丸の販売で知られていた。勿論、この他に地黄丸だとか張形、りんの玉、肥後ずいきなども商っていたのだろうが、別名女悦丸即ち長命丸は男性が用いて長期抗戦に備えたもので「四つ目屋の功能おめき叫ぶなり」と言って、これを塗ると少しひりつくのだが、しばらくおいて、これを洗い落すことになっていた。「能書にひりつくべしとは何ごと

ぞ」、「ぴりぴりを洗い落して浅黄待ち」と言うわけあるが「もがくこと神の如し」と言われた名薬を「女房のために両国までまわり」と買ってきた親切なご亭主も多かったものらしい。夫婦愛の佳話ですな。「あら、いやらしい！」など、言わないことです。

七五三

男の子は三歳と五歳、女の子は三歳と七歳になると十一月十五日に着飾ってお宮詣りにでかける。愛児の幸福と健康を祈る親心なのであるが、三歳の祝いは男女ともに髪置きと言って、それまで剃っていた頭に始めて髪を伸ばすことになるのである。つまり頭の毛を生やすお祝いなのである。

男子は五歳で袴着の祝いをする、初めて袴をはくのである。女子の七歳の祝いは帯解と言う。紐つきの着物から紐をとって帯をしめるというので、別に「深くなるほど帯を解く」というような桃色な意味があるのではない。ただ「帯解は濃おしろいのぬりはじめ」なんである。また「寝て解けば帯ほど長いものはなし」というような意味深長なことでもはないのである。

灯

絵巻物をみると油皿の燈明がほのかに光りを放っている。ポムペイ壁画でも手燭式のランプが幽かに灯影を作っていた。行燈は浮世絵の持つ重要な添景品であって、妖しい桃色情調を浮べている。いずれも今日の電燈のように煌々と輝いていないところに艶めかしさと趣きがあるのだ。

恥らう花嫁を明るい灯の下に誘うことは酷であり心なき業だが、さりとて暗闇で触覚、臭覚だけを満足させるには余りに惜しいことである。ゲーテは演

奏者のみえぬ所で音楽を聴くのを理想としたそうだが、細かいリズミカルな動作や表情が目に映ってこそ、一層の興趣は湧くのである。寝室の灯を消せと言うのは、本当に眠る時だけである。目に刺戟の少ない薄明の光りの中にこそ、女体は神秘的な美しさを示すのだ。閨房にも照明は必要だ。できるならば間接照明、それに寝ながら点滅できるスイッチ。懐中電燈を寝床の中に持ち込む悪戯は、彼女がもっと夜の営みに馴れてからにするべきだろう。それにも少し閨房用懐中電燈としての情趣をもった工夫も欲しいことである。

絵像恋愛

着飾った女が自分の姿を街の飾り窓に映してみる気持は、どこかに変なところがないかと、見回すだけではない。自分が第三者となって、ガラスに映った自分の姿を嘆賞しているのだ。若い女の電車の中でやたらにコンパクトをだして鼻の頭をたたいているのも、化粧くずれを直すばかりでなく自惚れ鏡というべきである。

古代ギリシアの若い猟夫ナルシスは流れに写った己れの美青年振りに恍惚として我を忘れたという。ものに映っただけの自分の姿にさえ動かされる人間が、自分の描いた絵に、作った彫刻に、感じる執着が激しくなって、それに恋着することだってあり得ることだろう。

彫刻家ピグマリオンは、自分の作ったガラテアの像に夢中になって、これと婚したという話だ。百貨店のマネキン人形のどこやらが痴漢によって汚点（しみ）だらけにされたという話をよくきくが、ギリシアの昔話からとって、これをピグマリオニズム（偶像姦）という。ギリシア精神のあまり自慢にも

ならぬ流れであろう。

貞操帯

浮気者の良人のお道具に墨でしるしをつけて外へ出し、帰ってきたところで検べてみると、それが消えてる。さては外で女に逢ってきたなと、良人の頸筋にしがみついたと言う焼餅焼きの女房の話があるが、パリのクルニイの博物館で漫遊客を楽しませている有名な貞操帯は、十字軍に出征した騎士が妻君達に帯びさせ、その貞操を守らせたものだと伝えられている。

幾ら錠をかけたって合鍵と言うものがあるのだから無駄な話で、騎士が出征すると裏から錠前屋が合鍵をもって御用聞きにきたと言う漫画もある位であるが、どうも人間は独占欲が強いものらしい。

中央アジアのトルキスタンからでた壁画の苦行僧の図に、男のお道具に鑞をはめたものがあったが、これなぞは成程理屈に合うかも知れぬ。我国でもりんきの輪などと言って男のものに冠せたものがあったがどうもあんまり実用的ではなかったようだ。

温泉

新婚旅行は箱根、熱海など豆相温泉と相場が決っていて、温泉と夫婦生活は頗る縁が深い。医薬文化の発達しない時代には、鹿や熊が自然の本能で温泉を嗅ぎつけて浴湯し、疵などを癒したことから、人間も湯治療法を盛んに愛用して、「お医者でも草津の湯でも」とお医者並に温泉も重宝がれたものである。

近代科学は温泉を分析してアルカリ温泉は子宮カタル、塩泉は習慣性流産、皮膚病、炭酸を含む鉄鉱泉は子宮病、流産症、不妊症、遺精、腎虚、硫黄泉は花柳病、婦人病等に特効ありと証明してくれていて、特に温泉の女性に及ぼす効果は大きいものと思われている。

福島県の五色温泉（アルカリ性塩類泉）宮城県の神滝温泉(塩類泉)、同宮沢温泉（硫黄泉）などは古来、子持湯とか子授の湯として著名である。温泉に浴することが血液の循環をよくし身体を温めることは、誰でも経験あるところであるから、不妊症患者が、ちょっとしたそう言うキッカケで懐妊するようなこともあるのだろう。そのほか温泉の悠々たる環境からくる精神的慰楽も案外に効果があるのではあるまいか。

末摘花

今では大抵の人がこの名を知っていてフフンと意味深な笑いを洩すに違いない。「蛤は初手赤貝は夜中なり」の開巻第一の句から大概の句が世に知られるようになった。まことに泰平の瑞兆と申すべきだろう。さて、末摘花というのは紫式部の源氏物語中の巻名だが、川柳中の恋愛売色の破礼句を末番と言うことからきたもので、初代川柳が万句合中から色っぽいものを抜いて編し、初篇は安永五年、第四篇は享和元年と二十五年間に亙って全四巻、句数二三三一を集めているものである。

人間生活に最も関係深い性の機微を穿った短詩として世界独歩の存在なのであり、江戸の世相を如実に窺う好資料と言うべきであったが、戦前はおろか戦後にも禁制の書となっていた。それが校訂宜きを得た東都版刊本が昨年八月猥褻文書に非ずと言う判決を得て、公刊されるようになったのであるから、これはひょっとすると終戦後最大の我国の文化的業績になるのかも知れない。

臼と杵

餅を搗く臼と杵は男性と女性の象徴になっていた。東北地方では嫁入りの晩に餅をついて祝う風習があったが、これは新床の無事を祈り、その搗く音で差しい閨の物音を消すためだったと伝えられている。まん中の凹んだ臼と棒状の杵は両性器にも似ているので、これを以って陰陽の結合を表すことはいかにも土俗的な香いをもっている。インドにはアルバと言って両性器を結合した形を型式化した祭祀具があるが、これが丁度、我国の手廻しの臼に杵を立てたような形をしていて甚だ興味が深い。手廻しの臼と杵は麦をひいたり、茶をひくものがある。これは臼が下を向いて、下から杵がついて廻るのである。そこで正常態位の逆の型を茶臼と言うことにもなったのである。「茶臼とは美食の上の道具なり」などという句があって、この態位は、古今東西、正常位に次いで名高い。ネジに雄ネジ、雄ネジの名があるのも、男女の性的結合の状態から思いつかれたもので、はまる方が雄、はめる方が雌と言うことになっている。気がつかぬ中に性的な事柄が一般生活に入ってた一例であろう。

匂い

目や耳に比べて鼻の芸術は発達しなかったが、焚香とか香水というような嗜好品は、貴族的な閨房を中心にして、どこの国でも行われたものである。ギリシャ、ローマ、アラビアなどでは、浴後香油を皮膚に塗りこめたし、我国の王朝時代でも、既に匂い袋や、香によって移り香の趣きを愛した。今日では香水は女性必需品の一つになっているが、歴史の長い割合にその広汎な発展はみられない。

と言うのは、香料というものが人間の体臭を補強するような意味で生れたものだからでもあろう。と同時に犬や猫と違って、匂いによる個性の表現を主張するまでの必要が、人間にはなかったからでもある。けれど、匂いが閨房でひとつの雰囲気を作るために、媚薬的に用いられることは珍らしくなかった。麝香、白檀、薔薇香、竜涎香などがそれである。新しい夫婦生活の建設に、香水などで古い東方的な匂いの魔法を採り入れることも是非お薦めしてみたいことである。

神楽

神社の神楽殿で舞われるお神楽は、俳句の季題では丁度十一月になっている。お神楽は古代のパントマイム（黙劇）で、身振りからでている。天の岩戸のアメノウズメノミコトのストリップ・ダンスもこのお神楽の原始的な型で、古代人の考えることや表すことなんて、どうせ下掛ったことだった筈だ。だからもったいぶった大社のお神楽でない里神楽が、いろいろとチャリ的なエロ味を加えて演じるのも当然なことだろう。「異なとこへ当って笑う神楽堂」ちょいとした手先、指先きの暗示で、見物をドッと言わせる術をお神楽師はよく心得ていたものである。「神楽堂太鼓や笛で味をつけ」「遠くから抱きつくように神子舞い」などと言うのも大いにエロチックにみえてくる。

博多人形

この頃はどうか知らないけれども、多分お土産品として大いに外貨獲得の一役を背負っているのじゃないかと思わせるのが、あの土で作って色を塗った博多人形である。戦前に九州へでかけた人はよく博

多土産に、本当をいうと俗っぽくてゾッとしないがこれを買って帰ったものだ。この人形の中に店先で大びらには売れないような種類のものが随分あった。

美しい宮女や元禄美人の人形だが、逆さにして裏をひっくり返えしてみると、生々しい緋の腰巻が捲れていて、そこにパッカリとひどく挑発的に白い腿から奥の院までが作りつけられているというのだ。炬燵にあたった近松風の男女の人形も裏をみると、まことに悩しい姿をしていて、みたものをニヤリとさせる。普通のマッチのようだが、なかをあけるとそこにあられもないものがあるようなものもある。それで博多人形をみると、逆さにして裏をみたくなる癖がついたが、戦前にも非公式にはこれがどしどし売られていたのだから、日本だって捨てたものではない国だったのだろう。

艶笑詩

ヨオロッパの詩人には閨房生活を露骨に歌った詩人が少くない。大ゲーテにもそれがある。ボードレールは「悪の華」の中の数章の詩で筆禍をさえ受けているし、ヴェルレエヌにも有名な詩集がある。フランスの詩人達はそれぞれに象徴や比喩をもって幾多の艶笑詩を遺しているが、さて我国ではどうだろうか。

古いところには川柳がある。「末摘花」「柳の葉末」で示された江戸庶民の勁抜な詩性は、確かにフランス古典詩に比敵する内容をもっているといえよう。その他江戸の国学者の戯歌。漢学者の戯詩もたまには散見する。これも数えていいが、現代作家としては、まず堀口大学氏を推さざるを得まい。戦前に刊行された「ヴィナス生誕」これを改訂した戦後の「乳房」などは大いに我々が誇っていい艶詩集である。戦後は余り活躍していない小村基吉氏には「春宮美学」一冊の艶詩集があった。堀口氏の作品に及ぶべくもないが、こういう題材と取組む肉体派詩人もそろそろ現れてよさそうに思える。

顔見世

今日でも暮近くなると芝小屋に顔見世興行なんて看板があがる。昔は十月に役者の入れ替えがあって、十一月から新座組みで興行が始るので、新しい一座が舞台に並んで挨拶をしたから、こんな名がでたのである。

この頃は何となく京都の南座で顔見世興行を打つ習慣になっているようだが、娯楽の少なかった時代には年に一度の座組みの発表とあって、ミイちゃんハアちゃん連から大家の内儀、さては奥方までの血の道をゆすぶったものらしい。

「顔見世のやくそく女房けつをされ」と言うのは、顔見世見物を餌に、亭主の変り型所望なのであろう。

その頃の芝居見物は未明に起きて朝から夜までの通しであった。

紙

紙というものは何とも重宝な人生のお道具である。思いのたけを綿々と書きつらねて彼女へ送るのにも紙がいるし、彼女と寝たあとでも紙が役立つのである。

昔は脱脂綿なんてものがなかったから、ご婦人は毎月の病にも紙のお世話になった。「奥様のご病気羊ほど紙を喰い」なんてことだが、「まづいと紙鉄砲にしてさせる」なんぞといって、商売女が入口

を狭くするためのつめ紙なんぞにも利用された。

「みす紙は拭くの、小菊は遣るのなり」の小菊紙は祝儀用、みす紙は今日のキレー紙京花の類で閨房用紙だというのである。後者はまだ延べ紙などとも言ったが、下流の商売女は漉き返しと言って再生紙を使った。「漉き返し二枚で拭いて五十とり」である。

紙は音がするからとか、手にくっつくからなどと言って、この頃はハンケチやガーゼが悦ばれるようだが「溜め息一つ唇で紙をとり」「じっとしていなとぬき手で紙をとり」の情趣はまた格別ではないだろうか。

女神の脱衣

美の女神ヴィナスの像はギリシャ以来、今日まで美術上の重要な題目になっているが、ギリシャからローマへかけての所謂古典時代のヴィナス像を時代順に眺めていくと、着衣から脱衣へ、丁度ストリップ・ショウ的に趣味が動いていったことがよく判る。

ギリシア彫刻初期の古拙時代には、ヴィナスも着物をきて、左右均斉を保ち直立不動の姿勢をとって、いかにもいかめしいが、だんだんその姿勢を崩すとともに肌をみせてくる。

最盛期のミロのヴィナスあたりになると、上半身だけ着物を脱いで美しい乳房をみせたりして、いかにも美しさと神聖さを示しているが、それから少しおくれるとヴィナスは次第にポーズにも技巧的な艶めかしさをみせ、かがんでみせたり、わざわざお尻を自慢げにだしてみせたりする。永遠の女性から娼婦型への転落である。そしてメヂチのヴィナスのように全裸美人となり、全く神性を失うのであるが、これは何も彫刻に表れた姿の変遷ばかりでなく、女

の一生の縮図なのかも知れない。

布団

布団は嫁入り道具に必要なものだ。夫婦とは一緒に寝る関係なのだから、さもあるべきだが、布団が生活と切り離せないで発達したのは遊里であろう。島原の角屋の太夫などは揚屋から揚屋へ通うのに、布団から丹前など一式を、嫁入り道具並に持参したものである。

吉原の大店の太夫は、三枚襲ねの三つ布団を一尺ほど積んで寝たが、明治以来は敷布団二枚、掛布団二枚で、上下とも五つ布で作った五六寸の厚みがあり、ダヴル・ベット用としても充分の大きさをもっていた。大正まえは緋子色の緞地だったが、以後は友禅になり、下級の家では銘仙も用いたようだ。

布団は本来遊女の持物でお職とか二枚目、三枚目の太夫は、紋日に客からこれを贈られるので、これを積み夜具と言って、見世に飾って威勢を示したものである。夜具が大きいから上げ下しにも、床番という男衆がいて、本部屋の夜具棚に納めるばかりでなく、夜具部屋に運んだり、物干しに乾したりしたものである。

間男

間男というものは粋なもので、女房を寝取られた亭主の方はいささか頓間で滑稽味が多い。バルザックの「風流滑稽譚」でも、古典の「風流新百物語」でも寝とられ亭主——コキュウがその題材の主要人物になっているのは面白い。「町内で知らぬは亭主ばかりなり」の川柳でも、「死なぬ中から女房は人のもの」などと盛んに揶揄されているが、ここでは粋な筈の間男も好い加減茶化されている。

「旅の留守内へもごまの蝿がつき」で女房と宜敷くやっている処へ亭主が戻ってきて「間男を麦藁笛（田舎土産の）で喰らわせる」などから、「間男と亭主抜身（刀の）と抜身（脱褌）なり」という大立廻りになり、とどのつまりが仲裁に大屋がでてきて「二人（間男と女房）とも帯をしやれと大屋言い」ということになり「生けて置く奴ではないと五両とり」となるのである。江戸時代には間男をした詫び金が、金五両と言う相場が立っていた。天下泰平・貞操感も喧しくなかった庶民的な滑稽譚時代である。

娼婦の一生

イギリス人は道徳的な常識家だというが、ワイルドのような悪魔派の作家もいれば、ビアズレみたいに春画まがいの絵を描いた画家もいる。先日発禁を伝えられた「ファニィヒルの思い出」別名「ある娼婦の一生」などは屈指の艶文学で、堅苦しいばかりがイギリス気質でもないらしい。

ファニィヒルのファニィは滑稽なとか奇妙なという意味、ヒルは丘陵である。だから当世語なら肉体の丘とでも訳すべき隠語の一種だ。著者ジョン・クレランドは軍人の伜で、外交官として東印度に駐在したが、そこで失敗して、金に詰っているとこへ、渡り舟に赤本屋が彼を唆かしてこのエロ物を書かせたのだ。

勿論お定りの筆禍で裁判になったが、その判決が捌けたもので、官吏上りの癖にこんな猥文を書くのも貧乏のせいだとあって、以後年金百ポンドが支給されたという。この分でゆくと報道班員で活躍した我が肉体派作家諸公なども、十分年金に値する業績をもってるのじゃあるまいか。クレランドは、八十二歳で今から百六十年ほど前に天寿を全うした。

厠（かわや）

我国では便所を家屋の中であまり優遇しない。日当りの悪い北の方に押しこめる。地方の農家では全然外にだしてしまうこともある。ご不浄なのだから主家と離れている方が、臭気もなくてさっぱりしているようだが、これが日常生活に不離な必要機関であってみれば、これを利用するのに不便だったり、不自由さが纏いつくのでは困るだろう。

寧ろ便所は家屋の中心になる寝室のすぐ傍にあるべきもので、これは寝室をただ寝るための場所とのみ考えて、夫婦の夜の別天地だと思えなかった人達には理解できないことだろうが、新らしく家を建てるような方は、是非一考すべきことだと思う。

何も大げさな装置はいらない。水洗式を利用できれば、寝室の一隅へでも設けることが可能だ。夜の嘗みを清潔に愉しくするためには、手洗い程度の簡単な用を弁ずる方法が採れればたりる。洗滌とか跡始末が室内でことがすんだら、どんなに日本人の性生活が愉快に明るくなることだろう。

熱海温泉

熱海を性愛名所の一に数えることは異論もでてくることかも知れないが、文学的には「金色夜叉」の貫一がお宮を足蹴りにして「今月今夜のこの月を」と名台詞を吐かせ、それに因んで尾崎紅葉山人の碑まで立っているのだから文句はあるまい。観音教の本山があるのは特別に自慢にはならないが、「当世書生気質」の作者坪内逍遙先生が、根津の遊女だった夫人と仲睦まじくここの丘の上の双柿舎に晩年を送られたことだって土地の自慢にはなることだし、文人遺蹟と言えるだろう。

だがそれはそれとして、錦浦の崖の上に立って胸の煙りは絶えやせぬの大島を眺め、土地の女が恋にこがれては泳いで通ったと言う初島を望み、ついふらふらと太平洋の藻屑の間を永遠の愛の巣にしたいと憧憬れる心中者の多いこと、これは土地としては有難迷惑かも知れないが、その代りに新婚旅行の蜜月組がワンサと押しかけて、生めよ殖やせよのお祭りが連日連夜つづいていると言うから、特別に縁起を担ぐ必要はない。心中と新婚の悲喜脊中合せのこの町は充分に名所の資格をもっている。

炬燵

「瓜田より炬燵の足の疑わし」という古川柳がある。李下に冠を正さず、瓜田に靴を入れずという古語をもじった句であるが、炬燵という冬の添景品はまことに艶っぽいもので、歌舞伎の濡れ場でもちよいちよいと利用されている。

布団の下で手を握りあっているなんてのは、初歩的な段階で、達者な江戸の若者は足にもの言わせたこともあったようだ。

「鶴に蔦炬燵の上の二三冊」とは、雪に降りこまれた女の座敷に、蔦屋版、鶴屋版の絵本がおいてあると言う風景で、女がお妾、絵本が笑い本になるといよいよ情景は悩しくなる。

江戸では旧の十月の最初の亥の日を炉開きと言って炬燵を入れ、亥の子餅というのを作って祝ったものである。

「亥の日から女房さえざえしく暮し」「ぼた餅を喰わせた上に女房され」などという句もある。ストーヴやスチームにみられない濃やかなエロチシズムであろう。

毛の化粧

「十六の春から稗を蒔いたよう」と言う川柳がある。江戸時代には「十六で娘は道具揃いなり」と言って、十六で臍下三寸に発毛するということになっていた。つまり新制中学の三年生が標準である。

「女房の毛は十六で生えたまま」と言うのは前回毛切石でのべたように、毛切れを嫌って、多毛症の女が除毛するのだが、それらはどちらかと言うと商売女が多く、堅気の女房は「ぬくことはいやさと女房かきわける」でどうも除毛を嫌がったようだ。「女房にちっとぬきやれと二へん撫で」なんぞという句もある。

ストリップ・ダンサーなどは商売柄、除毛をしているものもあるようだが、一般の妻君も一つには多毛は下品にみえるところもあるから、お化粧として、一つには毛切れなんてこともあるから、衛生的見地から問引いたらどんなものだろうか。除毛剤でつるつるになっても困るが、お線香で焼くなぞは簡単なことなのだから。

立川流

印度から東に伝った仏教の一系統に、蒙古で栄え、今日でも盛んな崇拝を得ている喇嘛教というものがあることは知っている方も多いだろう。奉天の法輪寺、北京の雍和宮はその有名な霊場で、巨大な鬼面の男神が女神を擁している像を祀っているので名が高い。

これは聖天様の歓喜天と同じ印度教のガナヴァチからきたものだろうが、我が平安末期に真言宗の一派から立川流という肉欲を肯定して即身成仏を称えた新宗が興ったことは面白い。本尊は千人の髑髏を

あつめて漆で塗り固め、これに男女の性交時の愛液を百二度塗ったものだというから、何ともどぎつい細工である。

男女の交りが、神聖な神への奉仕となるというのだから有難い宗教だ。精神的不安の多かった時代の産物らしく、今どきの新宗教も踊ったり歌ったりするばかりでなく、ここまで徹底したらどんなものであろうか。立川流は二百五十年ほどで壊滅してしまったと言うことであるが。

春画

古今東西、人間の棲むところ、この種の美術は必らずあったものらしい。ただものがものなので偽善者共に焼き棄てられたりして、その全部が遺っていないばかりなので、西洋は希臘の昔からあったし東洋では漢代からの記録がある。我国が春画国として知られているのは浮世絵のお蔭だが、それ以前の絵巻物も相当に模本などで伝えられていて、これは浮世絵に始ったことではない。我国の春画で男性器が頗る誇張されて描かれていることは、外国人に非常に注目されて、それが現実の日本男子の性的特質かのように思われたこともあるらしい。併し、残念乍らあれは絵空事なのである。江戸時代の本をみると春画に尻の穴を描かないのは西川祐信以来だと言っている。それ以前は描かないものかも知れぬが、これも一つの美化のための絵空事になる訳だ。男女二人、足が四本に手が四本、都合八本の手足を描いたものも頗る稀だといわれている。これも奇特な方のご研究を煩わしたいことである。

裸のマヤ

ゴヤの描いた二枚の「マヤ」の図は誰も知る古今の名画だ一方は着衣、一方は裸体で、ほとんど同じ構図で、アルバ公爵夫人を描いたものだ。まさか公爵が自分の奥方の素裸で長々と寝そべっている絵を註文もしまいから、裸の方は、ゴヤが内緒で描いたのかも知れぬ。ドン・ファンやドン・キホーテを生んだスペインの話だから、常識では判断がつかないが、とにかく思い切った絵である。

三十年ほど前にオランダ生れのパリの画家ヴァン・ドンゲンが踊り子ギイの裸で立っている像を描いて、モデルから文句をつけられたことがある。ちゃんとあるべきところにあるものまでを描き加えてあるので、怒る方が尤もかも知れない。幸いにこの絵は我国へも将来されたことがあるが、なるほど、いくら踊り子でもこう正面切らされてはテレるだろう。

美術ブームを迎えて、文学ばかりでなく、美術界でもモデル問題でもアプレ・ゲールらしく始らないものだろうか。

レスビアン

ギリシャの多島海にレスボス島と言う島がある。女詩人サッフォがここに立てこもって男を拒け、女ばかりの学園を開いたと言うのである。彼女は後に海に身を投じたような情熱家である。ポムペイ壁画に残るサッフォの像という画をみると、目の澄んだ細面の麗人であるが、女ばかりの島故に女だけの愛の作法を唱導したと言うことになっている。それでレスボス島風の愛と言えば女同志の同性愛者だったと言われる女詩人がレスビアン・ラヴの提唱者であることは一向に不思議はなかろう。それでは女同志の恋愛はどうしたらよいのか。後世吸淫のことをザッフオイズムと呼んで彼女の名を記念している。

中国の磨鏡や我国の張形の互形とは違って、もっ

と切実なものがそこにはある。恐らく異性同志のフエラチオ吸茎やカニンリングス吸陰からきた六九（ソアサント・ヌウフ、シックスティ・ナイン）のような体位が真面目だったのだろう。

歳の市

浅草の歳の市は江戸時代の大きな行事の一つだった。正月飾りの縁起物を売りだすのだが、その中で特に目立ったのは、これを飾っておくと金が貯ったり、運が向くという古代のファルロス信仰の名残りの品であった。つい最近まで芸妓屋や待合では、これを祀っていたところが少くない。

その売場にうず高くこれを積んで、売っていたのである。大きな奴を買った連中はワッショイ、ワッショイと人の群をかき分けて通る。即ち「弓削の道鏡参内と市の客」が酒落る所以で、若い娘なんか傍へも寄りつけない。

ところが、裾つ張りの女は男装してわざわざ群衆にもまれに出かけたとみえる。「年の市男に化してねれるなり」である。一方で若い衆は何となく気が浮々して「当年中のし納めと市にそれ」で、浅草から更に北をめざして吉原の不夜城へ脱出を企てたものらしい。

義士祭

師走の十四日は赤穂義士の吉良邸討入りの記念日だ。封建思想の追放で、忠臣蔵の人気も大分下火になったが、再軍備とやらで、また逆コースの復古気分が湧いてきた。昔は香花の絶えたことのないという泉岳寺の景気も、ここらでまた復活することだろう。

義士の棟梁大石蔵之助は、祇園で折花攀柳の豪の者「夜討なら祇園で覚えのある男」という訳だが。

忠臣蔵も武士道皷吹の反面エロ気分横溢の場面がある。内蔵之助とお軽の場面だとか、主税と小浪なんぞの場面は、春本作家の好テーマで、江戸時代から穴手本吸心大荃なんてものが随分あった。

「鞭声粛々夜河を渡って鳩の街」戦後版の夜討はずっと川上の方で繁昌していたらしい。

喃語

「死にますの声に末期の水をのみ」という川柳は媚薬に関係ある句であるが、オルガスムスの高頂期に「死」の観念が生ずるのは、世界各国人間共通の心理であるらしい。フランスでは、あのことを「小さき死」と呼ぶそうであるし、あちらの春情文学をみると、「アイ・アム・ダイイング」とか「ジュ・ムリイル」とか「イッヒ・シュテルベン」なんて怪しげな言葉にぶつかる。歓楽極って哀傷多しという訳か。人間は死んで花実が咲くものかという訳なのだが、いざ感激の絶頂に立つと、案外に死を願うものなのだ。死ぬほど惚れたというのは惚れるということが積極的な行為であり、死ぬという否定的で消極的なことを形容詞としている点で、何とも矛盾したことなのだが、それが一向に可笑しく思えないのも同じ理屈なのだろう。そしてこの死ぬという言葉は相手にとっては「我が為めに死ぬ」という意志の表白となって一層に煽情味を加えるものなのである。

ストリップ

女ならでは夜の明けぬ国の歴史的伝説の冒頭に、天照大神の岩戸隠れでアメノウズメノミコトが素っ裸になってホト（陰所）までだして踊り、神慮を和らげたと言うのは、何とも嬉しいことである、がそういうことからストリップ・ショオの起源は甚だ遠

く、ただ猥褻、風壊なんぞと安っぽく取扱っては申訳ない。福島県のある地方には、婚礼の夜、土地の娘達が揃って裸になって踊る風習があったそうだが、ショオ化したものには、大名が侍女達に薄いカタビラを着せて角力をとらせたり、裸で池に入って鯉つかみをやらせたり、雪合戦をやらせたものもあり、ヨオロッパでも貴族達が領内の美女を、裸にして栗や桜ん坊を跼んで拾わせ、池中で泳いだり、魚をとらせたことがある。

つい最近まで花柳界では雛妓などが、「浅い川なら膝までまくれ、深くなるほど帯を解く」と歌い乍ら前を捲ったり、拳を打ってキモノを一枚づつ脱ぐチョンキナ踊りと言うのもあって、ストリップはいつの世にもあったのだ。ただそれが民衆化されたのが今日のストリップなのである。

褌

西洋ではズロースは女子の専用具で、男子は特別な腰の下着を用いず、いきなりYシャツの裾でくるくる巻いてヅボンの中に押しこんでしまう。日本人は猿又をはいたり褌を用いて、女性の方は大正末期までは腰巻のみでズロースなどを用いなかった。

褌は犢鼻褌と言って古代からあったようだ。今でも男の子が十五歳乃至十三歳に達すると〃たふさぎ〃祝いとかヘコ祝い、褌祝いと言って元服的な祝いをする地方が各地にある。

褌にはいろいろな種類があるが、六尺褌は堅くしめつけるので、猿又やヅロースと違って、男性器の形を幾分外に表わさざるを得ない。これは男子用海水着でも同じだが、余り感心した格好とはいえなかろう。ところが、中世の西洋ではヅボンと靴下が一

緒になって脚衣というものが生れた。腰から脚までぴったりと肌に密着したようなものだけに、股間の一物がまるまるとその形を外に表すのである。そこでわざわざバンゲットと言って睾丸を包む袋をつけたのである。この姿は今でも絵画に残っているがまことに珍奇なエログロ異風俗であった。

ロマンス・シート

この頃は映画館にアヴェックの二人専用の座席があるそうだ。適当の高さの衝立でもあって左右と後を囲ってでもいるのだろうか。映画の甘いラヴシーンを眺め乍ら、抱き合ったり、キッスをしているのも悪くはないでしょうが、お互いがスクリインの美男美女の模造品として気分をだしているだと考えると、余り利巧な風景でもなさそうです。

ギャルソンヌと言う男性名詞を女性にあてはめ、男らしい女という意味の言葉を発明したフランスの作家マルグリットの小説に、芝居をみ乍ら男が女に戯れるところがあったが、美人と同座し乍ら、愛戯に耽ることは、それが公衆的な場所だけに、却って公園のベンチとか、人のいない海浜より感じのでるものらしい。

「くぢるほかいい智慧のでぬ切落し」とは江戸の劇場の大衆席での場面で、「切落し二寸長いとする所」という句もある「弁当をその手で貰う切落し」ロマンス・シートなんて気のきいたものではないが、東西古今を通じての観劇に伴った好色的な情景なんである。

X マス

今から一九六〇年前のこの日、ベッレヘムの貧しい馬小屋の中でイエス・キリストが生れたのを祝福

してのお祭りだ。二十四日はクリスマス・イヴとしてその前夜祭、Xマス・ツリーを巡って大人も子供も大はしゃぎに踊り抜く欧米の風が、いつのまにか我国に入って、クリスチャンであるなしに拘らず、いいご機嫌で酔っ払ったり、踊るのである。忘年会にクリスマスと歳末の節季に行われる行事が、不礼講の乱痴気騒ぎになるのは、何とも自然なことなのだろうが、「忘年会娘これからぐれはじめ」ということになったり、「クリスマス十月にわたるプレゼント」なんてのはいささか行き過ぎだろう。

サンタクロースよりお土産をくれる彼氏の方が、今日の彼女達にはずっとロマンチックに思えるに違いないのだ。

聖書

さすがは宇宙の書である。人間生活のすべてがこれに写しだされていると言ってよい。アダムとイヴが禁断の果実を喰べて以来の人間の愚ろかしさ、淫りがましさも遺憾なく描かれているのだから、長い夜の徒然に、炬燵なりストーヴにあたって、特に旧約聖書を夫妻して繙かれることも決して意味なきことではあるまい。ロトがその二人の娘といかにして父娘相姦を敢えてしたか。オナニズム（自慰）の語源になったオナンはなぜ兄嫁と寝て、地に洩らしたか。美男の下僕ヨセフを口説いて我と寝よと挑んだ有閑マダム・ポチファウルの妻の物語。谷崎潤一郎氏の「痴人の愛」の女主人公に名を籍したナオミの性情。入浴中の美女スザンナの裸体を覗きにでかける博士達の好色振り。ソロモンの雅歌の男女の肉体讃美など、ゆっくり味読すれば決して、「チャタレー夫人」や「四畳半」に目の色を変えて騒ぐ必要はない。この珍書の存在はともかく有難いことだ

ったのである。

寝巻

商売女は商売道具だから、長襦袢やパジャマにも気を使うが、一般家庭では着古しの衣類で間にあわせたりして寝巻を粗末でいいと考えたがる。どうせ他人の目に触れるのではないが、ぼろを纏ったり、寝化粧を忘れるような心掛けならご亭主に捨てられても余り文句の言えるお人柄ではなさそうだ。

紅燃ゆる長襦袢から白い脛がこぼれでたり、白いガウンを捲くれば忽ち一糸纏わざるヴィナスの誕生、パジャマのボタンをはずす瞬間のエロチシズムなど、桃色気分を唆る従来の寝衣というものも、非常に結構なものだが、それらはどうも気分本位で、簡便とか保温とか言う実利的な面は案外閑却されていた。

そこでひとつ、チャックかなんかでスルスルッと引くと、忽ちストリップのむき玉子、ご用がすんだらまたスルスルッとナイナイしてしまえるような取扱いに便利で、お色気もある夫婦用交合服を工案してくれる方はないものでしょおかね。

煤払い

十二月十三日は煤払いである。新年を迎えるにあたって、一年中の塵埃を片づけて清々しくしょうという昔の大掃除なんである。一般の町家はもとより江戸大奥でもこれが行われた。御殿女中のいる長局も朝から大騒ぎで、

「十三日へのこをかくす賑やかさ」である。つまり奥女中が自慰に使う牛角製の張形の小箱を蔭したり、発見けたりする騒ぎである。

この日は不礼講だと言うので、夕方になると、女

達がご家老を胴上げにしたり、青侍が女中の裾を捲くつたりということもあったらしい。「御嘉例だくちれくぢれと十三日」「かわらけだアハハアハハと十三日」

万事儀式張った封建的な世界にも、年に一度はこんなバッカーナルみたいなこともあったのだ。人間は年中とりすましてばかりはいられないもの、夫婦生活も夜だけは解放された二人だけの放恣さで送るべきだろう。年に一度でなく、この方は日に一度のお祭りとして。

餅つき

餅搗きは迎春の用意に戸毎に昔はやったものだ。深更に遠くでその音をきいていると、いかにも年の迫った詩情を感じるものだが、臼と杵で搗くこの行為はちょっとした好色味が伴うものである。長唄に、「餅搗き唄」という、全篇コイトスを歌った禁断の歌詞があったが、京の島原の餅搗唄からとったものだと云うことだ。十二月を詠みこんだものである。

昔から祝事には餅を搗いて祝うのが我国の習慣で婚礼の晩に餅をつくところが多い。これは縁起物としての餅ではあるが、福島県には餅搗杵を新婚者の初夜の枕にしたり、床入りになると餅をつく風習もあったようだ。

「練れたか、搗けたか、搗けたか練れたか」と歌い乍らはやすのである。これは初夜の床入りを賑やかな雑音で、新婚者の羞恥心を消してやるという思いやりのようである。

ダンス

ダンスは明らかに人間の性行為の前戯的意味を今でも露骨に持っている。さかりの時期に雄鳥が嘴

り、牡孔雀が羽を拡げ、雄馬が嘶くと同じような生理性を、リズムをもった運動感覚を通して人間的に表現しているだけである。勿論、今では性交前の前戯としてのみは踊られてはいないであろうが、古代人は雄は雌を誘うために踊り、雌もそれに応じて踊ったに違いない。

二つの肉躰が同じリズムに併せて動くことは、生理的な快感から、やがて人間特有の精神的共感にまで及ぶことに不思議はない。と同時に人間はダンスをすることで擬似性交的な満足を得て、性欲を発散させる術も心得ているようだ。独身者はこれによって性の抑圧からくる不快さを払拭し、夫婦者はお互いにダンスをすることで、性交への気持の漸進的高揚を遂げることもできる。勿論これは功徳の方で弊害もあり得る。だが、そう云う点で、曽って来朝したドイツの新興舞踏家クロイッベルグがルース・ページと歌舞伎座で踊った「回帰線」と云った性交を様式化してみたような舞踊で示した性行為の昇華された美しい表現を回想したくなるのである。

離魚寝

大晦夜の晩には洛北大原の大原神社の社殿で雑魚寝の風習があった。老若男女がここに参籠して、知る知らぬにかかわらず一夜の契りを神の御名によって許されて行うのである。これは古代の乱婚的遺習を伝えたものだと言うが、なかなか楽しき行事だったらしい。

西鶴の「好色一代男」に小説家の空想をまじえてこと面白く書き立てられている。「大原物語」と言うのによると、京の女が若狭の国の男に嫁いだが、男との仲悪しく逃げだして、この大原の里にきたが、遂に和田橋の下流で身を投げて死んだ。その女

の怨霊がたたって害をなすので、彼女の霊を慰めるために村内の男女が神社に集り、慰霊コイトス大会を開催したと言うのが、この雑魚寝の縁起だと言っている。皇居前アベック広場でも雑魚寝大会を開いてみたらどんなものだろう。

艶笑お国自慢

林檎を噛ったアダムとイブ

（青森）　津軽乙女の唇

「紅い林檎に唇寄せて」と歌にあるが、津軽乙女の赤い頬の美しさは荒井君の大いに唱導するところだった。手拭で包んだ顔の中から黒い瞳がパッチリ窺いて、隆い鼻の辺りに若々しいエロティシズムが踊っている。

「僕は君の噛りかけたその林檎が欲しいんだよ」「やだあ」「いいじゃないか、その歯の痕のついた奴をお呉れよ」午後の林檎畑の明るい外光の下で二人は立ったまま唇を交わした。

「番小屋へ行こうよ」ああ、そこには囲炉裏があった。暖かい〃むしろ〃もあった。八甲田颪しもここまではついてこない。二人だけの世界がある。

「こんなことになって、私、もしどうかなったらどうしましょう」黒い瞳の少女は不安げに荒井君に囁いた。「林檎を食べて悪いなんて、これは人間の運命さ、さあ、僕らはすっかり着物を脱いだアダムとイヴの昔に帰ろうよ。後は神様が筋書通りにちゃんとはかって下さるだろうから！」

生娘にとんだ嫁入り土産

（岩手）　小岩井の種つけ

実習で牧場にきていた青木君は、種馬場で種つけを見学して、すっかり昂奮してしまった。人間社会から縁を切って、馬や牛と暮してゆくつもりでも、二十三歳の若さがどうしても云うことをきかないのだろう。

老いた牧夫の弥吉爺さんの孫娘がここではたった一人の女っ気である。この十七の娘がやはり今日の種つけを垣間みていたことを知っていた青木君は、

晩飯を終ると、そっと爺さんの小屋へ忍んでいった。「おしのちゃん」「誰？」「ちょっと」「あ、青木さん、お爺さんいないわ」湯上りの娘の生暖かい肉の香が、ムンムンと青木君の鼻を衝いた。

「私、来月、向う山の健次のところにお嫁にゆくのよ、でもいいお土産ができたわ、東京の大学さ行ってる青木さんの種、おろして貰っただものな、きっといい子ができるだよ」全身の快よいしびれにうっとりとしていた耳に、おしのがそう囁いたのを、青木君はききちがいじゃないかと思わず身を起してしまったと云うことである。

猿田彦命の桃色遊戯

（岩手）　巻堀新社の金精様

陸中巻堀神社の金精様は猿田彦命の孫とやらで、すこぶる手が早い。村の娘が十三四になると、夜中でかけていって、水揚げをなさると云う達者さで、昔はご神体の金精様を鎖りで結わえておいたこともあったそうだ。

寒い冬の農閑期はこの辺ではまことに所在ない。それでついつい炬燵の廻りで桃色の行事が始る。まあ、それもたゞの悪戯ですんでいるうちはよいが、娘が嫁入り前だと云うのに、ポテレン腹にでもなると、話がこみ入ってくる。

廿歳を頭に十八、十六の三人娘が同じ時季に揃いも揃って、生理的腫物をでかしたには、流石の親父殿も魂消たのである。が、その娘達の云い草が振るっている。「確かに金精神様に違えねえだ」と三人とも云い張るのである。

「幾ら金精様でも、そうも身体が続きなさるまい」と親父が云えば、娘達「なあに濁酒の臭いがしてたから、三人位は大丈夫、続きなさのじゃろう」

雪をも溶かす愛慾の情火

（秋田）　雪のカマクラ

雪国の秋田では雪を堀った穴を作り、カマクラと称して、その中で子供達が遊ぶ習慣がある。中でちょっとやそっと火を焚いた位では天井が落ちるような心配はないし、莫座を敷いて坐っていると、案外に暖いのである。

こんな結構な設備があると感心したのは東京からスキーに遊びに行った沢田君である。友人の大塚君の妹で新制高校の三年生という愛子ちゃんを映画見物の途中から誘いだして、この絶好の逢引場所へつれて行ったのである。

外套をとりもんぺを脱いでというのだから手がかかるが、それだけの楽しみもある。裸になれば雪よりも白い秋田乙女の柔肌には、燃えるような情熱があった。

「明日の晩もまたここで」「いいわ」二人が最後の接吻に身も心も恍惚としていた時、厚いカマクラの壁がミシリといって割れかけたのである。「あー」、すわカマクラと沢田君は愛子ちゃんを抱えて外に飛びだしたのだが、「おお、僕達の情熱に雪も溶けたんですよ、明日はまたお隣りのカマクラで」

間男とは死なせない話

（山形）　天童の駒造り

天童の町には将棋の駒造りが多い。その一軒に滅法美人の若女房がいた。今君は旅の行きづれにここを訪ねて、その女房に大いに食指を動かし、機を覗ったが、ご亭主が家で仕事をしているのだから、なかなか旨いチャンスがない。ところが幸いに一日寄り合いで亭主が家を空けたときいて、早速とんでいって女房を口説いた。女房は、始めこそはウンと云わなかったが、今君の押しと根気にとうとう無言のうちに陥落してしまったのである。

ところが寄り合いで忘れ物に思いついたご亭主が途中で我が家へ帰ってきたのだから、悲劇になった。奥の部屋のただならぬ気配に、そっと覗いた亭主は、仕事場にとって返えし、商売用の大鉈を持ち出して、いきなり、寝ている今君の頭にガッと一撃を喰わしたから堪らない。ウームといってノビちまった。返す鉈をふり冠った亭主、女房の頭の上でフイと動きを止めてしまった。「どうして私を殺さないんです、殺して下さい」と女房は今は覚悟して叫ぶと「馬鹿め、あの世にまで一緒に行って俺に恥をかかせるってのか、太いあまめ、ここで殺してなるものか！」

新婚初夜に幽霊も顔負け

（宮城）　松島の明かずの間

新婚旅行に宿屋の打合せもせずに、漂然とでかける処が矢野君の面目だった。遅くなって松島に着いた彼らご両人は、案の定、ホテルが満員だと断わられたのである。それを何とか拝み倒して泊りこんだ部屋が、これはまた意外なことに、畳の香も新しい十畳間。「何だ満員だなんて、馬鹿にしていやがる！」と矢野君は、それでもお喜びで、新妻ともども湯に入り、軽く一杯やって、いよいよ新婚初夜の祭典を華々しく挙げることになった。婚約十ケ月、機は熟していたので、当夜の盛観は筆舌に絶し、暁まで続いたのである。「昨夜は、よくおよれましたか」翌朝食堂にでるとボーイが妙なことを訊ねる。新婚者とみてからかう心算だなと、矢野君は「う

ん、よく眠れたよ」と済して答えたのだが、その実、まんじりともせず、夜を明かしたのであるから頗る眠い。ボーイはけゞんな顔をして引き下った。

彼らの泊った部屋こそ、幽霊のでるという、かって心中のあった明かずの間だったのである。だが、幽霊も眠らないで張り切っている人間の前ではテレて出られなかったのだろう。

愛玩のこけし指輪を壊す話

（福島）　飯坂温泉夜話

良人の帰った後も、杉浦夫人は暫くこの飯坂に滞在することになった。東京への出張の帰えりに、また寄って貰って、一緒にここを引き揚げようという予定である。

嫂達から離れて、二人切りの久し振りの温泉での生活は、中年の夫婦者をすっかり若がえった気分にさせたらしい。良人が発った後、夫人はどうも夜になると何か物足らない思いに陥り勝ちだった。

滅多にみられなかった良人の激しい抱擁、考えただけでも頭がカーッとするような三日間だった。それに日を繰ると、一週間後の良人の帰える頃は、ひょっとすると、あれが始るのではないかという焦りもあった。それで、何気なく土産物の六寸ばかりのこけしを、握りしめるようなことになってしまったのである。こんなことは女学校以来のことである。

良人は約束通り一週間目に迎えにきた。そして彼女は幸いにまだあれにはならないでいた。その夜の彼女はのたうち廻って歓喜した。その物音のはずみに床の間に置いた例のコケシが、ガタリと音がして転って、傍においた杉浦夫人の大陸土産で大事にしていた翡翠の指輪を、破ってしまったということである。こけしの嫉妬なのであろう。

子のない嘆きも解消する

（福島）　東北子授けの湯

結婚後十年経っても、子供のないことは神田君夫婦の嘆きだった。ある人の話で五色温泉は子授けの湯で、あれに入ると不妊症の女でも子宝が得られると云うことである。それで神田君は妻君にすゝめられて、秋の連休に二人揃ってでかけたものである。

温泉は別に変ったこともなかったが、これで子供ができれば有難いと、神田君は妻君を励して、鋭意子授かりの術を励んだのである。休暇が終ると、彼は妻君にもっとこゝにいて、霊験を受けるようにといって、自分だけ一足先きに東京へ帰った。

それから一週間、妻君は山の中のこの温泉宿でせっせと湯に入っていたが、二日の激しい労働の癖がついて、夜になると、何となく物足らぬ思いをしていたものである。そこへひょっこり現れたのが、商人風の若い男で「奥さん、お退屈でしょう」から始ってとうとう、ひょんなことになってしまった。それが帰るまで三日ほど、づるづるにつゞいたのだから、妻君は神田君の前に出るのが辛かった。ところが、それから一ケ月目に、妻君はみるべきものをみなくなったのだ。「あゝ」、神田君は膝を叩いて躍り上った。そして逢う人毎に、五色温泉の効能を説いたというのである。

袖すり合うも多少の縁

（茨城）　筑波の今様耀会

加藤君は友人の中村君と筑波山にハイキングをした。若い二人にとって、こんな低山は公園を歩いているみたいな気易さがあって、持参したウイスキーを出して、日一杯を雑木林の中で寝転んで過し、暗

くなってから山を下り始めた。

途中までくると、闇の中に白いピケ帽が二つ塊ってじっと動かずにいるのがみえた。今頃女の癖に何をしているのだろう、「ヤッホー」と声をかけると、何と云っているのか判らない歓声がきこえた。「助ったわ、まっ暗で足許がみえなくて降りられないんです、私達どうしょうかと困ってたんですわ」女達はそういって加藤君達にしがみついてきた。

「まだ悠っくり、最終の汽車にのれますよ、一緒にゆきましょう」中村君は女達にそう云って、残ったウイスキーを薦めた。それから二人は一人宛の女と肩を組んで歩きだしたのだが、歩きながらどちらの組も、リュックを背負っただけで空いている手を巧妙に活躍させたらしい。どこの誰とも訊ねない中に、一組づつ道傍の草の中に、しばらく姿を消したものである。処は筑波山である。今でも男女二峰をもつ、筑波山には嬬会の風があるのかも知れない。

沢庵石が法悦の地震除け

（茨城）　鹿島神宮の要石

地震、雷、火事、親爺と日本は地震国だけに一番怖いものは、地震ということになっていた。常州鹿島郡鹿島神宮の本社から、東南一丁ほどの処に、要石という石が祀ってある。これは、地中の大鯰の頭と首を釘付けにして、地震を防いでいるのだという。その石は、つまり釘の頭がでているつもりなのだろうが、どうやら女陰めいてもみられる。

雷が臍をねらったり、火事除けには女の腰巻や春画がいいし、親爺は女房で一コロなんだから、地震が要石で押えられているのも理屈になる。近頃は地震が多いが、多分、世間並に要石の方も貞操観念が揺ぎだしたのかも知れない。「おいよ、あれが大鯰のように身を躍らして逃げたが、女房の方はそのままそこに倒れて身動きもしなかった。

「こりや、一体どうしたってこっつら」とご亭主は女房のはだけた衣物を直し、身体や脚をさすって途方にくれていた。しかし、そうやって撫ぜている中に女房は「うーん」と呻って息を吹きかえしたように、少しずつ眼を開いてみせたものである。

「いったい、こりやアどうしたってこっつら」ご亭主は同じような溜息をついて、「しっかりしろ、どうしたってこっつら、もう俺がいるぜ心配せんでええ、さあ、どうすりゃええんだ、何でも望み通りにしてやるずら、安心して何でも俺に云いつけろや」

亭主がそう云い終ると、女房は大きく目をひらき、「んなら、お前様、なんにもみねえと云ってくんろ」

を押えている石だとよ」「ほんとに、石ででも押えておかなくちゃア浮気が止まないんだろうね」「なあにありゃあ迷信さ、スタール博士も書いている」「鰯の頭も信心から、私はいいこと思いついたよ」家へ帰ると女房沢庵石をもちだして、注縄を張って台所に祀った。「何だいこれは」「家の要石さ」「馬鹿な、お前の尻が重いだけで結構だ」「そうじゃないよ、子供も大きくなったし、家の造作がガタピシャだから、ほれ、あの時のまじないさ」

見ていてもみないつもり

（埼玉）　お人良しの亭主

秩父の山の中のある平和な村での事である。薪とりに裏山に上ったお人良しの男が、隣家の炭焼小屋の前で、自分の女房とその隣家の男がよろしくやっているところをみてしまったのだ。相手の男は飛鳥

海女に憧れ砂を喰わされる

（千葉）　女護ケ島奇譚

「何しろあすこは凄いよ、男はみんな遠洋漁業にて留守で、女房や娘が裸で海に潜るって処だからな、身体が、張り切っている上に、男が珍らしいんだから堪らない。海岸で三脚でもたてて描いていると、海帰えりの海女達が寄ってきて、嫌応なしの轟沈さ。まるで牝犬をかこむ牡犬だね。それがよ、肌は赤銅色の筋骨隆々たるグラマーときているんだから、全く素晴らしい。どんな女だって嫌とは云わないんだからな」

友人の中村に、すっかり房州白浜の海女部落の素晴らしさをたきつけられた画学生の有島君は、絵の具箱と三脚をさげて、外廻り房総線で勇ましく現場にのりこんだものである。ヨーカン色の海を眺め、もうここらが白浜だろうと、あたりを物色していると向うから、歳は二八か二九からぬ、美しいキャルマタ一枚の裸の娘がやってきた。「おい娘さん一丁いこうぜ」彼は、荷物をおっぽりだして彼女へとびついた。が、とたんに彼は世界が一回転したような気がして、ガッと口の中に砂がとびこんできたのを感じた。見事な肘鉄を喰って叩きつけられたのである。「ああ、ここはまだ白浜じゃなかったんだな」立ち上ると砂を払い落して、彼はまたすたすた歩きだしたということである。

お富一人が女じゃない

（千葉）　実説源冶店

「間男代の七両二分や五両じゃァ、とっても腹の虫が納らねえ、うぬ、どうするかみろ！」と妾のお富を寝とられた赤間源左衛門は、茹で蛸のようになって怒り、乾分を集めて与三郎をとっちめ、七十五カ所も切りさいなんで、虫の息になった奴を米俵に抛りこんで、江戸の生家伊豆屋に送りつけた。

「お富はどうした」「ずらかりやした」「馬鹿奴、あいつも同罪だ、捕えてこい」と云うので追手の海松杭の松をはじめ大勢が、海辺に駆けだしたが、もう遅い。お富は遠浅の海を、沖へ沖へと逃げてゆく。

「おうい、そんなところへゆくと溺れてしまうぞ、命がないぞ」「二世を契った与三さんが、あんなお姿ではもう生きる甲斐なんかないわよ、さようなら、グットバイ」「おお、そっちはグットバイでも、こっちは、オオ・ミステイクだ」という中に遂にお富は浪間に消えてしまった。源左衛門、口惜しがると思いの他「よしよし、ネバア、マイン、ネバア、マイン」と別の女のところへでかけていったとやら……昔も今も変らぬアプレ精神である。

乙姫様の空閨を癒す話

（千葉）　竜宮の手古奈

葛飾の真間の手古奈は大勢の男に懸想され、却って、浮世を儚なみ、入江に身を投げて死んだということである。万葉集の赤人の歌にある位だから、古い古い物語である。

海に入った手古奈は、亀の子にのせられて竜宮にやってきた。「お前さんと云う人は、全くもったいない女だ。惚れた男を撰りごのみもせずに、命を捨てるなんて、女冥利につきるよ」と云ったのは片思いのあわびだそうである。

「私なら一人ずつ吸いついて離れないよ」「そうだ、そうだ」とアイナメが云うと、タコもあいずちを打った。

とにかく人間の美人だから、竜宮の乙姫様とどっ

ちが綺麗か比べてみようという、魚どもの大衆評議で、奥御殿へ連れていかれることになり、対面してみると、どちらも流石にあやめ、かきつばたと云う軍配のあげようがない美人、乙姫様も浦島太郎が帰国後で、空閨に悩んでいたところから、早速デベンにご採用、互形の張型は鼈甲で特別にあつらえて末長くともに暮したとは、めでたし、めでたしである。

今も市川に残る手児奈社が婦人科専門の霊験があると言われているのも宜なりである。

子授けの神を粗末にした話

（栃木）　金精様の祟り

森君夫婦は新婚旅行に日光に出かけた。東照宮も結構だったが、金谷ホテルの一夜も頗る結構だった。翌日は華厳滝をみて、中禅寺から湯元温泉へ廻った。渓を埋める紅葉の見事さは昨夜の紅に染んだ情景を偲ばせて、森君を有頂点にした。ご両人は幸福だったのである。

秋晴れの三日目を、二人は金精峠にハイキングをした。峠の頂上に小さい祠があって有名な石の陽物が祀ってある。「これに祈ると、子供ができるそうだぜ」「まあ！」新妻は頬を赤くして、さも汚らしそうに眺めた。「迷信だよ、愚昧なる人間の迷信さ」調子にのった森君は、ステッキの先きでコツコツと石の頭を叩いた。そして嫌がる新妻をその傍に立たして、コダックを構えたのである。

それからもう廿年になる。どうした訳か、森君夫妻は子宝に恵れない。古いアルバムをみていて、妻君はこの峠の写真にぶつかるたびに、子供のできないのは、あの時に金精様を馬鹿にしたからだと悲しくなるのだった。

そして迷信だって、決して馬鹿にならないものだ

と思うのであった。

夫婦喧嘩が押問答に終る話

（群馬）　縁切寺と嬶天下

「糸がふっきれた奴凧じゃあるまいし、年中家をからにして、どこへ行ってるんだい」「大きにお世話だ、男一匹、外へ出りゃあ、女子供の判らねえことがあるんだ」と、おきまりの夫婦喧嘩、上州名物は空ッ風に嬶ア天下と決って、男は国定忠治の流れを汲んでいたから、喧嘩はハデだ。おまけに女には高橋お伝の血も流れている。

「勝手にしやあがれ」「おお、勝手にするわ」と捨台詞よろしくあって女房、目の前で身の廻りのものを片づけにかかったから、亭主も気になる。

「てめえ、どこへ行くんだ」「知れたことさ、満徳寺へ駆けこんで談合をつけるのさ」新田郡世良田の満徳寺は所謂縁切寺だ。「ふん、てめえなんか、お寺で相手にするもんか」「余計なお世話さ、さあ邪魔立てせずに行かしてくんな」「おっと馬鹿め、裏口からでる奴があるか」「じゃ、表からでるよ」「よしゃアがれ、真昼間、表からでられてたまるもんか」「じゃア、一休私ア、どうすりゃアいいんだね」「つべこべ云わず、そこに坐っていやあがれ」

椎の実から虱が蚤になる話

（東京）　浅草の観音様

上方者が東京見物にやってきた。浅草仲見世の賑わいに千日前を比べ乍ら、仁王門を潜って戦災前の本堂にお賽銭を上げると、案内の東京ッ子が「これで、このご本尊はたった一寸八分なんだぜ」と自慢する。

「何んだ、こんなお堂に住んで、たった一寸八分

か、俺が方の奈良の大仏は五丈三尺五寸、それから比べりゃア、芥子粒よりも小さいな」と難癖をつけたので、東京ッ子は気がすまない。「身体が小さくともこれだけの屋台だ。奈良の大仏なんか立ったら屋根がつき抜けるだろう、日の下開山横綱の前をみろ、身体はでっかくなくとも、ご本尊はあたり前のと変りはないもんだ、でかいばかりが自慢にはならねえ、山椒は小粒でもピリッとくらあ」

その夜吉原に遊び、上方者華魁に、「ほんとに可愛らしいわねエ、椎の実みたい」と云われ、「馬鹿云え、山椒は小粒で観音様は一寸八分だ」「なに、観音様（虱）がいるって、道理で主さん、さっきからも、そもそしやんすなあ」「蚤なんか、いないよ」「蚤ざんすか、主さんのが小さくて、わちきのが大きいとは、ほんとにそれこそ蚤の夫婦でありんしょう」

無駄になった彼女の入浴

（東京）　お江戸の水で

田舎から細君のまた従妹だという娘が、岡君を頼って上京してた。特別に美人ではないが、何といっても若いから、発溂として若い岡君にとっては悩ましい。何とかして手はだせないかと思っているが、細君の目が光っている。

ある日曜日に細君は朝から同窓会に出かけて留守、好機到来。ゆっくり起きた岡君はその娘と差し向いで飯を食べながらチョクチョクと匂わせてみた。すると相手もさすが年頃で、思春期映画ファンだけに、打てば響くような反応がある。しめたと岡君、膳を回って横抱きにするとイヤーンと甘えた口をきく辺り、ちょいとしたもの。だが、この娘さん、何となく田舎染みて埃りくさいので「どうだい

お風呂へ行っておいでよ、綺麗になってこないか」というと、いそいそと石鹸箱をもってでかけていった。

よほど磨いているとみえて長いこと帰ってこないでいるうちに、岡君の処へ友人が訪ねてきてしまった。二階座敷で話していると、「ただいまァ！」と裏口で声がして、「にいさん、洗ってきました、綺麗に洗ってきました！」「そうかい」と、困って小さい声で返事をすると「ねえ、ちゃんと洗ってきました」とまた彼女の声、岡君あわてて「そうかい、よく洗ってきたなら、裏の物干竿にちゃんとかけておきな！」

洗濯や柴刈り娘が釣れた話

（神奈川）　相模川の廓

戦争中に相模湖ができて、鮎釣りの名所相模川の清流も、すっかり面目をかえてしまったが、与瀬駅から少し溯った吉野村には、野趣横溢した遊廓があって、自動車の安いころは東京から物ずきがわんさと押しかけたものである。話はその噂が立ちかけた以前のことだ。

「旦那さん、鮎猟でござんすか」

「うん、だが、今日は飛んだ不漁だ、厄介になるぜ」「へえ」「妓達を呼んでくれ、一杯やろう」「へえ」

「ひとつ浩然の気を養って明日は大いに釣るぞ」「成程」「早く妓を呼んでこないか」「へえ、一寸お待ちなすって」トントントンと主人だか牛太郎だか梯子段を降りてゆくと、庭先きで声がした。

「おゝ太郎吉や山へ行って雛鶴が薪背負ってとるで、お客さんだと呼んできな、お花坊は玉菊が川で洗濯してるから早うこいというてな」黄色くくすん

だ座敷から眺めていると、洗濯盥にバケツを下げた女が川から上ってきた。「おーい、お客さんだよ」「ほいきた、今行くぞウ」

夢のような昔噺だが、四〇年前はこうだったのである。

英雄色を好み性部戦線異状なし

（静岡）　下田の了仙寺

下田の了仙寺はエロ寺で名高い。夥しい性的器具図像のコレクションがあったが、戦争当時は、そんな怪しからんものは焼いてしまえ、没収するぞとさんざん、その筋から圧迫を受け、折角の珍宝も埃にまみれて公開できないでいた。

処が知事が替る、郡長が替ると、その度に、管下の視察と称してやってきて、封印を解いて自分達だけ一覧してゆくのである。しまいには、精神作興にやってきたサーベルの軍人までが、性部戦線異状なきやと検閲にのりこんでくる。

「閣下、いかゞでございましたご感想は」、「ふむ、大いに精神を作興されたじゃ」、「はァ」、「人的資源の獲得にはこういうものもよきじゃ、俚も大いに慾情したぞ」、「では、一つ閣下のお口添えでこういうものも、一般にみせるようにしては、いかゞでございましょう」、「馬鹿奴、何を云う、人的資源とはただ人数を殖やすことではないぞ！　種がようなくては話にならん！　あんなものに心を移す奴らの種は要らんのじゃ！」

「しかし閣下……」

「馬鹿たれ、わしはこんなものに徒らに心を移したんではないわ……」

亭主ほどの名医はない

（静岡）　大井川の肩車

どうした訳か本家の嫁が気鬱症になり、さっぱり元気がない。湯治にやったし、薬も飲ませたが、はかばかしくないと困っているところへ、東京から名高い医者が、町にきていると云う知らせが入った。一度そんな名医にかけてみたらということで、馬にのせて村から五里の道を町に向ったが、あいにく、先日来の雨で大井川が出水である。廻り道をするのは面倒なので、近所の里からがっちりした体格の男を頼んで、これに嫁をおぶらせて川越しをすることにした。

馬に揺られているあいだも、何となく夢見心地になっていた処を、今度は人間様の肩車にのせられたのだから、嫁さんも何とも妙な気分になってきたらしい。尻を動かすやら、若者の頬を熱した手で握りしめるやら、向う岸についた時はすっかり衣物を濡らしていたということである。

それをみた婿の親父、ポンと伜の肩を叩き「おいおい、嫁の病気は、お医者にみせるまでのことはない。お前がしっかりすればすぐ癒るんだぜ」

女房の間男を防ぐ法

（長野）　他人の御飯

税金は高いし、供出にはせめたてられるし、娘や息子は町にでかけるし、その上、女房共は男女同権で大威張りに間男をするし、全くふんだり蹴ったりだと嘉門次爺さんが時世を慨嘆していると、若い平助が口をだした。

「そりゃあ、爺さん、女房の間男をするのは、亭主の勤めが足りねえからだよ」「いいや、そうとは

かりは限らねえ、誰だって他人の喰ってるものは旨そうに思えるじゃねえか、金が幾らあったって、もっと欲しいしよ、慾に際限なんてありゃアしねえ」と云ったのは権太である。

「だからよ、幾らしてやったって間男をする奴はするんだ、だが、勤めはしてやらにゃアいけねえ、俺はちゃんちゃんと毎晩してやるぜ、だからよ、年子を二組もでかしやがった。そして俺ア女房に云いきかせるんだ、いいか、これで間男でもしてみやがれ、俺はお前と多勢の子供をおいて、このまんまズラかるからなッて、これにゃア女房の奴、一も二もねえらしいぜ」

ご亭主に番人をさせた話

（山梨）　納屋の隠匿米

供出、供出と云われても、こんな山の中では碌っぽ米もとれないと、甚兵衛は自分の家の納屋に米を隠しておいた。女房は日頃、近所の若い次男坊とできていて、亭主の留守にそっと逢曳場所をその納屋にきめておいたのだが、ある日そこで次男坊としっぽりと濡れていると、他出していたと思った甚兵衛が闇買いの客をつれて戻ってきた。

納屋に入ってこられては大変である。「お前さん、さっき県のお役人が、駐在さんと一諸に見廻りにこられて、まだその辺にいるらしいよ、納屋の中をみられると大変だから、誰もここへ入らないように見張っておくれ、妾ア内で番をしているから」「ほい、そいつア危ねえ、旦那も注意しておくんなさい」

甚兵衛と闇買いは、それから夕方まで、誰も納屋に近ずかないように、番をしていたということである。それで、女房は安心してモンペからすっかり脱

いで無事に次男坊に大サービスをし、自分も天国にゆっくりとでかけたと云うことである。

よく見えないものの美しさ

（愛知）　バレリーナの魅力

医大をでて、インターンも国家試験もすんだ高柳君は、郷里の亡父の医院に帰って開業した。「東京から若先生が帰らしゃった」と町では評判になり、若い独身のドクトルの周りは、花柳界の姐さん達も総出でなかなか賑やかで、別にたいしたこともないのに、洗濯を受けに内診台に上るような、奇特な芸者なんかも現れたものである。

だが、高柳君はなかなか道心堅固で、そんな連中の乳房をみせられようと、毛を撫でさせられようと、たいして心を動かされなかったのである。とこと、ろがある時、この町の劇場へ東京のSバレー団が興業にきて、その花形バレリーナであるミドリ嬢が、腰骨を脱臼した事件が起きた。高柳君は観客席からいきなり楽屋につれていかれて、舞台着を脱いだ彼女の治療に当らねばならなかった。太股や膝を押えて揉んでいる彼の目は、下着のパンタロンの間かちらつく黒いものを時々みてしまったのである。普断みつけている女体の一部なのだが、それが、その時に限って、なぜか高柳君の心臓を滅多打ちに叩いてしまったらしい。高柳君が今日の夫人を獲得した所以は、そんなささやかな毛がみえたと云うだけの理由なんである。

特大と言えども上には上が

（愛知）　中京の道鏡先生

古代ギリシャのプリアポス大魔羅神、本朝では猿田彦大権現から弓削の道鏡といった、強腎の特大型

を誇る人物がいたが、名古屋の在のある小学校の教員で、斯界にその名を轟ろかしたほどの超大型の所有者がいた。四十二歳の今日までに、妻君が変ること七人。それがいずれも亭主憎くて家を去ったのではなく、残念乍らたゞ生命が惜しいので、未練をもち乍ら離縁したと云うので、話もそう陰鬱ではない。

七人目の妻君が去った後「先生がお気の毒だ」と自分の方から乗りこんできた高等科をでた十八娘の教え子には、その心は嬉しいが、道鏡先生もいささか尻ごみをした。併し、たってと云うことで、これを家に迎えて、その夜、彼女に云うことには「俺のを大きい大きいと云うが、本当は俺は二つもっている、お前さんには小さい方を使うから心配しなさんな」と。それでとにかく納得して無事三月ほど、実に琴瑟相和する生活を送って世人の目と耳を驚ろかせていたが、四月目のある夜、その十八娘の云うことにゃ「先生、そろそろ馴れましたから、今夜辺りから大きい方を使ってみて下され」上には上のある世の中である。

貸しても減らぬお皿

（三重）　大男の早業

伊勢湾に面した富田浜は、浪の穏やかな静かな海水浴場である。この海岸に、夏になると社員が家族連れで、避暑にでかける名古屋のN重工業の寮があって、新婚のA君夫婦と、新婚ではないが子供のないB君夫婦が同じ時期にこの寮にでかけて五日ほど滞在した。

ウィーク・デーだと、主人二人はここから汽車に乗って名古屋まで通勤するのだから、余り結構な避暑でもないが、妻君二人は大悦びである。処がある朝、主人達を送りだして寝足りぬ二人はまた床に入ってぐっすり寝こんでしまったのだ。

そこへ、案内もなく入ってきた大男が、寝衣の裾も乱れているA夫人にいきなり挑みかかり、ついで隣りのB夫人をもものにしたあげく、もいちど若いA夫人を用いるという達者な早業をみせて消えていったと云う、まことに主人達には申訳のない大事件が起きた。

処がこの達者な男は、使用料を払っていったのである。舶来の生地を三反ほどおいていったのだ。それで、A夫人はとにかく、自分は三分の二とる権利があると主張し、B夫人は二分の一ずつわけるべきだと主張した。夕方主人二人が帰ってきて、妻君達のもの言をきいたが、どうも要領を得なかった。借しても減らないお皿は何度かしても、たいした違いはないからなのである。

甲斐性なしと言われたが

（新潟）　風呂屋の三助

景気が悪いので、田畑を女房とお袋に頼んで、吾作は東京へ出稼ぎにでかけることにした。平常から吾作と女房は夫婦仲がしっくりしなかったので、女房は「お前さんみたいに椎の実の甲斐性なしは」と口癖のように彼を罵っていたのである。それでも夫婦と云うものは、いざ別れるとなると残り惜しいか、出発の前夜は早くから床に入って大いに夫婦道を楽しんだのであるが、いざ、そういうことになるとやっぱり女房は吾作の不甲斐なさがしみじみと感じられるのであった。

「昔から米つきと三助と云うから、お前さんも東京にでたら風呂屋に奉公するがいい、そしたら一人前の男の持物がどんなものだか判るだろうから」と

悪体をついたのだった。

二年目の冬に吾作は意気揚々と東京から帰ってきた。「俺ァお前の云った通り風呂屋へ奉公したよ」「へえ、それでどうだったい、やっぱりお前さんみたいなのはなかったろう」「うん、いや俺のはあたり前だ、だが女湯でみると、お前のが特別でっかいんだぞ」

慾張らずにお寺に御喜捨

（富山）　何よりも阿弥陀様

法主様の巡錫には、浴後の湯を呑んだり、拭き捨てた鼻紙を拾って有難がるという地方のことである。門徒宗では在家のまま僧籍にも入れるし、肉食妻帯も苦しからずと云うので甚だ好都合だ。

何よりも阿弥陀様が有難いと思っていたある男が女房を貰った。婚礼も滞りなくすんで、いよいよお床入りとなって、別室に退ぞいたが、花嫁さん恥しがってなかなかラチがあかない。くるりと後を向いたままらしいが、暗闇のことで見当がつかず、やっと探りあてて、まずまず初夜の式は終ったと思って、手を彼女の背中に廻すと、その下の方にもジャングルがあって、これは、またさっきのよりも一段と値打がありそうである。「何とまあ、果報なことであろう。そなたは前と後に一つずつもってござる。だが慾張ってはいけないと、壇那寺の和尚様も云ったことだ。この方は出来も上等らしいから、明日は早速お寺に行って、和尚様に喜捨して進ぜよう、さぞ悦びなさることだろうて」

戒を破らず功徳を垂れる

（石川）　永平寺の和尚

永平寺で修業を積んできた啓順和尚は流石は脱俗

超凡の禅坊主だった。坊主とは云え、体が大きく血色もよい上に、目が優しく、口が小さく、鼻が高い美男子で、苦味走っていた。だから法衣の袖を引く女も多かったし、法外なお布施をはずんでみせる後家さんもいた。だが、和尚にはあんまり浮いた話はないのである。色即是空で頗る淡々としている。

ある宿屋の女将でぞっこん和尚に惚れこんだ後家が、法事にことよせて彼を招き、回向がすみお伽ぎの酒肴も備え、いざ、ご一泊と云うと和尚泰然として泊りこむのである。まずよしと、深更その部屋を訪れたのだが、別に拒みもせず、闇をともにしても敢えて文句を云わない。遂には男女の垣を蹴散らして寝たのだが、それでも和尚は平然としている。

「一体和尚様はどう云うお考えなのですか」「俺は出家、衆生の喜捨を拒む理由もない、それが功徳とあれば、これを施すは出家の勤めじゃからな、世尊は女色を戒められたが、俺は自分から戒を破ったことはないのじゃ」和尚の名はますます有徳の聖者として上ったということだ。

男と言っても広うござんす

（福井）　和尚の特物

「女なんてものは馬鹿なもんだから、決して男が一人一人違うとか、そんなことを考えるもんじゃない。男ってものはどんな男でも亭主と似たものだと思わせておくに限るぞ」と村の和尚からきいてきた根が馬鹿な太郎助は、女房に、今日和尚に逢ってこれこれだとその話をしたものである。

「何だって？　男はみんな似たものじゃないって云うのかい」「本当だそうだよ」「そんなことはあるめえ、大概は同じだろう」「馬鹿こくな、実ァ、今日、和尚様が立小便していたのを俺アこの目でみた

んだ。そして結構なお持ち物ですなあと讃めたら、和尚様がそう仰言ったじゃねえか、あの方は永平寺にいた時も山中第一と云われた位だと」「へえ、そんなに大きいのかねえ」「あの鼻をみな、和尚の鼻を！」

女房はそれをきくといきなり走りだしていった。「どこへゆくんだ、これ！」「お寺さ行くんだ、ウソか本当かたしかめにゆくだ」さすがにこの和尚は持ち物もいいが、頭もよかったようである。

出張旅行が命の洗濯になる話

（岐阜）　日本一の大妓楼

堂島のあるビルのオフイスで、森氏と山下氏は落ち合った。妻君同志が女学校のクラスメートで、ともに商用で東京から大阪へ出張していたのである。「お帰えりは明日なのですか、私も明日帰えりますよ」「いや途中名古屋へよる用があるので、残念乍らご一緒になることはできないのです」何なら一緒に東京へ帰れそうと、森氏が尋ねたが、山下氏はそう云って断った。

翌日、森氏は大阪を発ったが、岐阜で途中下車した。その頃、岐阜には日本一と云われた浅野屋という妓楼があった。鏡張りの部屋だの、立派な浴室だの、映写装置まである到れりつくせりで、東海道線を往復する実業家や名士が、ひそかにこゝに立ち寄って命の洗濯をしたものである。森氏はその夜、こゝで十二分の歓をつくして翌日岐阜駅に駆けつけた。まだ後朝の夢心地だったが、列車がきて車室に入って窓から外をみていると、改札口から黒鞄をさげてあたふたと走ってくる紳士がある、よくみると何とそれが山下君ではないか。やっぱりそうだったのか。汽車が名古屋についても山下君は下車しなか

った。そして「全く旅というものはいゝものだな」と顎を撫でていたものである。

色気封じの裸の阿弥陀様

（滋賀）　浄光寺裸仏

今をさる八百年近く前に、摂津多田の里に夫婦者が住んでいた。岩清水八幡に祈願して、五慾を絶って精進していたが、他の慾はとにかく、夜になると夫婦とも、その性の営みを耐えることが何とも難しかった。それで、ある時旅の僧が一夜の宿を借りにきたついでに、そのことを嘆くと、この坊主、十五日間一室にとじこもって、裸の阿弥陀様の像をつくり、これを拝していれば色慾なんか、どっかへフッとんでしまうぞと教えてどこかへ行ってしまった。

その夜、女房の夢枕に「我は八幡大菩薩なり、自ら裸仏を造って与えたり、その陰蔵をみよ、色慾直ちに止るべし」と告げて消えた老翁がいて、成程淫念が止ったという。これが江州の治田村浄光寺の裸仏縁起なんであるが、これをきいたある女房、そんな効験あらたかな仏様なら、家の浮気な宿六にも拝ませてやりたいものだと連れてゆくと、仏像を拝したご亭主、女房を顧みて、「うむ、確かにこの裸の仏様よりはお前の裸の方がまだ色気がある、帰えりにどこぞへ泊ろうではないか」

暗闇で申し分のないお盲さん

（京都）　宇治の種貰い

夫婦の間に子供がないので、何とかして子供が欲しいと、いろいろ神様にも願をかけ、栄養も摂ってみたが、さっぱりと験がない。

ある人が宇治の県神社のお祭りに行けと教えた。この祭りは、神輿が渡御になる夜半に、全町はばっ

たりと灯を消して、暗闇となってしまう。これを相図に集った男女が手探りで相手構わず、顔も名も判らないままに、性の行事を営むのである。

亭主は女房に、なるべくすばしっこそうな男を撰べと教えたのであるが、なるほど世の中にはカンのいい男がいるもので、暗闇にも目に光りを持っているかと思われる素早さで、かの女房を探り当て、しっかと抱擁した末、微に入り、それこそ申し分なしのサァヴィスをしてくれたのである。

そのお蔭で、結婚十二年振りで女房殿妊娠をして、無事十ケ月目に男子を生んだのだが、なんとその子が生れつきの盲目である。女房感に堪え「成程お盲さんでもなけりやァ、あんな暗闇で、ああはいかなかった筈だわ」

松茸を売って得をした話

（京都）　丹波の松茸売り

丹波から京都の町へ松茸を売りにきた男がいた。一軒の妾宅風の家へ入ってゆくと、色っぽい年増がでてきて「まあ見事な松茸ね」と手にとって眺めている。「奥さん、いかがです、実は私は丹波一と言う松茸をもっているんですが、宜しかったら召してみませんか、そしたら、こんな松茸はただであげますよ」男はニャニャし乍ら誘いの水をかけた。

「いいわ、お茶でも飲んでいらっしゃい」と家へ上げて、男の松茸を味わった上でさて、籠の松茸を請求すると「奥さん、貴女がそれじやヤ、身を任せたとは言えませんよ」そこで今度は男がその様になったが「これでどうやらあいこですね、さっきあの様にされたことの償いがやっとできたんだから」そう言って男はさっさと籠を担い外にでかけようとした。

「それじやァ話が違う」と言い争っているところへ、旦那がやってきて「何を騒いでる」「走りのいい松茸があったんですが、この人が言い値より高く売りつけるんですもの」「何だそんなことか、よし、そんなら、俺が買ってやるから、そこへ五百匁ほどおいてゆけ」

催眼術で子授けの秘法

（奈良）　草庵に住む和尚

何とかして子供が欲しいと思っていた女房が、奈良のこれこれと言うお寺に子授けの地蔵様があると教わって、そこへ参詣にでかけた。目指すお寺はひどく小さく、五十がらみの坊さんが一人しかいない草庵だったが、これこれしかじかと願いの訳を話すと、和尚さん「それなら儂が尊いご修法をして進ぜよう。併しこの修法をすると、貴方は霊の世界の中のことが、まるで本当のことのように感じられるに違いない。併し、それは貴女の魂が霊界でそう言う経験をするのだから、その心算になって貰わねば困るし、これは決して他聞してはならぬのじや」

承知してその修法を受けると、この山師坊主は女房に催眠術をかけ、「帯を解きなさいそこに横になりなさい、あの方の願いには、それだけの覚悟がいりますぞ」と脅しをかけ、遂に一義にも及ぼうとした、「まあ和尚様そんなことを！」「いや、始めに言ったことですぞ、貴女は霊界にいるのじゃ、これは現世のことではないですぞ」と、遂に和尚、まんまと女房を信じさせてしまったと言うことである。

夫婦和合大法悦の供養話

（大阪）　生駒山の聖天

惚れ合った仲が首尾よく一緒になれたので、お礼

詣りに、生駒山の聖天様にでかけた夫婦があった。末長く一身同体、和合の実を挙げさせ給えと、並んで手を合わせたあげく、帰えりにはとある料理屋に上って盃をとったのである。一本二本と徳利を空けているうちに調子がついて「なあ、聖天様へおだんもあげたことだし、これで二人力を合せて商売に励めば、来年辺りは赤ん坊をつれてまたお詣りもできることさ」と機嫌になり、新妻をぐっと膝にかかえる。「まあ、こんなところで?」「なあにこれが何よりの聖天様へのご供養さ、一番お好きなことじゃないか」と戯れあっているところへ、女中が跡かたずけにやってきた。

「おやまア……」

「なあに遠慮なく入っておいでよ」女中何を思ったか、そこに座って手を合せて拝みだした。

「何だい、その真似は」「ヘイ聖天様のお姿を思いだしました」

燈台元暗し男女の仲

(和歌山)　ダンス禁制の村

民主主義や男女同権もいいが、大峰山へ女が登る世の中になったのは面白くないと、事ごとに村の若い男女の風儀を喧しく言って歩く村長がいた。盆踊りはいいが、ダンス・パーティはけしからんと言った具合で、つじつまが合わないことは一向気にかけず「俺の家の娘をみろ、茶の湯、生花、女芸一切こそやれ、決してダンスだの映画などに溺れやせん」と大自慢。

その盆踊りから実際に若者達は相当に自由な行動をとるようになり、誰兵衛の娘は誰助に許したの、誰太郎の嫁は誰助と通じたのと、いろいろと評判が立つので捨ておけず、村長自ら陣頭に立って夜這い

狩りを行ったところ、村の若者二人が運悪く捕ってしまった。

「お前達かい悪戯をしたのは、誰と誰だ」ときびしく攻め立てると、あちらの娘、こちらの嫁と芋蔓のように若い女の名がでてきた。「けしからん、それと言うのも村の親達が、教育がないからこんなことになるのじや、他にもう忘れた名前はないか」と更に威丈高になって訊くと、一人の若者「まことに申訳ありませんが村長さんとこの、上のお嬢さんと下のお嬢さんも」

歳にはよらぬ欲情の波

(兵庫)　とんだ欲望

パンパン娘のマリが医者へ商売道具の調子が狂ったので診て貰いに行った。医者はマリのあけすけな告白に閉口して「もっとお前上品な言葉を使えよ、人ぎきが悪いぜ、なんかあちらの言葉かなんかであるだろう」というと、「ああ、英語じゃファックてんだよ、そのファックする時にねえ……」とまたしても春本よろしくの説明をするのだ。「よしよし、洗滌をして薬をやるから」なと、医者は洗滌をすますと彼女を待合室に追いやった。

「ここの先生は上品ぶりやがって、言葉なんて何だって同じことじゃねえか」と独り言をいっていると、傍に診察を待っていた老婆が「ここの先生は品のいい方でな、私も先生の前でおならがでるっていうのが辛いわな」と相槌を打った。「婆さん、そんなら教えてあげようか、おならすることはファックするってんだよ」マリはそういって薬を受けとってでていった。

「どうも先生、この頃はやたらにファックしたくなりますんで……」診察室で婆さんは先生に真顔で

そういった。「何だって、ファックしたいって」医者はびっくりした。婆さんますます真剣になり「これ ばかりは歳によりませんでしてな！」

仇討は同じ手段でピタリ

（兵庫）　持ちつ持たれつ

女房が身体の具合が悪いと言うので、神戸の医者へ診せにやると、帰ってきて、一室に閉じこもって泣いている。惚れた女房の嘆きをみかねて「一体、先生は何と仰言った、ひどく悪いのか」と尋ねるが首を振って答えない。よくよくなだめて訊いてみると「そりゃア、きっと婦人科の病気だろう」とズロースを脱がせて、内診台に追い上げたばかりでなく、これを手ごめにしたらしい。

怒り心頭に発したが、落ちついて考えると、はたしてこの場合が強姦罪を構成するのかどうか、みていないことだから怪しい。そこで彼はその翌日、のこのこと医者の留守を覗ってその家を訪ね、「先生からのご註文ですが」と美しい夫人に面会を求め、「洋服の寸法とりに上ったのですが、下着からご新調とのことでお召しをお脱ぎになって頂きます」ともちかけ、下着一枚になった夫人を応接間のソファの上につき倒し、一部始終を語った上、凱歌をあげて引き上げたと言うことである。

夫婦喧嘩の仲裁道具

（岡山）　夢に金光様

岡山の在に大きな果樹園をもっている後家さんがいた。ある時、近所の世話好きの婆さんが訪ねてくると、「実は昨夜夢に金光様がお立ちになって、お前は良人をもてと仰言ったのです。こんな年になり、伜も大学をでようというのに、そんなことはと

申し上げたのだけれど、お聞きにならないで、でないとこの夏に畑の白桃はみんな水気がなくなって枯れてしまうぞと、仰言るんですの、だからまあ茶飲友達とでも言うか、年寄りは年寄りで、似合の方があったらお世話して下さい」と言いだしたものである。婆さんも驚いたが、平常いろいろとお蔭も蒙っているので町にもでかけて、これはと言う老人を探して後楽園の茶屋で老らくの二人の見合をさせた。

処が男の方は品のいい爺さんだが、大分の年配で、耳も遠く、腰もふらついている。帰り道に後家さんは、仲介の婆さんをとらえて「幾ら上品なお爺さんでも、あの格好じゃア頼りないわね、もし私達が夫婦喧嘩でもしたら、どうして仲直りができるかしら、それに耳が遠くちゃア、伜もいるのに困るじゃないの。仲直りのお道具の、ちゃんとした人をつれてきてよ！」

化膿した指に解熱の妙法

（広島）　茨のとげをさした話

許婚の若い女学生を連れて厳島に遊びにでかけた若い医者の卵がいた。昨日まで何ともなかったのに人さし指に繃帯をしている。「どうしたの」と訊いても、なかなか訳を云わなかったが、二人で弥山に登り、後側の日当りのいい叢に足を投げだして、海を眺めている時「実は」と云って彼が話しだしたのである。「ゆうべ夢中で家へ帰える途中、茨のとげをさしたのだが、こんなに熱をもち、腫れて化膿してしまったのです。けれど、これには一つの療法があるんです。だが、これはちょっとあんまりぶしつけで云えないが、貴女なら治せるんですよ」と気をもたせた。「あら私ができることなら」「いや、それが、できるにはできることなんだが」「まあ仰言

ってよ」

そこで彼は真面目な顔をして、この化膿は昔から処女のある場所に入れて暖めると、すぐ癒ると云われていて、科学的にも証明がつくのですと、尤もらしく説明したものである。許婚に絶対の信頼をもっていた彼女は羞しいには羞しいが、そんなことで癒るならと、快よくその治療を承諾したそうである。彼がどの指でどんな熱を冷したかは、もうお察しのつくことだろう。

正直という偽言の申告

（山口）　股間の宝石

関釜連絡船があった頃の話である。満洲から朝鮮に入るのには税関があったが、下関で船を降りる時にも簡単な荷物の検査があった。これはどちらかというと思想警察の方なのだが、折角税関の目をかすめてきたものを、ここでほじくりだされては九仞の功を一簣に欠くみたいで甚だ残念である。

そこで朝鮮から連絡船まで一緒だった三人の婦人が相談した挙句に、翡翠やら紅玉などの密輸入品を木村君に頼んでズボンの股の間に隠して貰うことにした。ポケットへは手を突ッこんでも、まさか洋服まで脱げとはいわないだろうと思ったからである。

荷物の検査はどしどし片付いて三人の婦人は無事に通過し、木村君の番になった。「貴方はこのトランクの他に、何も隠して持っているものはありませんね」

「そうですな」木村君が悠々と考えていたが「この私のズボンの股のところに、大事なものを隠していますが、これは私のためでなく、ご婦人方のための宝物でしてね」検査官はにやにやして「いや、それは拝見しなくても結構です」木村君は正直に申告してパスしたのである。

子供を作る秘法はある

（鳥取）　的を間違えた話

大山の麓の村に、少し足りない左巻きの男が住んでいた。村の若者達は、ことごとにこの男をからかうのを退屈凌ぎの慰みにしていたのだが、この男が女房を貰うと、早速みんなでからかいにでかけた。

「ちゃんと夫婦ごとはできたか」「的をまちがえずにやれたか」とうるさいことである。

どう云う訳か、的をまちがえた訳でもないのだが、この男には子供ができなかった。それをまた、みんなは種にして盛んに嘲ったのである。口惜しがった男は、よしきっと子供を生ませてみせるぞと、七人の子持ちの源助小父を口説いて、我が家につれてきて女房を預けた。まさか、同じ家の中にいるのも妙なので、自分は外にでて立っていると、若者達が通りかかって、「甲斐性なしの野郎だな、子供一人こしらえることができねえで」とまた悪たれをついた。すると、この男、我慢がならねえと顔を真赤にして怒り「何をぬかす、吃驚りするなよ、今な、女房は子供を作ってるんだぞ、いいか、この子供ができてみろ、お前達を片っぱしから、やっつけてみせるから！」

未亡人の奸策妙な幽霊

（島根）　教師と未亡人

松江のお城址の堀の近くに、年増の未亡人が住んでいた。空閨四年、悶々の情に絶えぬ思いでいるうちに、隣家に下宿している女学校の若い国語の先生に、すっかり血の道をあげてしまったのである。何とかして口説きおとそうとしたが、相手は学校出の

ホヤホヤの堅人で意味が通じない。

この先生は毎夜、家庭教師にでかけて九時頃に帰宅する。そこで一計を案じ、彼が彼女の家の前を通りかかる頃に、わざと閉めた門を内側から激しく叩いてわめいてみせた。何事かと彼が立ち寄って、門の扉をひらくと、いきなり中に引きずりこんで扉に鍵をかけて、またわめいてみせたのである。「中に入って下さらなければ、もっと声をたててみんなを呼びますよ、そして貴方が無理に私の処へ押し込んできたと云いますから」

びっくりした彼が訳も判らず奥に入ると、彼女は集ってきた近所の人達に、門を閉めにでたら、妙な幽霊みたいなものをみたのだと偽言をついた。そして皆が帰ると、自分も国語の先生もふらふらになってしまうまで、奥の間で楽しんだと云うことである。

引いた籤が運の尽という話

（島根）　縁結びの神様

女子人口の方が男子よりも多いと云うのに、どういうものか女に縁の薄い熊谷君は、月下氷人の神様だと噂の高い出雲大社に参詣して、艶福を祈った。その夜、玉造温泉に泊ったところ、夜半に出雲の神様が夢枕に立ち、「汝、異性に縁薄きを嘆く、我憐れんで汝に好配を与えん、来りて撰べ」と、手にした小い紙束をさしだした。みると、宝くじの札のようなものである。

熊谷君は年中宝くじを購うが、今までに三十円以上は当った例しがないので、抽籤には預る自信がなかった。併しこれはチャンスであると思って、勇気をだして怖々その一本を引いてみた。札の表には、「五組一〇〇〇」と書いてあった。番号が若いから

きっと当ったぞと、詳しく抽籤規則を訊ねようと思っていると、もう出雲の神様は消えていない。

それから五年になるが、熊谷君はまだ独身である。どうやら五組と云うのは、五人組（自慰）の略で、一〇〇〇と云うのはセンズリの略号だったようである。

恋を囁く場所は一つ

（香川）　鳥のくる枝を切れ

お遍路さんから帰ってみると、女房の奴が地主の若旦那とくっついている濡場をみせられてしまった。与七は泣き面をして、そのまま従弟の権太の処へ飛んでいった「女房の野郎、若旦那と俺んちの納屋で寝てやがるんだ！」「ふん、で、手前は女房に未練があるんか」「なんの、あんな阿婆ずれにあるもんか」「じゃア、別れたがええ、現場を抑えられちゃア、向うも四の五もあるまい」「うん、だが俺ア女房の預り金に手をつけてるでなあ」「じゃ地主の旦那にかけあって、若旦那にきまりをつけて貰うだな」「始めはそう思ったんだよ、処が年貢をな、女房から若旦那に話させて、いつもちょろまかしているんだ」「じゃアどうにもなんねえじやねえか」「だからよお前に相談するんだ」

権太にもこの始末は思案がつかなかった。処が三日ほどして与七は意気揚々と彼の家を訪れてきた。「なア、三日三晩考えただよ、今朝ふと気がついてなア、あの納屋さぶち壊しただ、もう奴ら乳繰り合うことはできねえぞ、場所がねえもんな」

坊主の不法越境

（愛媛）　石槌様の御利生

喜寿に手の届きそうになった老僧が、若い弟子の

坊主をつれて石槌山に登山した。「この国に生れ、この国に育ち乍ら、一度もこのお山に登ったことがなかったが、これでわしも念がかない、安心立命じゃ、あの世に行っても国の話ができるわい、いつでも仏様のお召しにでかけられようぞ！」と大悦びで話しながら帰途を急いだ。

夜になったので二人は道ばたのとある住人のいないお堂に入って寝ることにしたが、和尚は今日上った山頂の大観が目に浮び、なかなか寝つかれない。「七十年の人生はまことに夢のようじゃった」と、傍の青年をみて、多少青春を懐しんで物語っていたが、そのうちにうとうとと眠りに落ちてしまった。

が、翌朝早く、まだ漸く四辺が白みかけた頃、弟子の坊主は和尚のけたたましい声と触感に呼び起されたのである。「いや、驚ろいたぞ、これはこれは、石槌様の御利生かな、三十年振りのことだな、七十だというのに」若い坊主は思わず前を押え、和尚の手を握り、「和尚様、そ、それは私のでございます」

畠がよくても石産女という話

（徳島）　借り嫁

「お前が家の娘を伜の嫁に借りたいがね」「ふん、よかろ、借してやるぞ」これで娘はその伜の家に引きとられた。処が、一年たっても一向にもう止ってよいものが止らない。孕まないような女では役にたたないと、伜の親父は娘の家にでかけて、「折角、借りたが、都合が悪いで返すでな」と断るのである。「ふんまあ、縁がないで」と娘の親は黙って疵物になった娘を引きとるのだ。阿波の三名村にはそういう結婚の風習があった。

「なあに畠はええのさ、だが種子が悪うても、こ

やしが悪うても穫らんからの」娘達は平気で、また他家の伜に借りられてゆく。ある娘、気立も器量もいいが、さんざあちこちに借りられていったが、どうしても尻がおちつかない。それが石産女かと云うと、ある時、出戻り最中に懐胎したものである。「一体どうしたことだ」と母親が訊くと、娘羞しげもなく「婿の家では毎晩休みなし、自家にいれば三日位は身体が明きますから」

夜這いにも提灯持って

（高知）　寝室の照明

土佐はよいとこ南を受けて、人間が早熟で情熱的になるのだそうだ。高知から程遠くないが、海辺ではなく山に入った地方のある村では、夏になると夜這いが流行して、若い者は娘と遊ぶことができないようでは、一人前に扱われなかったし、娘の方も男の一人も持たなくちゃア、恥しいと云った習慣があった。

晩飯がすむと、若い男はそわそわしてくる。親父やお袋も大体察しているんだが、伜が提灯をだしてもそもそやっているのをみて、親父腹を立て、「馬鹿奴、夜這いにいくのに提灯なんか、もってゆく奴があるか」別に恋は盲目と云う洒落でもないが、親父は怒鳴ってしまった。伜は伜で、夫婦雑誌で閨房の照明の効果と云うのを読んで以来、やっぱり暗闇より明るい方が気分がでるぞと思っていた処だから親父の言葉が大いに癪に触ったのである。

「暗闇じゃア相手の面がみえねえじゃアねえか、父ッさん」「馬鹿、面なんかみえなくったっていいもんだ」「俺アご免だね、父ッさんみたいに出来の悪いのとできちゃうとつまらねえもん」

楽しいことは問わず語り

（高知）　和尚と産制

時代の波はどんな辺鄙な処へも押し寄せてくる。高知の山奥のある村へ、産児制限の普及班が乗りこんできた。喰えもしないのに子供ばかり作る村民達を、救ってやろうという親心なのか、産制具やパンフレットを売って儲けようというためなのかは、判らないが、村では吃驚り仰天した。

小学校が隣村にあるばかりで、第一会場がない。そこで檀那寺の和尚に頼んで、寺の本堂を借りることに話をしたが、和尚、ちゃんと夜は若い大黒と寝る癖に、そんな人の道に反いた淫りがましいことには借せないと頑張った。それでも、決して卑猥な言葉や不倫なことはいわないからということで貸して貰って開会すると、全村の老若男女がぞくぞく集ってきた。和尚肩を張り、目を光らして演壇の傍に控え、もし一寸でも変なことをいったらという気構えでいる。弁士登壇「皆さん人生において何が一番楽しいことでしょうか」と第一声を吐くと、和尚「待った」と手をあげ「もし、それをあのこと」だといい切りなさるなら儂はもうここをお貸ししませんぞ」

貴方は私の子供のパパよ

（福岡）　博多人形の店

商用で博多へ出張したK君は夕方になると宿にいるのも詰らないので、街をぶらぶら歩いていた。堅人で通っている上に、初めての土地なので勝手が判らず、ただ賑やかそうな処を歩いて廻っているだけだった。

併し、旅の恥は掻き捨てで、チャンスがあったら少しは羽を延してもいいぞという気持も、充分K君

の胸中にあった訳である。その彼がとある博多人形のお土産屋の飾り窓をみていると「あらッ！」と云って、いきなり浴衣姿の美しい女に親しげに挨拶されたのである。

「まあ、お一人でご散歩ですの、博多はいかがでございます」続けざまにそう云われて彼は唖然としてこんなテもあるのかなアと考えていると、女の方もハッとして「あら失礼致しました。私、貴方様が今度博多へいらしった私の子供達のお父様かと存じましたので」彼はさっぱり判らず、その女の後姿を眺め乍ら、今の女の言葉を口の中でくり返えしてみたのである。彼女が小学校の女の先生であったことはK君の知るよしもないことだった。

問わず語り間男の自白

（佐賀）　村の風儀問題

特需景気で炭坑の景気がよくなり、農村の青年達が稼ぎにでては結構金を溜めて帰えった頃の話だ。併し、あぶく銭身につかず、結局トンコ節気分で無駄使いをするが落ちだ。これじゃア健全な農村の害になると、村長や村の小学校長があつまって、男達だけの風紀粛正協議会を開いた。

「中学の二年生が四人も妊んだですたい」「村内に処女はおらんちゅうこったい」「この頃の奴ア、平気で背負ってきた病気を、儂のとこに診せにくるんじゃからな、娘っ子は娘っ子で町に行って堕して貰っとるんじゃ」親も先生も医者も大いに青年の非を鳴らしたが、一向にいい智恵がでない。

結局、青年ばかりの問題じゃアない、対策を今後

は大いに練るということで散会したが、その寄合から戻った太郎兵衛、女房に何の話だったと訊かれ、「うん、この村で間男をしない女は三人きりいないと云うこったぜ」と出鱈目を云うと、女房うっかり「はて、あとの二人たあ、一体誰と誰じゃろうな」

娘が好きで御神躰の濡れた話

（佐賀）　破　瓜

嫁入りの日が決ると、娘は母に伴われて深夜、村の岡神社に詣り、神主からご神躰の石棒を拝借して、灯を消した神前で裾を捲り、それで股間を撫で廻すと云う風習が平戸にあった。

本来は手入らずの生娘だけの行事なのだが、まさか親にも割られていますとは告げかねて、その振りをして神前に額づいた娘、恭々しく神主がとりだして母親に授けたご神体を渡され、懐しく根元から撫であげているあいだに、多少気分がでて、案外に行事が手間どったが、神主も母親も一切無言を誓っている以上、口をきくことはできない。

どうやら済んでご神躰が母親の手から神主へ返えされると、不思議に石は暖くぬらつく。式がすんで神主、娘の母親に向い皮肉に「だいぶ手間どりましたが」と云えば、母親平然として「神様も若い娘をお好きとみえて汗を掻いていられましたな！」

馬も主人も共々に

（熊本）　阿　蘇　の　麓

たまの骨休めに阿蘇の麓の温泉へでかけようと、二人連れで馬に乗ってでかけた。時は若葉の木の芽時、太郎作どんの爺馬までが次郎作どんの牝馬をみて亢奮してはしゃぎ廻るという頃だった。「飛んだ老いぼれ馬の癖に年甲斐もなく、気が崩しゃがっ

て……」と太郎作どんは、腰を浮かして大汗を掻きながら、舌打ちをした。

宿につくと二人は早速風呂に入った。浴室に漱石の「草枕」の女主人公のような、しゃっきりした年増美人がいたことで、今度は人間の方がのぼせ上って、躍気になったのだが、年の効で太郎作どんが、まんまとこの後家をものにして、離れの六畳へ行ってしまった。口惜しがった次郎作どん、厩へでかけて自分の牝馬に太郎作どんの老馬をあてがって眺めたものである。二匹の動物が大いに天悦を恣にしたことは云うまでもない。

翌日、自分の老馬が余り元気がなくふらつくのをみて「どうしたこった」とつぶやく太郎作どんに、次郎作独り言のように「お前様と同じように無理したらしいでな」

老けた程よい花嫁

（熊本）　娘の値段

終戦後、兵隊から帰ると堀君は東京にでて、一旗挙げる決心をしたところが、インフレつづきの揚句がデフレの不景気で、一旗どころか旗を巻いて故郷へすごすご帰らなくちゃならなくなってしまった。

幸いに故郷の熊本には一人の伯父がいて、その妻君、つまり義理の伯母の姪が三人その家に厄介になっているので、その一人と結婚するなら多少の財産を分けてやってもよいという耳よりな手紙がきた。堀君が文句なしに帰郷したことは、いうまでもなかろう。

「一郎や今の娘が下の奴で廿五才だ、お前とは三つ違いだが、あれには十万円つけてやるつもりだ。それ今、菓子をもってきたのは中の娘で三十四才だ

よ、少しとりすぎているがそうはみえんじゃろう。あれには二十万円、も一人、今挨拶にくるがこ奴は卅八才なんだ、で五十万円と思っているんだがね」堀君はすっかり考えこんでしまったが、やがて「ねえ伯父さん、も一人四十五才位の娘さんがあるといいんですがねえ！」

同じ粘膜の穴ならば

（長崎）　近眼鏡を光らした話

今日は丸山の検診日で、ぞろぞろと妓達が番所へ集ってきたが、肝心のお医者さんが姿をみせない。急いで迎えをだすと、老先生はご風邪でお臥み、医専出の若先生は耳鼻科が専門だが、医者は医者だし、同じ粘膜の穴が相手だから、間に合う筈とお連れ申しましたと云う、口上である。

みるとまだ学校をでたてのホヤホヤで、些か頼りないが、どうぞと部屋に招じたが、ずらりと並んだ女達の行例に、若い先生の方がだいぶいかれてしまったらしい。検診台に上った女が裾をまくると、先生、真赤になって近眼鏡を光らし、「はい、はい、もっと大きくアーンと開いて」と思わず口走ってしまった。女は可笑しさを耐えていたが、先生は大真面目で、洗滌器で洗滌しながらも「それ、それ、そうだらしなく吐きださずに、ガラガラッと奥を鳴らしてよくうがいをする！」と、いとも真面目にやったのに、女達もとうとうこらえきれずにふき出してしまったということである。

熟れているザボンの実

（鹿児島）　木に上るお嬢さん

九州には内紫とかざぼんという、夏密柑に似た大きな果物がある。孫娘が東京から訪ねてきたので、

祖父さんは裏庭に案内して、ざぼんのなっているところをみせた。

「お祖父様、あれ喰べられるの」「うん喰べられるが、まだ熟してないかも知れんな、中の皮が紫色になる位でなくてはな」「私、話の種にとって喰べてみたいわ」「それはかまわんよ、でも、お前、樹に上れるかい」「大丈夫」

着馴れた洋服を脱いだので、和服の裾が邪魔だが、そこは男女共学で鍛えた十七歳のお嬢さんだけあって、するすると木によじ上った。「これまだ早いかしら」「その右の方がうれているな」祖父さん何気なく上をみあげると、彼女のパンティが縦にすっぽり裂けている！　ふむ、大分熟れているわいと感心していると小枝に足をかけたその枝が、ボキンと折れてダタンと彼女が祖父さんの頭の上に落ちてきた。「まあ祖父様のおつむに、おけがはありませんか」爺さん頭を撫でて「毛は初めからなかったが、毛のブラシで撫でられたような気がしたよ」

三角地帯の隠れ黒子

（大分）　別府奇談

夫婦して別府の宿屋に泊って贅沢三昧に日を暮している客があった。何でも石炭山を持っているとかで、豪勢な様子だが、二人とも金も暇もあるので、ご亭主はご亭主で、宿の女中の尻を追っかけてみたり、芸者を玩具にしてみたり、ご乱行も目に余るものがあった。

ある晩、ある処でこの旦那は二十三歳の芸者照香を素ッ裸にしていろいろと巫作戯していたが、ふいに照香が「ねえ旦那、旦那の奥さんもやっぱり、妾と同じように、ここに黒子があるんですってねえ」と下腹部のジャングル地帯を掻き分けていったもので

る。

「へえ、そうかい、そんなこと誰がいった？」「ほら、あの色男の按摩さんよ」「あの按摩がだって！」ご亭主は少し妙な気がして、早々にそこをでて宿に戻った。そして、妻君を照香のように裸にして観察してみると、成程確かに同じような地帯に黒子がある。

「貴様、俺を裏切ったな！」自分のことは棚にあげて彼は怒った。そして二人とも翌日さっさと別府を引き上げていったという話なんである。

男は嘘つき女の全スト

（大分）　下手の横好き

別府の温泉にきていた湯治客同志が湯槽に身をひたし乍らの話である。「いや全く君、宿屋という奴は面白いもんだよ、いろんなことがあるもんでな」「そうかね、何かあったのかい」「大有りさ、昨夜遅くパチンコ屋から帰ったと思い給え」「ふん下手な癖に」「どうして、ピース三つだぜ、確かに穴に縁があったのだな、後から考えると」「まあ、先を話し給え」「部屋に入って電気をつけてみると驚いたね、僕の床の中に、年の頃は十七八の美人が寝てるじゃないか」「ふーん」「それがね、湯上りの浴衣一枚、君本当だよ、肌には浴衣一枚きりつけていないんだ、胸に片っ方の乳がかわいい乳首をみせてもっこり覗いてるし」「で、どうしたい」「布団をちょっとどけると、君、彼女はズロースもはいてないんだよ、処女だね」「だからさ、その先を云えよ」「考えたね、相手は処女だし、部屋を間違えただけなんだからね、僕は胸を掻き合せてやって、みたこともみないつもりにして、電気を消して部屋をでていったさ、どうだ、僕が君でなくって彼女も仕合せというものさ」「何だこの嘘つき野郎、僕だって君と同じようにやるよ、もっと上手に彼女を仕合せにしてやったかも知れないがね！」

長蛇を逸す

（宮崎）　春の裏山

「君達は一体そこで何をしてるのだね」と学校の裏山の躑躅の咲いている蔭で、男と女の生徒が怪しげな格好をしているのを発見けて、そこの高校の教師が怒鳴りつけた。男は発見ったとなると、ズボンをたくしあげ、さっと飛鳥のように身を躍らして行ってしまったが、女の方はしくしくとそこに座って泣きだした。これは確かにただ事ではない。

「逃げていったのは堀だね」「……」「何をしていたんだ」「いいえ、していたんじゃないんです」「ぢゃ、どうしたんだ」「キッスをさせてくれってから」「させたのか」「はい」「それから」「私を抱いて」「え、抱いて」「手を握ったんです」「手を握った、それから」「そしてまたキッスをしました」「手はそのままかえ」「いいえ、いろいろと撫でたり、ひっぱったり」「ふむ」「それから堀さんはづぼんを脱いだんです」「それでどうした」「先生が丁度そこかへいらしちゃったんです」「なんだ、それだけか」「え、私もそう思いました」

風流話の泉

性力は使って減るものではない。

性力の乱費が早老を招くと云うのは、使い方が悪いからで、上手に使えば使うほど性力は強くなる。キンゼイ報告では達者な老人とは、早熟な青年の老いた姿だと云っている位だ。

人間は一生に何回営めるか。

廿歳代で毎日、卅代で隔日、四十代は二日隔き、五十代で五日隔き、六十代で週一回、まず八千回とみてよい。「使っても減らないものの有難さ」大事に旨く用いることだ。

性力増強の秘訣はあるか

生卵に鰻、山の芋のたん白源補給の栄養食もいいが、まずよく眠ること、心配をしないことが不老長寿、早老防止の第一の要訣だ。「お若いと云われて亭主てれている」

夫婦の年齢差はどの位がよいか

接近していると二人が同権的な位置がとれる。差が激しいと一方が能動的、一方が受動になる。どっちを撰ぶかは個人の好みで、常識的には中間をとって五、六才の差が普通だ。

一目で相手の性力が見抜けるか

カンがよければできるが、それは誰にでもできるとは云えない。鼻が大きいと陽物、唇が大きいと女陰が大きいと云うが、形の大小と性力の強弱は別問題だ。

赤っ毛、縮れっ毛の女は淫乱か

迷信だ。併し長い人間の経験の蓄積から、理屈抜きに迷信が真理を表す場合もある。黒い毛の女にも淫乱女はいるが、外形の異状さは多少性質にも影響する。「赤っ毛だ口説いてみろとけしかける」

かわらけは性的不具者か

「かわらけもままあるものと湯番云い」女性には性毛の生えない者が案外にある。毛がないのは気がないで、縁起を担いで株屋などは嫌ったが、希臘や中国ではわざわざ、除毛した。決して不具者なんぞではない。

性毛は何のためにあるのか

赤ん坊がつかまるためだと云う奇説もある。営みの時の摩擦電気を起すためだとも云う。併し、彼女がズロースを脱ぎ、腰巻をとるとき、ちらりと黒いものをみせて、諸君を刺戟するためにあると云うのが一番ご名答の筈である。

乳房の大小は性力に影響するか

性器の大小と同じく、直接には関係がない。肥満性の女は乳房も大きいが、却って性力は弱められるものだ。併し、豊かな乳房は男性を刺戟する。大きいと乳間を利用することなどの特技もできる。

運動選手に不姙症が多いか

スポーツ選手、バスの女車掌など、過度に身体を使う者に多いことは事実だ。けれど、それが生命に別状ないと、同じように性力には影響は少ない。寧ろ腰を使って腰部筋肉を発達させて、性技には効果的である筈だ。

日本人は性的優秀民族か

枕絵が性器を誇張して描いたので、外国人は日本人を非常に精力家だと買い被ってしまった。実際には米を主食にしている日本人は、そう精力家とは云えないのだが、性技の方面で異常な文化をもっていたことは自慢できる。

寝室だけが寝る場所ではない。

問題は性行為が中心だから、どこでも、それができる処は、利用した方がいい。寝室とは快よい睡眠を摂るための部屋で、営み部屋だと解する必要はない。他見さえなければ、庭園だって山野だって、一向差支えない筈である。

営みには夜がいいか朝がいいか

発情期を決められない人間である。社会の風俗を素す恐れがないなら、どこででもよいように、いつでもよい。夜と決めている夫婦が、朝とか昼とか行えばそれだけ刺戟が新らしくなって、悦びも増すと云うものだ。

妻の月経中でも営みはできるか

「痲病の薬朱羅字のようになり」で江戸時代には、月経時の営みが、痲疾の治療法になっていた。絶対に妊娠の恐れがないことは一利で、薦める人もあるが、心理的な面からくる影響もあるから、我慢した方がよかろう。

寝台と布団夜具とはどちらがよいか

ビフテキと湯豆腐とどっちが旨いかと、云うようなものだ。寝台のスプリングの快よさの嬉しい時もあろうし、下に畳のある堅さをもった布団のふくよかさもいい。優劣はつけられぬ。

寝衣はどんなものがよいか

目のさめるようなもみの長襦袢の色っぽさもいいし、純白のシュミーズでも、それを剝げば真白の玉の肌で悪くない。要は簡単に、真っ裸になれる衣物がよい。その点パジャマは困る。

寝床はステージ、演出と照明を忘れるな

「客も役者も二人っきりの四畳半」営みは子孫製造のためばかりではない。二人の人生の悦びの表現である。だからみせたり、みたりの気持が大切だ。すればいいだけではない。寝室のエチケットもここに生れるのだ。

女は入浴、男は一杯

風呂に入って、身体から局部を綺麗にしておけと云うばかりではない。入浴は身体の血の循環をよくし、気持をゆったりさせるためである。男の一杯も気分を和らげ、緊迫感を多少なりと遅らせるからだ「晩酌がきいて奥様およろこび」

前戯後戯はどこまで行うべきか

これは準備行為と後始末の問題で目的ではない。往々にして本末顚倒するようだが、幾ら面白くても目的を忘れては困る。気分がしっくりしたら切り上げて正式に移ること。

枕とはいろいろ役に立つ道具

大体に於て営みには枕はいらないものだ。併し、その無用の長物化した枕も、彼女の腰にあてれば江

戸のせきれい台の代用にもなるし、正位の男の両肘の下にあてても便利だ。

態位での本手は米の飯

まず我国の普通の夫婦のラーゲは、所謂本手と称する男主位のものだろう。この頃は正常位などゝも云い、昔は本馬などゝも云った。四十八手、いろいろと仕尽したあげく、やっぱりこゝへ戻るのは主食的値打があるからだろう。

嬶ア天下は挽茶臼か

男主位は男尊女卑、女主位の挽茶臼形を女尊男卑と考えるのは迷信だ。道鏡と孝謙女帝の情事から始ったというのもこじつけで、お茶を挽く臼の構造から名づけられた。これはやっぱりライスカレー並に常食にまぜて用いる。

ワンワンの真似ではない背中

「犬猫のようだと奥様お嫌がり」何んだか変だと云う人もあるが、この形はポムペイの壁画やギリシャの陶画にもよくでてくるから、却って動物本来の自然な形と云えるようだ。ひよどりごえなどとも云う。

側臥は長くゆつくりに妙

男女対等の並臥だから、どちらも重さや疲れが平均して分担するので甚だ便利だ。横どり、矢はずがけの名で、古くから知られているが、多少熟練を要することが難である。

火急のお役に立つ立つたまま

「立ちがかり柱に爪の痕がつき」だそうだ。甚だしきは便所の中、公衆電話のボックスの中などで、利用されているそうだ。どちらも正常な夫婦間では余り用がなさそうだが、ご亭主の出張の朝、玄関でチューと接吻するのはいいかも知れぬ。

四十八手は知らねばならぬか

とんでもない。要らぬことは知らない方がいゝ。基盤攻め、投網、炬燵がゝり、担ぎ上げ、腹櫓、帆掛舟、担き上げ、後並び、松葉崩し等等の名と方法を知っている程度で充分、試す必要はない。

後の始末は紙と帛とどちらがよいか

一長一短、紙は捨てるだけに気持がよく、帛は厚い割りに音がしないでよい。「女房が泣くたびにいるふくのかみ」寝室や寝衣や相手の女性で使い方も分けられるだろう。

快美極って死を呼ぶとは

苦しくて死にそうだ、嬉しくて死にそうだ、快美の絶頂に死にそうだ、死にますと云うのは人間の悲しい運命の象徴だ。日本ばかりでない。殺す、死ぬ失神するなどと云う言葉は独、仏、英のその道の本にも必ずでてくるのだ。

性具は自分で工夫し作るべし

コンドオムに加工すれば変形サックもできようし、愛戯用指人形だって指サックから作られる。張形もコンドオムで心を入れゝば可。昔からりんの玉の代用は金柑、男性自慰具の吾妻型には葛藟、張形は胡瓜、茄子といわれていた。

媚薬にはどんなものがあるか

男の強精塗り薬りには長命丸、剛勢散、慈情散、

飲み薬には帆柱丸、玉琅丹、厚精丹、角勢丹、神仙丹、女の挿入練り薬には緑鶯丹、閨海膏、挿入丸薬には奇妙丸、喜命丸、喜悦丸、塗布薬には童女丹、如意丹、洗濯用に得春湯、避妊に朔日丸など。

秘本にはどんなものがあるか

江戸時代の三大奇書は「貌姑射秘言」「阿奈遠加志」「逸著聞集」いずれも国文学者の戯著だ。三大絵巻は「小柴垣草子」「稚児草子」「袋法師絵詞」で、鎌倉時代から室町時代のものである。

秘画や秘本は手に入るか

それは難かしい。併しこう云うものの写本は古い家にはよくあるものだ。昔は結婚の際に親が娘に春画や春本をもたしてやった。それが相当に今日に伝っている。往来の暗がりで売っているものなどは、くだらない。

枕画にはどんなものがあるか

三大絵巻の他に土佐派崩れの画家の画巻が相当ある。浮世絵では師宣、清信、祐信、春信、清長、歌麿、春章、北斎、英泉、国貞など、すべての浮世絵師がみんな描いた。応挙、大雅、呉春などの大画家にもある。

新しい春本はないか

永井荷風と云う「四畳半襖の下張り」小栗風葉と云う「袖と袖」佐藤紅緑と云う「乱れ雲」など、いずれも活字本ででゝいる。外国の翻訳物では「ファンニイヒルの思い出」「バルカン戦争」「トルウ・ラブ」「ガミアニ」「フロッシイ」「イヴオンヌ」「肉蒲団」等みんな戦後版がある。

ストリップ・ショオはいつ頃からあるか

人間の生れた時からある。天の岩戸のウヅメノミコトの舞もそうだ。殿様が領内の娘達を裸にして眺める遊びは日本でも外国でも珍らしくない。江戸時代のやれつけそれつけ——女の性部に吹矢をとばしたり、たんぼ槍でつかせるもの——女相撲などもその例だし、芸者の雨しょぼ、浅い川の裸踊りも昭和までであったが、大衆劇場のストリップは戦後からだ。しかし戦後最初に行われたものは額ぶちショウで踊らなかった。

音は性的刺戟にどんな役をするか

義経が建礼門院を口説く時、隣室で四天王に女を抱かせてその物音をきこえるように仕組んだと「壇の浦」にあるが、「めざましき声に隣りで憤り」と云う位に音響効果も刺戟がある。

春音楽と言われるものはあるか

性交の伴奏に音楽を用いることは昔からあるが、誰でもそれをきいて発情するようなものはまずない。ジャズの刺戟性もたゞ昂奮させるだけだ。それは音楽に具体性がないからだ。併しスクリアビンの交響曲「法悦」は性交を表わしたものだと云うからできない相撲ではない。ただの耳からの刺戟には一時猥レコードがあった。

目でみた男と女の裸体はどっちが美しいか

これは昔から議論がある。男の真中に陽物があって美的だと考えたギリシャ人もあれば、乳房から陰阜への豊かな丘の美しさを讃えたロオマの詩人もある。男は女体を、女は男を美しいと思うのが人情だ

ろう。

匂いも性的刺戟になるか

江戸の遊女は衣物や布団に香を焚きこめたし、ベッドに香水を撒くのは外国でもやる。催情用に焚く香には、らいん香、唐線香、紅毛けい香、催香春なんてものがあった。

避妊は不自然行為ではない

薬がなければ、死ぬ病人を注射で生かしておくのは不自然行為とは云わない。同様に育てる自信のない子を、無責任に生むことを避けるのを、不自然行為と云う必要はない。

良人の浮気はなぜ起るか

貴女の心の手綱が彼をしっかり抑えていないからだ。心の手綱は夜の営みに最も深い根底をもっている。良人の不満が浮気のもと。

倦怠期の打開にはどうしたら一番よいか

短期間の別居もいゝ。要は夫婦間の気持を新鮮にすることだ。春画、春本をみたり、寝室の設計を新たにするのも、ラーゲに変化をもたせること、旅行をすることもいゝだろう。

強姦されたらどうすればよいか

「かつがれはせぬと娘のねだる市」大丈夫と思っていても天災のようなもので、美人にはいつ災難が降ってくるか判らない。罹災したらすぐ正しい処置をすること、妊娠中絶も、この場合は当然である。これが第一である。

夫婦にも秘密はあっていいか

よい。人間は完全に一致できるものではない。秘密はない方がよいが、あっても仕方がない。利巧な妻が、絶頂感を一致させたように振る舞う擬態まで偽りとしてはいけない。まして、もう昔の、結婚する以前の恋人の事など告白して、波瀾を呼ぶなどは、最も愚の骨頂である。

粋人物知り手帖

あ

相舐め　女性の同性愛者がお互いに慰めあうこと。とも喰いなどと同じで、皿（女陰）を甜めあうとか、饅頭（女陰）を喰べるなどの意に通じて考えられる。

相惚れ　男女が心から互いに惚れあっている、相愛の状態をいう。

青かん　香具師などが野宿する意で用いていたが、戦後はかんを姦に通じさせて、野外で男女が営むことを称している。

青線　赤線に対して、非公認の売春地区をいっていた。つまり私娼窟をさしている。

赤線　公娼制度のあった頃の警察地図に、遊廓即ち特飲街は赤色で塗られてていたので、その区域を赤線区域と称したのである。

赤電　接客婦達の月のものの意味で、「あの人はチャッカリしてるわ、赤電でも稼いでいるのよ」というように使われる。

あがり　双六の登りつめた上がりと同じ意味で、月経が終ることをいった。また女性の終閉を迎えた場合などにもいう。

アクメ　絶頂感のことである。オルガスムスと同義に使われる。

あていれ　「似顔絵であていれをする長局」で、吾手入れであろうか。女性の自慰を称した江戸語だ。

あてがき　吾手掻きである。掻くということから、あていれに対して、男性の自慰を意味する。

あて馬　馬の種つけに、牡馬を発情させるだけの役をする牝馬、転じて人間の場合にも用いられ、「彼氏、ただ彼女のあて馬だよ」などと用いる。

吾妻形　男性用の自慰動具、革や布で作った袋を用い、茶筌などの名もある。「落城の堀に浮いてる吾妻形」

アナス　英語の肛門性感をいい、男色者の多くはこれに層する。

あぶな絵　江戸時代の枕絵禁止期に、その代用として起った挑発態浮世絵版画。女体の露出を主として、豊信、清満、春信などを代表画家とする。

アブノーマル　ノーマルでない異常の意であるが、異常性愛などの場合に略してアブなどと呼んで用いている。

アベック　フランス語の一緒に、という意味をとって、二人一組の恋人連れ添う姿をいっている。

アムール　フランス語の愛の語であり、英語のラヴ、ドイツ語のリーベに同じ。

新鉢　まだ男を知らぬ処女の性器をいう。新開ともいい、新鉢を割るは処女を犯すの意。

アルコグラニー　嗜虐症、被虐症を含む苦痛を喜ぶ心理をさし、苦痛淫乱症という。

アル・サロ　アルバイト・サロンの略、大阪で始った女学生やB・Gなどのアルバイト女給をおくキャバレエのことだが、今日では職業化して素人娘の魅力からは遠い。

アルス・アマトリア　ローマの詩人オヴィッドの大作「アルス・アマンジ」による言葉。アルスは技術アマトリアは恋愛的の意で、恋愛術とか性愛技巧のことである。

あれ　英語のイットである。一九三〇年代にアメリカの女流作家エリナ・グリーンの小説の名から発した性的魅力の代用語で、イットがあるなどといったが、広義のあれは性器や営みや月経などを、その場合々々にさして用いられている。

アンブラツセ　フランス語の抱擁のことであるが、接吻の意にも用いられる。

い

いかり草　春に薄桃色の豆のような花をつける草で、葉の形が錨の形をしている。羊がこの草をたべると精力絶倫になるというので、淫羊藿といって強精剤にする。蕺菜草ともいう。

板舐り　風呂場の流し場の板を舐めるという意で、男子の長茎をいう。「小桶からなめらの下る板舐り」

居茶臼　安座して対きあった、姿勢で、緊急時に用いられ、裾が後に羽織られるので投網ともいう。

疣ザック　変形コンドームで、ゴムの表面にいぼいぼなどがつけてある刺激を多くしたもの。

イプサチオン　ドイツ語の自慰の意、オナニーに同じである。

芋田楽　芋をくしざにした田楽のことであるが、親子相姦を、一本のくしでさすという意で表わした江戸語だ。「おかしさは芋田楽で相孕み」などである。

いもりの黒焼　惚れ薬として江戸時代に知られている。雌雄のいもりを蒸焼にして粉末としたものを、想う相手に振りかけると、効果テキ面と称したが、どうであろうか。

インシミネーション　交精することをいう。

淫水　男女の性的貢奮時の分泌液の総称で、バルトリン氏腺液も精液もふくめて俗書などに用いている。

インターコース　英語の関係、交接の意であるが、セクジュアル・インターコース（性的交渉）の意味で広く性交を指して用いられる。

インフェリオリティ・コンプレックス　インフリティは劣等の意で、劣等感として使われる。

インポテンツ　無能力の意味であるが、これも性的無能力即ち勃起不能症の陰萎などをいう。英語ではインポテンス。略してインポ。

う

ウイ・ウイ　アメリカの幼児語で営みのことをいう。

ウェット・ドリーム　濡れた夢、即ち夢精をするような艶夢の意である。

後茶臼　後向きの膝座の女主位をいう。

後取り　背面のタイプに対する総称的な名で、一般動物の慣用タイプである。ひよどり越え、逆落し、隔山取玉などもその異称だ。

後並び　後取りの変形で側臥して背面するタイプである。

後弁天前不動　所謂バック・シャンで、後からみると弁天様みたいな美人らしいが、前からみると忿怒形の不動様そっくりで、百年の恋もさめよという容貌。

後櫓　女主的な背面タイプで、やぐら取りの変形である。

ウテルス　ラテン語の子宮であるが、本来は腹部をさしていった。

裏門　表門は女性の性器、裏門は後門で肛門、従って男色などに用いられる。

上付き　女性の性器が比較的上方にあるもので、古来、上開妙陰といわれている。

え

エクスタシー　恍惚として忘我の境にある状態、性

的にはオルガスムスの絶頂にあることをいう。

エス　英語のシスター（姉妹）の頭文字をとった言葉で、女学生間の同性愛の相手方をエスと呼んでいる。

エジプス・コンプレックス　母子複合、男子が母に親しんで、父に反抗を感じる潜在意識で、精神分析学上で有名な言葉だ。

越前（えちぜん）　男性の亀頭包皮が脱しない包茎をいう。「越前は一生幼な顔失せず」といい、越前福井藩の槍には熊の毛の鞘があり、皮かむり槍といわれていた。

エッチ　英語のHである。変態性慾のローマ字綴りの頭文字をとって、女学生間では変態の意味で用いている。

エム　女性の場合はメンストラチオンの頭文字Mで月経をさし、男性の場合はマンブルの頭文字で男性器をいうが、M型女性などというのはマン（男）の意で、男性要素の多い女性を指す。

エヤクラチオン　ドイツ語の射精の意、英語ではエジャキュレーションである。

エレクト　英語で勃起の意である。

エロ　ギリシア神話の恋のお使いキューピッドの名であるエロスからとって、エロチック（色情的）エロティシズム（好色）エロトマニア（色情狂）などの言葉があって、恋愛一般に用いられていたが、我国ではその略称として性愛的な肉躰狐用語として用いられている。

エロトマニア　色情狂、淫乱症のこと。

お

オオドーヴル　洋食の前菜から転じて前戯をいう。同様に後戯はデザート。

オオトエロチズム　自己色情のナルチズムと同じ、正しく自惚れのことである。

オオプン・セット　映画の野外撮影の意から転じて、青かんと同じく野外での愛戯をいう。

オオラル・エロテイク　唇による性感をいう。愛咬、吸淫などを好む性質。

お開帳　寺などで厨子を開き本尊を拝ませることを云うが、女陰を露出することを指し、「開帳を裏から湯番拝んでる」などとある。転じて女陰をもいう。

お釜（かま）　釜は肛門で、男釜だという説もあるが、鶏姦、男色或は男娼、陰間を指している。戦後は男娼をお釜屋と呼び、動詞的に用いる時はお釜を掘ると使う。

おかん　寝ること、宿泊の意で、浮浪者の言葉から売笑婦などに用いられている。青かんのかんであろう。

お客　「初めてのお客娘はまごまごし」のお客は、訪問客ではあるが、生理的なお客様即ち月経のことである。

奥の院（おくのいん）　社寺の神物的な奥殿を連想して、女性器をいうのである。「本尊は濡れ仏なり奥の院」

お刺身（さしみ）　「お刺身の前に土手をば一寸と撫で」江戸語で接吻を表す洒落言葉である。

おさすり　お触りの意で、異性の身体に接触すること、一種のペッティングをいう。

お皿　女性器であるが、鉢に対して、特に膣孔の浅い場合をいうこともあるようだ。

おそくづ　優息図と書く、古代の針医書の名から転じて、中世には春画絵巻の名称として用いられた。鳥羽僧正はおそくづの名人だったという。

落松葉（おちまつば）　並臥前位の側面ポーズで、双臥仰位の松葉

崩しによく似ている。

お茶碗（ちゃわん） 瀬戸物茶碗のすべすべしているところから、局部無毛のことをいう。

オナニー 旧約聖書のオナンが地に精を洩らしたということから発して自慰、手淫をいう。オナニズムは自慰の常習を指す。

オブシーン 英語の猥褻的という意味である。オブシーン・ピクチュアといえば猥画ということになる。

お便口（べんこう） 江戸の小児語であろう、女性器をいう。便は小便の便であろうか、尿の排泄口と膣とを混同したような俗語である。

おぼこ 江戸では未通女と書いた。今日の処女である。世に馴れぬ手入らずの娘の意だ。

お祭り（まつ） 営みのことをいう。男女の祭典の意とも解される。「お祭りがすんで鎮まる山の神」古代では政治もまつりごとだった。深遠の意味がまつりの一語に含れている。

おむす 江戸語で娘のことをこう略称している。枕本などにはよく出てくる言葉だ。

おめか これはお妾の略称であるが、地方によっては女陰をこう呼ぶこともある。

親子丼（おやこどんぶり） 卵と鶏肉の丼飯だが、発音上から親子心中をいうこともあり、親子たわけ、芋田楽などと同じく親子相姦を呼ぶのが普通である。

おりもの 女性器の故障からでる白帯下などの分泌粘液のことをいう。

オルガスムス ドイツ語の営みの絶頂時をいう。江戸語では気がいくなどといった。アクメと同じ。

温泉（おんせん）**マーク** 沸し湯の温泉を看板に、温泉の記号を掲示している戦後の連れ込み宿。また性毛の疎な女性をいう時にも用いる。

オンリイ 外人の特定の男に専属するお妾のこと。ツー・オンリー、スリー・オンリーなどと旦那の複数の場合にも用いある。

か

カアテン・レクチュア レクチュアは講義だが、垂幕中のお講義で寝物語のこと。

カアマ ヒンズー語で性（セックス）のこと。カーマ・スートラは性の教典の意だ。

開（かい） 貝にも通じるが、江戸語で女性器をいう。BOと読む。

外資導入（がいしどうにゅう） 女学生用語で、ボーイ・フレンドを指す。「私、外資導入計画中なのヨ」などと用いる。

解剖（かいぼう） 中学生などが仲間の衣服や下着を強制的に脱がして、性器を露出せしめる性的遊戯をいう。

鏡茶臼（かがみちゃうす） 半座位によるラーゲの名称。

かき屋 手技をもって売淫する戦後の新商売で、かきは掻くの意である。

かげ祝儀（しゅうぎ） 花柳界で芸者が泊りに対して貰う枕金のことである。つまり売春料金。

蔭間（かげま） 江戸芳町などにあった男娼で、今日のお釜屋であるが、芝居の若衆などもいて、同性、異性の双方に売春した。「よっぽどなたわけ蔭間を連れて逃げ」

カストレーション 英語の去勢のこと。

数の子天井（かずのこてんじょう） 女性器内の触覚的表現による粘膜面。

楽器（がっき） 女性器をいう。よく鳴る楽器などというように用いる。

かつぎあげ 肩車とか衣かつぎなどの異名をもって知られた特異なラーゲの名称。

かつぐ 強姦又は輪姦など、暴力をもって女性を犯すことをいう。「かつがれた夜はぶっかけを二つ

割礼（かつれい）　陰い」　古代ユダヤでも行われ、キリストも受けたという儀式で、男茎の包皮を切除する習俗であり、この風は各地にあった。

甲形（かぶとがた）　べっ甲製の男茎補強具、亀頭に冠して増強し、避妊にも効果があったといわれる江戸の閨具。

カマトト　清鉾という魚がいるなどと、トボケて無邪気さを装う女をいう。映画界からでた陰語である。

かり　亀頭のこと、かりさき、かりくびともいい、雁の字をあてている。雁の頭が似ているからであろう。「出来合いはおかりが低うございます」

狩り込み（かりこみ）　敗戦直後にしばしば行われた街頭のパンパン狩り、所謂手入れである。

カレッツア法　保留性交法をいう。所謂接して洩らさぬという訳だから、多少心理的に不満は伴うが、避妊と精力保持には得点がある筈だ。

皮かむり（かわかむり）　男茎の包茎をいう。成年の日本人にはこれが比較的少いが、外人には多いといわれる。

皮つるみ（かわつるみ）　男性同志の相互自慰だとも、鶏冠だともいわれている古代語である。

かわらけ　土器と書く。局所無毛で「土器はさっぱりとした片輪なり」とあるが、また、河原毛駒からでた言葉ともいい、全くの無毛のお茶枕でなく稀毛を指すのだともいう。

完全（かんぜん）　中学生用語で、性毛や腋毛が生え、少年なら亀頭をだし、少女なら初潮をみて第二次性的特徴が表れてきたことを指す。

かんぬき　女性器の門が上付きに過ぎたのをいう。

き

黄色（きいろ）　月経中の赤に対して、その前後の性感熾んな期間をいう近代語。但し太陽が黄色くみえるとは過淫の形容である。

機械人形（きかいにんぎょう）　機械体操などともいい、無感動に営むことをいう。玄人の職業的行為を指す。

キキ　英語の陰語で猫を意味し、女性器をいう。

ギネ　ドイツ語のギネコロジスト、即ち婦人科医の略称である。

共同便所（きょうどうべんじょ）　誰にでも貞操を許す、尻軽女の蔑称である。

玉代（ぎょくだい）　花柳界で、芸妓や遊女の揚げ代をいう。

御す（ぎょす）　中国語からきたもので、女性を肉体的に制圧することをいう。ヨーロッパの男声ソプラノ歌手カストラート、中国の宦官などは職業的にこれを行った。

去勢（きょせい）　生殖能力を除去して、性のポテンツを奪うこと。

キング・ポイント　大正時代の墨東玉の井の私娼窟に対する陰名、玉は王のキングに点がついているからでる。玉の井は隅田川の東にあるので、玉の井にゆくことを「川を渡る」といった。

巾着（きんちゃく）　金を入れる袋であるが、入れて締めるところから、女性器に擬され、特にしまりのいいものに対して、この名が与えられた。

く

くじる　手技による探春の探宮で、今日のペッティングなどの範囲にも入る。

グラマー　豊かな肉体美を誇る大柄なタイプの美人をグラマー・ガールと呼んだ。エロチックな堂々

たる美しさの意である。反対に小柄美人をトランジスター美人という。

グランス 男性の亀頭をいう、カリサキに同じ。

クリトリス 女性器の陰核、陰挺をいい、女性性感部の最も鋭敏な場所であり、ボオヴワールはこれを採りあげて、女性は男と違って二つの性の悦びを味える場所をもっと特筆した。

軍船（ぐんかん） 大砲を男性に譬え、軍艦を女性に比した、軍国時代の明治陰語であるが、船は昔から女性で表され、特に女性器をも意味した。

クンニリングス 男性が女性に対する吸淫で、ハーモニカに同じ。

け

毛（け） 「毛が生える頃に寝相がちとなおり」の毛で、性毛だが、毛が生えるとは一人前になった意味で日常語となっている。毛饅頭などすべて女性器をいう。「毛饅頭万民これを賞玩す」

ゲイ 戦後、アメリカ兵から覚えた新語で、ゲイ・ボオイなどという同性愛の被愛者タイプの美少年をいう言葉の略称、三島由紀夫の「禁色」参照、ゲイ・バーの語もある。

閨怨（けいえん） 女性の独り寝の閨の淋しさを表わした言葉。

K・O 拳闘用語で、ノック・アウトの略、完全に営みでノビてしまった状態である。

鶏姦（けいかん） 男性の同性愛、男色をいう。形が鶏の行為に似ているからであろう。

ゲブルツ ドイツ語の出産、分娩のこと。

ゲニタール・オルガン 英語の生殖器の意で恥部、陰部、性器などをいう。

限定版（げんていばん） 女学生間で、秘本秘画の類を、特定出版のこの言葉で表わしている。

こ

コイツス ラテン語からきた男女の営みのこと。コイトスとも書く。

コオ・エド 英語のコオ・エデュケイション、即ち共学の意から、男女共学をかく略称する。

コキュウ フランスで妻を間男に寝とられた亭主のこと。コキュウの嘆きなどという。

コケッコサービス 鶏のサービスであるが、鶏姦ではない。手早く営みをすませるサービスの意である。

こしけ 帯下と書く婦人病のおりもの。白帯下は性器充血からあって感染はしないが、黄帯下は感染性をもち淋毒性のものが多い。

子壺（こつぼ） 江戸時代に用いられた子宮のこと。

コニー 小説「チャタレー夫人」の女主人公の名、コンを名称化したもので、よろめきマダムをこう仇名する。

五人組（ごにんぐみ） 江戸語である。五本の指を以ってするので男性の自慰を指す。

ゴノ ゴノゴッケン即ち淋菌の略で、ゴノロイ即ち淋病の略称。

子袋（こぶくろ） 江戸時代に男性の陰嚢のことをいった。精子のことは子種といった。

昆布巻（こぶまき） 帯を解かず、着衣のままの短時間の営みのことで、正月の芸妓が、正装のまま旦那に侍くときなどにも使われる。

御無礼（ごぶれい） 不良少年間の用語、ご無礼するというのは姦すということである。

独楽廻（こままわし） 自慰のことである。独り楽しむと書くから、明治時代に用いられた陰語。

五両（ごりょう） 江戸時代の間男が、女の良人に払う謝罪金で、

「生けておく奴ではないと五両とり」などとあるが、後には七両二分に値上げになった。

転ぶ　広くは営むこともいうが、売春することを転ぶといい「三味線の下手は転ぶが上手なり」で、水転芸者などといった。また転びと名詞化して売笑婦をいった。「ころびとは中ぶらりんの売女なり」

コン　フランス語の陰語で、女性器をいう。

コンセプション　英語の妊娠、受胎のこと。

さ

サアビス　饗応とか、もてなしの意であるが、娼婦などの性的技巧をもって侍くこと。

ザーメン　ドイツ語で精液のこと、英語ではシーメン、ラテン語ではスペルマという。

細見　江戸時代の吉原など、遊里の遊女名、揚代などを、記した案内書で「細見を四書文選の間に読み」とある。

サイレント　無声映画のサイレント・ピクチュアから出た言葉で、閨房で言葉を発せずに営むこと。

サイン　署名である。肉体への署名で、つまり関係済みの意で、スタンプを押すの意。

逆さくらげ　温泉マークの図案記号を、逆さにすると、くらげに似ているので、連れ込み宿のこと。

逆さ蠟燭　ローソクを逆さにした形、即ち一の営みのラーゲである。

相模女　江戸時代の女中は、多く相州からきて、それが好色、多淫な女の代名詞となっていたのである。「相模女いとし殿御が五六人」

ざきる　関係したこと、「ありやァ、もうざきったよ」などと用いる。

雑魚寝　京都大原で、大晦日の夜に男女雑魚寝をする風があり、大古の乱婚時代を想わせたが、京阪の花柳界では、客が芸妓達を連れて関係をせずに寝る遊びが行われている。

サジズムス　嗜虐症、加虐淫乱症などといい、フランスのサド侯爵の奇癖から、名づけられたのである。女をいじめて性的亢進を得る変態性欲である。

サダイズム　阿部定女の男根斬り事件によって名づけられた女性の偏質的愛欲をいう。定るというのは男根斬りを意味し、定ちゃんは強淫な女のことをいう。

サチリアジス　男性淫乱症で、ギリシアの半獣神サチールの名からでている。

サック　コンドオムと同じ、魚皮或はゴム製の花柳病予防用に男性が使った閨具であるが、今日では避妊具として専ら、重宝がられている。

廊言葉　吉原で使われた特別の花魁言葉で「ありんす」「しいす」「なんし」などといった。「廊仙葉習うも拔くも一苦労」

さね　陰挺、陰核、クリトリスの俗名だが、文学的にはバラの蕾とか宝石などといった。

鞘　女性の膣のことである。名刀を納めるの意である。

小夜袋　コンドオム即ちサックの明治初年頃の呼称。

障り　月の障りともいう。女性の月経の異称。

サンガリズム　アメリカのサンガー夫人が唱えた産児制限論、彼女はその実際的指導のため、数回我国を訪れている。

山帰来　梅毒にきくといわれた野草土茯苓である。「薬種屋のやつと聞きとる山帰来」

三十八度線　朝鮮の南北の境界線であるが、これを貞操の限界に譬えて、これを越すとか越さぬとい

われたのである。

三寸五分　男茎のスタンダートは五寸といわれたから、三寸五分は短小弱少型のことだ。

産制　バアス・コントロールの産児制限の略称である。産制はマルサスの人口論から出発した社会問題であった。

レ

シイソー・ゲーム　スポーツ用語の接戦の意から転じて、性愛語として用いられ、両人伯仲の技巧とか熱度をいう。

シクスティナイン　英語の六十九である。フランス風といわれた相互吸淫で、フランス語ではソアサント・ヌウフという。

四国攻め　ラーゲの一種である。四方からの包囲態勢と思えばいい。

地獄　江戸語で私娼のことである。

しじみ　成女を蛤、年増女は赤具で、少女を蜆に譬えた。これは性器からの連想でもある。「月見にはまだ喰い合いのない蜆」

四十八手　相撲の四十八手に擬らえて、営みの形を工夫した江戸時代の机上的性論である。

シスター・ボーイ　女性的青年に対して与えられた新語である。反対の言葉に、男性的女性のブラザー・ガールがある。

ジスパロニー　性的不感症のこと。

下付き　上付きの反対で、女性の性器が比較的下方にあること。

シック　英語の病気のことであるが。女学生などは月経のことを、シックと呼んでいる。

シヒリス　花柳病の梅毒のこと。

しも　下方とか下部の意味で、性器の蔑称として用

いられた。下帯などを洗うのは下盥と呼んだ。

シヤ　フランス語の猫の意で、女性器の陰語になっている。特にシャ・ノアール即ち黒猫などの名は名高い。

尺八　男性を吸茎すること即ちフェラチオ。

シャムハアル　ドイツ語の恥毛即ち性毛のこと。

シヤン　学生語で、ドイツ語のシューン即ち美しいから出て、美人のことをいい、トテシャなどといった。

ジャングル　局所多毛を、熱帯地方の密生した籔にたとえてかくいう。

ジュク　慶応義塾の略称であったが、戦後には盛り場新宿の略称として、アプレ・ゲール派青少年に用いられた。

小児科　花柳界などでは、若いお雛妓ばかり追っかけている客をこう呼ぶ。若い娘を好む趣味家である。

ジョン・トーマス　英語の陰語で擬人名化された男根で、トミーという愛称も用いられる。

シロ・クロ　白は女性、黒は男性の意で、性の営みの実演見世物をいう。

シロ・シロ　双方が女性で、同性愛的性技を実演する秘密見世物。女と犬のシロ・ワンなどというものもある。

新開　しんかいというよりあらばちと読むのである。処女の性器をよぶ。

腎虚　性交不能症、但し川柳などでは勃起不能ではなく、プリアピズム即ち陰茎強直症をさしているが、一般には陰萎としている。「容体をいうと腎虚と呑み込まれ」とあるが、腎虚患者は甚兵衛と称した。「甚兵衛がへのこ在世の如くおえ」

ジンゲル　ドイツ語の歌手、英語のシンガーである

が芸妓をいい、後には女給をも呼んだ。官僚的陰語である。

腎助（じんすけ） 性の機能を腎臓の作用とみていた江戸時代には、好淫の者を腎助といった。今日の助兵衛と同じである。

新造船（しんぞうせん） 昔は嫁を貰うと新居を造ったので、若い嫁を新造といった。この場合は破瓜直後のまだ処女らしい女をいう。

進水式（しんすいしき） 破瓜、処女を破る水揚げのこと、女性の場合であるから、船の進水式の名がとられたのだ。

ジンバリスト 提琴家の名ではない。腎張りストで、強精の旺盛な人のことである。

す

吸付サービス（すいつき） 接吻でなく、耳もとに口を寄せて思わせぶりを示す女給達のサービス。

すけ 戦後に余太者などのあいだで用いられた情婦のことをさす言葉。

裾っぱり（すそ） 江戸語で淫乱な女をいう。「裾っぱり怖い目をして盗まれる」などとある。

ストリップ 英語の着物を脱ぐこと、裸体を売り物にする見世物をストリップ・ティーズという。ティーズはおらすという意味だ。

スバンコール ストリップ・ダンサー達が乳房にあてて乳首を蔭す道具をいう。

スピロヘータ・パリーダ 梅毒の病原体で、パリーダは色がない、スピロヘータは曲った髪という意味で、普通染色法では顕微鏡でもみえないところから名付けられた。

スプーニング 匙の英語からきた言葉で、男女が匙を重ねたように側面的背部で重なりあう姿勢をいう。

スペルマ ラテン語の精液のこと、ドイツ語のザーメン、英語のシーメンに同じ。

スポンサー パトロン即ち旦那の意で用いられる。「彼女にはもう歴ッきとしたスポンサーがついているよ」などと用いる。

素股（すまた） 女性が性的器官を用いずに、腿などを利用して男性を満足させる方法で、商売女が嫌な男などにはごまかしてこれを用いたが、産制や月経時などには素人にも用いられている。

須磨の浦（すまのうら） 女性の白慰を指す明治大正頃の女学生達に用いられた風流語。マスターベーションの上の二字を逆にしたというところ。

スメグマ 亀頭頸や陰核の固りに溜りやすい皮脂腺からの分泌垢、恥垢などという。

ズロオス 女性の下着の一種、我国では白木屋の火事で下半部が解放的なために、非常梯子を下りられず焼死者をだしてから、この洋風下履きが急速に普及した。

せ

鵲鴿台（せきれいだい） 尻に敷く枕のような腰当で、下降性の女性に用いるとよいといわれた江戸時代の閨具。鵲鴿は古代の二神に夫婦の営みを教えたという鳥で、これにあやかっての命名だ。

女衒（ぜげん） 昔は遊女の仲介等者をいった。「まま母とにらんでぜげん安くつけ」などと悪質のものが多い。今日も上野駅周辺には上京する田舎娘を待ち伏せする婦人誘拐者が絶えない。

せせり形 江戸時代の女性の自慰用具張形の小形のものである。指人形、爪形などもいった。

セックス・アピール 英語の性的魅力の意で、イット（それ）に同じ。

ゼミナチオ　女性の性的分泌液の排出で、男性の射精に比較し、押鏡博士によるとかなり多量の女性もあるということだ。

せんき　疝気という漢方医語で、腰部の痛む男性の病気であり、橙やそばがその妙薬だという俗説がある。「疝気でも風邪にしておく女形」

線香　昔は芸妓の揚時間を計るのに線香を用いたので、芸妓の花代を今でもこう呼んでいる。「光陰を線香でつもる勤めの身」

せんずり　千度擦るの意であろう。男性の五人組式自慰のことである。

洗礼　キリスト教の入信者の儀式であるが、ここでは童貞、処女を失う時のことをいう、学生語である。

そ

ソアサント・ヌウフ　フランス語の六十九である。相互的吸愛で、英語のシックスティ・ナインに同じ。

外かこみ　小股ばさみともいい、既産婦などに用いるとよいといわれた江戸時代のラーゲである。

ソドミー　旧約聖書の淫乱な都ソドムの名からでいて獣姦或は男色をいう。

空割れ　女性の陰阜下にある陰裂を呼ぶ江戸時代の俗語。

た

タアキー　英語の七面鳥、転じて移り気な浮気女性をいう。

第一次性的特徴　男女の根本的な違いである性器の相違をさしていう。

大黒　寺に養われている妾、寺院の女房をいう「梵語で大黒俗語で山の神」などとある。

鷹　江戸時代のパンパン女性、夜鷹をいう。「鷹の妓夫箱提灯をさげている」

第二次性的特徴　思春期になって両性ホルモンの作用から生ずる男子の髭、骨格筋肉の変化、女性の乳房、臀部、撫肩の脂肪ののりなどの変化による特徴ある差をいう。

互形　女子の自慰用張形の両頭を具えたもので、同時に使用できるので「部屋方の姉妹分は互先」などとある。

たけり　たけだけしくなるもの、つまり勃起するもの、従って陰茎をいう。

たこつぼ　蛸ともいい、よく吸いつくの意味で、ある種の刺戟性に富む女達の道具をいう。

助け舟　勃起力の乏しい男性が助勢具として用いた閨具で、鎧形に台をつけたようなものである。

ダッチペッサリー　オランダの医師が発明した避妊用ペッサリー。

狸寝入り　寝たふりをすること、狸ともいい、一種の閨房の手管に使われる。「起きなんしなどと狸へ寄りかかり」

種馬　種馬所の雄馬であるが、多産の亭主や養子婿を種馬と呼んで蔑視した。

種子が島　駒がけなどといって、馬を連想させるラーゲである。

たぼ　江戸語で女のことをたぼと呼んだ。女性の髪の形の一部からとってこの名があり「あのたぼは町だぜなどと百桟敷」

玉茎　男性の陰茎のこと、玉茎、玉開などは性器を尊重した言葉である。「たまぐきを娘にきかれた

母こまり」

玉の輿　賤しい女が認められて、大家の嫁に迎えられるような、成り上り女をいう。「親類にろくなのはない玉の輿」

達磨　江戸の私娼をいい、明治大正頃までは達磨屋、達磨宿などと用いられた。

タングプレイ　タングは舌、プレイは遊戯、英語である。つまり舌の遊びで意味瞭然。

ち

地黄丸　漢方の強精、補腎の薬。「地黄のむうち間男ができるなり」

稚児さん　男性の同性愛の場合の被愛者をいう。寺小姓などを稚児と称したことからきた言葉で、美少年をも指し、男色の盛んな鹿児島審ではよか稚児などといった。

乳繰り合う　男女が馴れあうことであるが、互いに乳を弄りあうというフォアプレイ的な言葉が、日常語に入っているのには驚く。

ちぢれ髪　江戸では女性の縮れ髪を淫乱症に多いとみた。「悪口をいいなさるなとちぢれ髪」アメリカで赤毛を好色だというのに似ている。

膣　女性のワギナである。最短六センチから一〇・三センチ位までの七―八センチを普通とする。ひだの多い粘膜壁ので、出産のときは伸びて産道にもなる。

ちの道　漢方医の子宮病をさす言葉である。「血の道だのに解毒など留守居やり」

チャーム　英語の魅惑するという言葉であるが、若い娘の乳房を特別に意味することもある。チャーミングな娘などと用いる。

茶臼　抹茶などをひく臼の構造からきて、女主位をとになっている。「名にほれて長命丸を姑飲み」

ちょんのま　今日の言葉でいえばショート・タイムのことである。ちょっとの間の意。

ちんこ　ちんぽ、ちんちんなどともいい、幼児の陰茎乃至幼児語として用いられる。

という。そのヴァラエティに、本、居、鎖、後、逆などの名をもったものがある。「おかしくもないに茶臼をみて笑い」

ちゃんこ　女性器のこと、営みの意に転用している地方もある。

中条　堕胎専門の江戸の女医者で、江戸各所に散在して、浮気女の後始末をしていたようだ。「中条の門にたってるのが相手」

女悦丸　江戸両国の四つ目屋の媚薬で、長命丸と並んで喧伝された。「泣かずんば泣かして見しよう女悦丸」

提灯　老人の陰茎で、携帯用の伸縮自在ながらピンと張らない小田原提灯に似ているので、この名がある。

長命丸　江戸四つ目屋薬で、飲み薬ではなく、塗布剤である。よく塗ってから、事前に洗い落すこ

つ

朔日丸　毎月一日にのめば、妊娠しないという江戸時代の四つ目屋薬である。「持薬さと朔日丸を後家は飲み」

通和散　黄蜀葵の根から採った男色用の白色紛末の薬で、唾液にとかして用いた。ねりぎの名もあって「天神の裏門で売る通和散」

つき出し　遊女の初見世のこと。まだ初心のとこが買われる。「つきだしは素人むきと息子いい」

月見　江戸時代の女主背面のラーゲもあるが、女性

器を月に譬え、窓の月の異名もある。

つけ馬（うま） 遊興費未払に対して、客について金銭を取りたてにゆく役のこと、「道草を喰うをつけ馬油断せず」

つける 花柳語で床をつけるという。戦後のパンパンがおかんをつけるなどともいった。同衾の意もある。

つなひき 腰に力を入れること、従って売春婦の商売熱心さ「あの人とてもつなひきがすごいわよ」などという。

通鼻（つび） 古語で女性器の称、壺ともいった。鼻の形に通じるという意味でもあるまい。

局見世（つぼねみせ） 江戸時代の下級の娼家、切見世というのに同じ。「局見世暦のように年が明け」

て

出合茶屋（であいぢゃや） 江戸の不忍池畔や大川畔などにあった逢曳の待合所。今日の温泉マークと思えばいい。

貞操帯（ていそうたい） 「出合茶屋危い首が二つ来る」 ヨーロッパの十字軍騎士達が、妻の貞操を保護するために、鉄製の帯をしめさせた。現にパリのクルニー博物館に遺物がある。貞操保護器として名高い。

テータテート フランス語の頭と頭を向きあわした差し向いのこと、額を集めてということにもなり水入らずの意である。

手管（てくだ） 手練手管といって、心理的なものと、肉体的な面での技巧やフラテーションをいう。

テステークル 寧丸の意、ラテン語ではテステス。ドイツ語ではホーデン。

テテ フランス語で乳首をいう。

出歯亀（でばかめ） 明治の女湯覗きと強姦致死で有名な池田亀太郎が出ッ歯なので、その仇名をとって痴漢をかく呼ぶ。テバカメズムスとドイツ語にもなっているそうだ。

デフロレーション 初夜に処女膜の破れる破瓜をいう。ドイツ語ではデフロラチオン、花を散らすの意である。

デルタ ギリシア文字からきて、三角洲をいう。形の相似から女性の陰阜の逆三角形をさして、デルタと称する。

と

といちはいち 女子同性愛の一様式で、トの字、ハの字を示すからだといわれている。

胴形（どうがた） 男性器の茎部を補強する江戸の閨具。

胴人形（どうにんぎょう） 外国の船員などが航海中に用いるというゴムで女体を作った人形で、精巧な電気仕掛をもって自動するものもあるといわれる。わが南極探検隊が携行した噂もあった。

トオキイ 発声映画のことであるが、転じて営みの間に音声を止めないこと。「あの妓はオール・トーキーだ」などといい、サイレントの無声映画の逆の鳴物入りをいう。

ドーナツ 女学生用語でドーナツを喰べたとは、処女でないことを意味する。

伽（とぎ） お伽とか夜伽と用いる。枕席に待って慰安を与えることである。

時計（とけい） 長短二針が重なるのでコイトスを意味する。フランス語のミディは正午で、丁度二針重なる処から陰語になっている。

床急ぎ（とこいそ） 営みを待ちかねて急ぐこと、口説などの技

巧のない野暮な客に多い。

戸閉て（とだて） 鎖陰、処女膜肥厚その他で、膣口の閉じていること、小野小町の伝説から、穴無し小町などという。

ドック 造船所の船渠のことだが、女性を舟として花柳病や婦人病で入院加療をすることを「彼女、目下、ドック入りだよ」などいう。

ドッグス・ファッション 犬の交尾する型。

トップ 英語の独楽で、学生語として独り楽しむマスターベーションの意で用いられる。

土手（どて） 江戸語では浅草から吉原への通路たる日本堤を指していたが、別に女性の大陰唇を指す言葉としても用いられた。「月をみる頃に芒が土手に生え」

とぼす 営むこと、英語のファックなどが相当するのではなかろうか。灯をとぼすなどからの連想であろう。

トミイ ジョン・トーマスの愛称で、男性器を擬人化した英語の陰語。

どや 泊り場所、宿を逆にした浮浪者などの言葉からきている。山谷どや街などという。

な

中足（なかあし） 二本の脚の真中にあるも一つの足という意味で、男根をいう。

中折（なかおれ） 帽子の一種の名だが。男性器の萎縮形をいう。

なきわ節（ぶし） 浪花節をもじって、鳴物入りの感激性オール・トーキーをいう。

泣く（な） アクメに於ける感泣、美がり泣きなどの異名がある。「女房泣かんとするその声良し」

投げあみ（な） 投網ともいい、女主座形である。

なすび 子宮脱出症をいう江戸の俗語「かわらけとなすび夜湯に誘いあい」と、どちらも人に恥じてなかがいい。

七所攻め（ななところぜめ） 女躰の泣きどころである性感帯七カ所を同時に刺激するということ。

ナフタリン 虫が好かないということからきて、キザで嫌な奴をいう、キャバレの女給用語。

ナルチズム ギリシア神話のナルシッスの故事にならって、自分で自分に惚れこむ自己遂情をいう。

に

二号（にごう） 第一号夫人は本妻、二号だからお妾である。明治時代には権妻といった。

ニコチン遊び（あそび） 花柳語で二個のチンであるか、男二人に女一人のことをいう。

二世（にせ） 現在と未来の二世をかけてという相愛の場合に、二世を契るなどと用いるが、学生用語ではこの意味をそのままとって、同性愛の被愛者を指し、稚児さんに同じ。

二本指（にほんゆび） 花柳界で、女に弱い鼻下長族をいう。鼻の下が長くて指が二本並べて入るというのである。

ニューヨーク旅行（りょこう） 言葉の洒落で入浴旅行で、ある。つまり温泉マークへしけ込むことだ。

女護が島（にょごがしま） 一代男の世之介が渡ったという女ばかりの住む島で、遊蕩児の理想郷であり、吉原遊廓を指したこともある。「向島女護の島にも遠からず」などとある。

ニンフエ ギリシア神話の水を護る妖精ニンフから名づけられた女性の小陰唇のことである。

ニンフオマニア これも好淫の半獣神サチールの相手になった妖精ニンフの名をかりて、女性の淫乱症、色情狂患者になづけられた名だ。

ぬ

ヌード 裸体のこと、半裸体をセミ・ヌードなどと呼んでいる。

抜き身 刀を鞘から抜いたことだが、男性器を露出したこともいう。「間男と亭主抜き身と抜身なり」今日ではコンドームなしの場合をも云う。

濡れ 濡れ事、濡れ場などと情事をいう。「濡れの幕などで仲人返事させ」

ね

猫 花柳語では芸妓をいう。英のプッシー、仏のシャなどともに女性器をもいうが、各国とも猫を女のエロチックな陰語に使っているのは面白い。

ネッキング 頭を抱いて激しく抱擁すること。

練れる 女性器の充血して火照ることをいう江戸語である。「君がため春の野に出てよく練らせ」

の

のい 大正昭和の私娼窟玉の井の、下二字を使った略称、売春禁止で壊滅したが、玉の井は永井荷風の、「墨東綺譚」に不朽の存在を遺している。

ノオズロ 女性が下着のズロースをはかないこと、カッフェ、キャバレなどでノオズロ・サービスなどという。

のがみ 東京の盛り場上野附近をいう陰語、逆さにして読み方を変えたものだが、ノガミは男娼の森といわれて、男娼出没地として名高い。

のぞき 他人の情事を潜かに覗くことだが、鏡などを利用して隣室から覗かせる商売もある。窺きの好きな人種をボワイヨウという。

ノック 戸を叩くという英語である。転じて妊娠させることにも用いられている。

ののの字 営みの円形運動で「尻で書くのの字の面白さ」などという。平仮名ののの字である。

は

バアジン 英語の処女のこと、未通女、生娘など、男性と肉体的関係のない正銘のミスをいう。

パアマン 大阪にあるというパーマネント屋兼業の売春婦をいう。

ハアモニカ 男性が女性に対しての吸淫。

ハアレ ドイツ語の毛で、恥毛シャムハーレを略していう。

バイオレーション 強姦のこと、ドイツ語ではノートッヒスという。

パイパン 麻雀の牌の名、そのすべすべして無字の感じが、局所無毛に似ているので、映画界から流

行しだした陰語。

馬敬礼 馬でさえ、その偉大さに敬意を表するという巨大根の所有者に対する敬語。弓削道鏡とかプリアプス並の巨豪を指し、これも映画界からでた言葉だ。

バス・コン バス・コントロール即ち産児制限の略称で産制に同じ。

初花 少女の初潮である。昔は小豆飯をたいてこれを祝った。「もれ出づる月をみてたく小豆飯」

花電車 見せるだけで乗せないからの名だというが、女性器で曲芸を演じる秘密見世物、金貨ばさみ、曲書き、煙突等々の芸がある。

ハネイ ハネイは甘いとか蜂蜜の英語で、恋人や愛人をいう。ハネイムーンは甘い蜜月旅行のこと。

バタフライ 英語の蝶々であるが、外人に対するオンリー（専属妾）と違って、蝶が花から花へ飛ぶ

ように男を転々するのをバタフライと呼ぶ。またストリッパアが股間にあてる蝶形の局所覆いのこともいう。

旗日（はたび） 女子の月経日をいう、大正昭和語。

蛤（はまぐり） 女性器の陰名。「蛤の出るまで捲くる汐干狩」蛤は三月三日のお雛様に供え、婚礼の夜の膳にも蛤の汁をだす慣習がある。

張形（はりかた） ギリシアでは革製のオリスボスがあったが、江戸の女性自慰用具は水牛の角やベッ甲や張子などで作った張形である。中に湯を入れて暖める装置もあり、精巧な工芸品だった。「張形がないと中条またはやり」

張見世（はりみせ） 明治になってから禁止を受けたが、江戸時代から、遊廓では格子内に遊女が、緋毛氈の上に坐って姿を並べ、見世を張っていた。「がらがらと鳴らせば独も見世を張り」

バルバ ラテン語の女性外陰部、医学的には陰阜、陰唇、陰挺、前庭、処女膜等のすべてをさしていう。ヴルヴァとも書く。

破礼（ばれ） 川柳の末番句を破礼句という。下卑た言葉のこと。「夫婦喧嘩にばれをいう馬鹿亭主」

ハレム アラビア語の女性、一般には婦人室、即ち閨房をいう。

はんしろ 一方は全裸、一方は下半身だけ出している場合のこと。

パンティ 女性の下着の一種、ズロースと違って腰際地帯のギリギリだけを覆ったフランスのキュロット形のもの。透いてみえるナイロン・パンティあり、曜日でとりかえる七色パンティありで、現代はパンティ時代だといわれる。ストリッパーのバタフライはパンティ・ブルウという。

バンパイヤー 吸血鬼のことであるが、ヴアンパイヤーとも書き、男をたらしこむ魅力ある妖婦をヴアンプといった。

パンパン 戦後の街娼をいい、転じて売春婦全体を指すようになった。南方支那の抱という言葉からでたもので、アメリカ兵から拡った言葉である。

パンマ 熱海温泉辺りからおこったパンパン兼業の女マッサージ、即ち女按摩の略称。

ひ

火（ひ） 江戸では月経のことを火といって、妊娠を火がとまるという。「奥様の十九妾の火がとまり」火はセックスに関係が深く、とぼす、燃える、熱くなる、などの語がある。

ビイナス ギリシアの愛の女神、ヴィナスとも書き、別名アフロディット、ビイナスブルグ（山）は陰阜、ビイナス・デイジーズ（病）は花柳病、アフロデイジャックは惚れ薬、ビイナス・バンドは貞操帯である。

ヒイメン ラテン語の処女膜である。皮とか膜の意で、男性中心時代には、女の値打をここにかけて量った。処女と非処女では結婚上の商品価値が大きな開きをもっていたのである。

ピグマリオニズム ギリシア神話のピグマリオンの名からとられて、人形や偶像に惚れ込む絵像恋愛、偶像姦をいう。

肥後ずいき（ひごずいき） 肥後特産のはす芋の茎を乾燥したもので、男茎に捲くと、補強耐忍に効くといわれる閨具。「肥後ずいき七巻きまいて面を出し」

ビジュウ フランス語の宝石のこと、女性器或はクリトリスをさす陰語として用いられている。

額（ひたい） 陰阜の中央のことをいう。富士額などの言葉もある。

ビタ・セクジュアリス　森鷗外の小説の題名で知られているが、ヴィタは生命とか生活の意で、性的生活のことである。

びちゃぬるり　分泌粘液過剰の俗語。

雛先き　陰核、即ちクリトリスの江戸語で、紅舌頭などという異名もある。

日の丸　女学生用語で、旗日と同じく月経時のことをいう。

姫泣き輪　江戸時代の男性が用いる女性を悦ばせる遊戯的な閨具。

姫始め　正月二日の夜を年頭最初の営み日としてかく呼ぶ。年中行事で、この日は初夢にも当る。「その味も相変らずに姫始め」

ヒンテン　ドイツ語で、英語のビハインドと同じ、日本語の背面ということ。

ふ

ファック　英語の俗語で営むこと。ミラアの「セクサス」などにはこの言葉が使ってある。文学作品上に用いられたのはごく最近のことであろう。

ファルロス　男茎、特に非常時のそれを指す。英語ではファルスともいい、古代の性崇拝はこの状態のペニス（男茎）を祀ったのである。

ファント　女性の陰裂をいう仏俗語であり、これも「セクサス」に登場する。原義は割れ目である。

フイコ　無果花、女握りといって、親指を人差指と中指の間に入れた形を指し、女性器と営みを暗示させることば。

フイシュ・スキン　英語で魚の皮であるが、魚の腸で作ったコンドオムのこと。

フィモーゼ　男性の包茎のこと、我国の越前である。

る。

風船　コンドーム、ルーデサックなどの花柳病予防兼産制具をかく雅称する。

ブウトン　フランス語のぼたん、転じてクリトリスをいう。

ふうはあ族　鳴物入りの男女をいう。温泉マーク辺りから出た言葉であろう。

フエティシズム　性毛とかパンティとか、靴とか異性の附属物に特別の執着をもち、これを蒐集したり、愛撫することで性的興奮を感じる偏質性嗜物症をいう。

フエラチオ　尺八に同じ、男性に対する吸淫。

腹上死　営みのあいだに、心臓痲痺などを起して頓死すること。

ぶくろ　戦後の東京の新興盛り場池袋の、下の字を逆さにして用いる陰語。

巫山の夢　営みの欣びをいう。中国伝来の言葉である。

ブッシー　英語の猫の愛称から転じて、女性器をいう。

ブツシュ　英語の籔のことから、性毛群生をさしている。特別に多毛なのはジャングルと呼ぶ。

筆下し　男性が初めて童貞をやぶること、昔は役者など、少年期に先輩が指導して必らず筆下しを行ったものである。女性の水揚げに比敵する。

フラウ　ドイツ語の女のことであるが、女性一般はワイブといい、主にフラウは妻君をいう。

フラワア・ゲート　英語で、直訳すれば花の門であるが、日本語の玉の門、肉体の門などと同く女性器を美化していう稚名。

ふり　露出した素肌の意で、ふりの字にまら、ぼぼの字を付け、接頭語として用いた。

プリアプス　ギリシアからローマへかけての巨大な陽根をもった生殖農業神の名で、ポムペイ壁画に屢でてくる。その名にもとづくプリアピズムスは陰茎硬直症即ち腎虚である。

プレーヤー　演伎者の意で、実演のシロクロ、シロシロ、シロワンなどの場合にいわれる。

フレンチ・レター　フランスの手紙という英語だが、イギリス人はコンドオムをフランスの発明だとしてこうよんでいる。一方フランス人は逆にシャポー・アングレーズ即ちイギリス式帽子と称しているから面白い。

フロインデン　ドイツ語の女友達、英語のガール・フレンドであるが、情婦とか恋人の意で用いられている。

風呂敷　江戸初期の浴場で、下帯をして入湯した頃にでた言葉であるが、戦後のパンパン族では持逃げをすることをかくいう。

プロスチチュート　私娼、淫売婦、売春婦のこと。行為自体はプロスチチューション。

へ

ベーゼ　フランス語の接吻、英語ではキッス、ドイツ語ではキュスといい、我国ではお刺味、口吸い、呂の字などといった。

ペッサリー　避姙具の名。帽子型のペッサリーを子宮膣部の前へおいて膣閉塞をして、精液の進入を防ぐのである。

ペッティング　英語の愛撫、愛玩の意であるが、性器を使わないでの性愛術である。アメリカで大いに行われ、戦後我国に唱導された。

紅臼山（べにうすやま）　ドイツ語のヴィヌスベルグの訳で、陰阜のことである。

ペニス　平時の男茎を意味する。我国では玉茎などともいい、棹ともいう。

ペル　英語の呼鈴であるが、転じて半球形の女性の乳房を称する。

ヘルマフロヂツト　アフロヂットはヴイナスのこと、ヘルマは半分のこと、従って半女半男を表わしたギリシア・ローマの神の名であり、これを半陰陽即ちふたなりに結びつけてヘルマフロジチスムスと呼んでいる。半陰陽は古絵巻、「病の草子」などにも図示されている。

ほ

篷（ほうき）　女性をみるとすぐ手を出したくなる多情な男を呼ぶ花柳界語。

帽子（ぼうし）　冠せることからコンドームをかく呼ぶ。ゴムの透明さからレインコートなどともいう。

ホーゼ　ドイツ語で女の下着の一種。

ホーデン　ドイツ語の睾丸、転じて陰嚢を指し、尾崎士郎の小説「ホーデン侍従」で名高い。

干大根（ほしだいこん）　陰萎者の男茎に対する蔑称。

ホツト　英語の熱ッ熱ッとか、ほやほや、気がたっていることの意。ホットドッグは食物の名だが、情熱家をいう。

ポテンツ　ドイツ語で勃起力のこと、英語ではポテンス、精力とか能力の原義からきていて、インポテンツといえば、勃起不能症をいい、これを略してインポという。

ほと　古事記にもでてくる古代の女性器をさす言葉で、火所ともいわれている。敬称をつけてみほとなどの語もある。

ぼぼ　近世の女性器をさす俗語。開の字をあてている。

ポムペイ風　紀元一世紀のヴェスヴィオス火山の噴火で埋められた古都からでた営みの図の壁画に背面体が多いので、このラーゲをかく呼ぶ。

ホモ　ドイツ語のホモセクジュアリタート、即ち同性愛の略称として用いられている。

ポルチオ　子宮膣部のこと。

ポルノグラフイ　英語の猥褻書画、春画、春本一般を総称する語。

ボワイヨー　覗き好きの窃視症をフランス語でかく称している。女湯覗きとか、便所覗きはボワイヨー患者である。

本手（ほんて）　本取りとか、本馬などといって、所謂最も一般的なラーゲである。

ま

前どり（まえ）　向いあっているラーゲの総称。

まぐはい　古代で、結婚とか、営みを表す言葉。みとのまぐはいなどの語がある。

枕絵（まくらえ）　枕草子などと同じく、枕の傍におく、絵や本という意味であろう。性の営みを表わした所謂春画のことである。

マス　英語のマスターベーション、即ち自慰の上二字をとった略称である。

マゾヒスムス　オースタリーの小説家マゾッホの名をとって名付けた被虐淫乱症の意。つまり虐められて性的貢奮を感じるので、ヨーロッパには鞭で打たれて喜ぶこの種のマゾヒストが案外に多いといわれる。

松葉くづし（まつば）　後並びの一変形、ラーゲの名。

マミラール・オナニー　女性が豊かな乳房を以って男性に満足を与えることで、フランスにはこれに熟達した売春婦が多い。

摩羅（まら）　仏教用語から出たともいわれる。性器特に男性のものをさしている。

マリ　フランス語の亭主、英語のハズバンドと同じ。

み

水揚げ（みずあ）　花柳語で処女の雛妓などの破瓜をいう。童貞の筆下しと対語である。

密（みつ）バイト　戦後の陰語で、人妻や未亡人などの秘密で行う売春アルバイトのこと。

ミデイ　フランス語の正午で、時計の長短針が中央で重なることから営みのことをさす。

ミネ　フランス語の小猫、女性器の陰語であるが、英語ではミミという。

ミルキング　英語の授乳をいうが、転じて乳房への愛撫を意味する。

む

むきみ　剝き身で裸の意味をいう。「すわ夜討むきみで逃る馬鹿女」。秦の始皇帝を咏んだ句に「三千のむきみ一本のくしでさし」というのがある。この場合は、裸女三千であるが、単に女をさしたとしてもいい。

め

めめっこ　童女の性器に対する愛称的な語。「めめっこを突んだしておくつばな売り」

メンス　メンストラチオン、或はメンゼス、又はマンスリー・シックという月経の意で、上の三字をとった略称である。

も

もみじあわせ　江戸語をもって表すマミラール・オナニー即ち乳房利用のラーゲである。

や

やぐらどり　坐形ラーゲの総称である。

ゆ

友愛結婚　アメリカのリンゼイ判事が唱えた一種の試験結婚をもととした自由な新しい結婚型式で、社会問題として大いに論争された。

指人形　指形ともいい、爪形と同じで、小形の処女用張形。

よ

吉蔵　お定さんの相手の吉蔵の名に因んで、女泣かせの女難の相ある男を、「奴は吉蔵だぜ」という。キチゾーを、わざとヨシゾーと読む。

夜鷹　江戸の大川端に出没した玉代二十四文の下級売春婦のこと。「鷹の名におはなおちよはきついこと」

四つ目屋　江戸両国、大阪新町にあった媚薬や閨具を専門に売っていた四つ目の紋所を看板にした店。「馬鹿も重宝四つ目屋を買いにやり」今日の性具店。

ヨニ　印度語の女性器、男性器はリンガム。

夜這い　多く農村で行われてきたが、古代の妻訪いの遺風を伝え、男が女の家に通って関係する風習。

ヨヒンビン　局所刺戟に用いるアフリカの樹皮から採った薬剤名。腰髄の充血を促すためといわれる。

読和　江戸の春本の中で、絵よりも文章を主としたもの。和は笑い本の略称である。

ヨルバイト　夜だけ売春を副業的に行うこと。

鎧形　江戸時代の男性補強具で、胴形ともいい、べっ甲、水牛の角などで作った。「夜軍に小兵は鎧胃なり」

よろめき　最近の流行語で他に心を移すことをいう。「あの奥さんもこの頃はだいぶよろめいているぜ」など。

弱蔵　精力の弱い男をさしての名。

ら

ラーゲ　ドイツ語で態位、体位をいう。英語ではポジション、ポスチュアといい、我国では四十八手あるとしている。

ラブ・バイト　バイトは噛むことで、印度の性典類が盛んに書いている愛咬のこと。

ラブ・ヒルター　英語の媚薬のことである。

り

リビドー　精神分析学で性的エネルギーを表わしている言葉である。つまり性欲のこと。

リンガム　印度語のペニスのこと、リンガはその複数。印度ではリンガム崇拝は今日に到るまでつづいている。

る

ルーデサック　ドイツ語からでた言葉であろう。棒袋の意味で、明治初年にゴム製のものが入荷して

花柳病予防に専ら用いられたが、今日はサック（袋）といって避妊具になっている。コンドオムのことで、小夜衣、茎袋などの古名もある。

れ

零号夫人（れいごうふじん） 本妻の一号夫人を無視し、二号のお妾のような従属に甘んじない新型の情婦をさす新語。

ろ

ローズ 英語のバラのことで、女性器の陰語になっている。ローズブッドはバラの蕾で、クリトリスのこと。

わ

ワギナ 膣をいう。ヴァギナとも書く。ヴァジナ、シャイデ、などと同じ。

ワギニスムス 営みの間に筋肉が変調をきたして、収縮する膣痙攣をいう。営みに恐怖、羞恥をもった初心者に、心理的に作用して起ることがある。

笑い絵（わらえ） 春画、秘画、枕絵のことである。古代ではおそく図、支那では春宮図などといった。

笑い道具（わらいどうぐ） 閨具一般をいう。性についてのテレから笑いという言葉をつけて呼んだのであろう。

昭和三五年 六月 十日 印刷
昭和三五年 六月二十日 発行

著者承認
検印省略

えろちかる・ぽけっとぶっく

定価 一三〇円

著者 原比露志
発行者 山田忠雄
印刷所 共立印刷株式会社
発行所 株式会社 あまとりあ社
東京都中野区江古田一ノ二三〇二
電話・中野(381)一三八八
振替口座 一〇七五六
（久保書店宛）

乱丁・落丁本はお取替えいたします

あまとりあ風流派新書 代表作選集

あまとりあ新書として好評を得たものの中から著者自選による傑作を一篇づつピツク・アツプして集大成した華やかなアンソロジイ。バラエテイーに富んだ此のシリーズの全貌をひと目で見渡せ，しかも各冊 400 ページで 100 円という超廉価のサービス版です。

第2集 ・ 第3集

第4集 ・ 第5集

各冊 100円

粋人生 甘譚 **はりきり物語** 上田 広

のどかな地方風物の中に描き出される笑いとお色気あふれる濃厚な艶情譚。たとえて申せば芳淳な地酒の味でしようか——。

120円

実話と艶笑譚 **とかく浮世は** 瀬戸口寅雄

人世万事イロと金。セチがらいお金の話はさておき，誰しもホンワカ楽しくなる風流の道について一席うかがいましよう。

120円

艶笑人生廻り舞台 **ヘソよ何処へ行く** 村松駿吉

あつてもなくてもいゝようなモンだが，オヘソにだつて色気がある。現代庶民の愛欲を描いて興味津々たる作品集です。

130円

お色気玉手箱 **風流あけすけ噺** 久木 光

まずは開けてニンマリ，とび出す話題はことごとく読者お好みのムズムズコント・風流珍談・猟奇読みものそろいです。

120円

粋必携 艶筆 **いろごと指南帖** 武野藤介

当世の艶隠者として自他ともにゆるす著者が男女性愛の機微をとらえ，諄々と説き去り説き来る濡れごとの妙諦。

130円

いろは恋から五十 **味をおしえた女** 武野藤介

いろごとのほんとうの面白さ，愉しさ，ロマンス・グレーの年配になつてはじみてわかるこの味の円熟したうまみに酔いたまえ。

130円

送料・各冊 24 円